932-Y79ウ
1200600739510

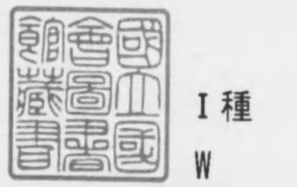
始

故早稲田大學教授 横山有策遺著
早稲田大學名譽教授 増田藤之助 校訂編修

シエークスピア研究

東京泰文社發行

932
Y79ウ



I種
W

1200600739510

序

カーライルが英國民は印度を失ふともシェイクスピアを失つてはならない、と云ふ意味のことを「英雄崇拜論」の中に云つてゐることは世人の一般に知るところであるが、尙ほ彼は同書中にシェイクスピアの大藝術に關して斯う云つてゐる——

「シェイクスピアの藝術は——造化の聲である此の貴い、眞面目な靈を通して——造化の奥底から發生するのである」

このカーライルの言葉はシェイクスピア自身がハムレットをして

「劇の目的は今も昔も云はゞ造化に鏡を捧げるにある」

と云はしめてゐるのと同意義であつて、而も其の藝術の大任務をシェイクスピア自身が十二分に果たしてゐることを雄辯に物語るものである。シェイクスピアが第二の造化翁と云はれるのも此の爲めである。近代の大批評家ブランデスが自著シェイクスピア研究の中に

「世界に名高い者でシェイクスピア程不朽な者はない。彼が人類の王と云はれるのも褒め過ぎではない」

と云つてゐるのもシェイクスピアが造化の如く偉大なことを充分裏書きしたものである。

實にシェイクスピアの藝術は造化と共に偉大であつて、造化と共に永久の生命を有する。であればこそ、世界何れの國の文學もシェイクスピアの影響を受けないものは殆んどないのである。ゲーテはシェイスピアの大なる感化を受けて、獨逸劇界の王となり、我が逍遙博士も亦シェイクスピアに親んで、我が邦劇界の大産物と稱せられるション・オケイシもシェイクスピアに育まれて、現在の地位を贏ち得たのである。彼は勞働階級に生れ、食ふや食はずの貧困中に生長し、晝夜勞働に從事し、四十歳に及んで、初めてシャヴルをすてゝ、只管劇界に進出した云はゞプロ劇作家の優なる者であるが、如何に彼がシェイクスピアの感化を受けることが多かつたかは次のやうな彼れ自らの言葉でよく證されてゐるのである——

「自分を教育した者はシェイクスピアである。苟も劇を書かうとする者はシェイクスピアの作を二つ位は是非暗誦しなくてはならない」

斯う云ふ風に考察してみると、シェイクスピアは昔も今も變らぬ偉大な魅力を有してゐて、世界の文化に世界の文學に、世界の舞臺藝術に大なる感化影響を與へつゝあることが分るのである。であるから、此の古今、東西に絶する大藝術家シェイクスピアを研究することはやがて其れが映す造化を研究させることにもなり、同時に世界文化、殊に世界文學若しくは演劇の精髄を研究することにもなるのである。

併し、シェイクスピアは造化のやうに偉大であると共に、其の精髄を掴むことが造化の精髄を掴むのと同じく非常に困難である。良きシェイクスピア研究書の必要なのはこれが爲めである。

故横山有策君は日本のシェイクスピア研究の第一人者、坪内逍遙博士の高弟

であつて、君がシェイクスピア研究に造詣の深かつたことは今更喋々するに及ばない。けれども、君が其の大なる蘊蓄は教壇以外に、新潮社發行の「沙翁傑作集」の翻譯及婦人の友社發行の「ハムレット、マクベス物語」に其の片影を僅かに現はしてゐるくらゐで、其の他の大部分はこれを覗ひ知ることがこれまでは出來なかつたのである。君が早逝を惜むと共に、天若し君に今少しでも年を借したならシェイクスピア研究の大著が世に出たであらうにと幾度嘆聲を洩らしたか知れない。所が、君が多年のシェイクスピア研鑽は吾々の知らぬ間に、君特有の輕快な妙筆に書き集め、書き遺されて、君が最も貴い形見として、書齋に遺つてゐたのである。此の貴い幾千枚かの遺稿を日本英文學界の大元老で、横山君の恩師である増田藤之助先生が門下を思ふ熱愛と、斯界の遺寶の其の儘に埋もれるのを嘆く公情とに驅られ、一年に餘る日子を費して、判讀したり、整理したり、引用文などは一々原書に照り合はせて校訂したりして、茲に公にせられることになつた。誠に學界稀に見る美談である。

此の斯界稀に見る學識の持主増田先生の手に整理せられ、校訂せられた横山君の貴い遺稿はシェイクスピアの人生觀とか、宗教觀とか、其の他種々の內面的研究から進んで、彼の舞臺技工の研究更に進んで、彼が個々の作品に就いての詳細綿密な研究に及んでゐる。此のやうに種々の方面に亙つて、よくシェイクスピアの精髓を掴んで研究したものは坪內先生の「シェークスピヤ研究の栞」以外に未だ日本の學界に於て、殆んど其の類を見ないのである。

余は此の貴いシェイクスピア研究書を得て、親友横山有策君の死せざる俤に接するのを喜ぶと共に、我が學界にシェイクスピア研究の大なる燈明を得たことを斯界の爲めに大に慶賀するのである。

昭和六年五月廿九日　　日高只一

目次

沙翁を友とするの利益……一頁
沙翁の時代……八
沙翁の生涯……一六
沙翁の作品（總論）
物語詩「ヴィーナスとアドーニス」……二四
物語詩「ルークリース」……二九
叙述詩より劇詩へ……三三
十四行短詩集……三三
劇詩人として……三五
劇の種類別……三四

劇作上の四期……三六
表現の形式……四二
劇作の年代順……四四
沙翁劇各篇の研究……四五
1「戀の骨折損」（梗概、解題）……四六
2「タイタス・アンドロニカス」（梗概、解題）……五〇
3「間違ひの喜劇」（梗概、解題）……五三
4「ヘンリー六世」上篇、中篇、下篇（梗概、解題）……五九
5「ヴェローナの二紳士」（梗概、解題）……六四
6「ジョン王」（梗概、解題）……六九
7「リチャード三世」（梗概、解釋、批評）……七三

8「リチャード二世」（梗概、解題）……八一
9「眞夏の夜の夢」（梗概、解釋、批評）……八五
10「ロミオーとジューリエット」（梗概、解釋、批評）……九五
11「悍婦馴らし」（梗概、解釋、批評）……一一九
12「ヴェニスの商人」（梗概、解釋、批評）……一四九
13「ヘンリー四世」上篇（梗概、解題）……一八八
14「ヘンリー四世」下篇（梗概、解題）……一九三
15「ヘンリー五世」（梗概、解題）……二〇〇
16「ウィンザーの陽氣女房ら」（梗概、解題）……二〇五
17「から騒ぎ」（梗概、解題）……二〇九
18「御意次第」（梗概、解題）……二一三

19「ジューリアス・シーザー」（梗概、解釋、批評）……二二六
20「十二日夜」（梗概）……二三九
21「トロイラスとクレシダ」（梗概）……二四三
22「終宜きは皆宜し」（梗概）……二四六
23「尺に尺」（梗概）……二四九
24「ハムレット」（梗概、解釋、批評）……二五一
25「リーヤ王」（梗概、解釋、批評）……三一〇
26「オセロー」（梗概、解釋、批評）……三四三
27「マクベス」（梗概、解釋、批評）……三八三
28「夕夏イモン」（梗概、解題）……四一六
29「アントニーとクレオパトラ」（梗概、解釋、批評）……四一九

30「ペリクリーズ」（梗概、解題）……四五七
31「コーリオレーナス」（梗概、解題）……四六一
32「シムベリーン王」（梗概、解題）……四六五
33「冬の物語」（梗概）……四六九
34「あらし」（梗概、解釋、批評）……四七三
35「ヘンリー八世」（梗概、解題）……四九七
沙翁と宗教……五〇三
沙翁の舞臺その他
沙翁時代の劇場……五〇九
演出の型、科白の種類……五一一
沙翁劇關係の俳優……五一三

附　錄

「アントニーとクレオパトラ」第一幕譯稿……五三八
著者年表……五六〇

シエークスピア研究

横山有策

沙翁を友とするの利益

偉大なる藝術的作品である沙翁劇を、只功利的方面から考へ、彼の劇がいかなる教育的價値を人生に有するかといふことを考へて見ると、實はそこに眞に沙翁劇の不朽である理由が、發見せらるゝと思ふ。元來『藝術の爲の藝術』などいふ語は、到底吾人の理解し得ざる處で、只藝術の標準と、教育（いかに廣義に考へても）の標準と、そこに多少の軒輊を許す外には、藝術は人生の味を豐富ならしめる一種の人間教育の材料でなくてはならぬと思ふ。

然らば沙翁劇は人間教育の一要具として、いかなる位置を占むべきか。彼を友として我々は奈何なる利益を享くるであらうか。茲に私の謂ふのは讀物としての沙翁劇をいふのであつて、觀物（みもの）聽物（きもの）としてのそれは、又別樣の考へを置かねばならぬ點がある。舞臺には舞臺に必然な藝術的又

機械的の約束がある。此約束に縛られて色々な不便を生ずる。一寸考へた所でも、沙翁劇の言語である。作の當時はあまり教育の無かつた者にも、相應容易に了解せられたであらうと思はれる言語が、三百有幾年を經過した今日では、本場の英語國でも、多少の素養がなければ、舞臺に述べられた言語をすら〳〵と明白に、腸に泌み入るやうに、一々了解は出來ぬ。よし出來ても響く力が弱い。況や我々他國人に取ては飜譯がいかに巧妙であつても、細かい味を感得する事は到底望まれぬ。讀み物として、困難は困難に相違なく、且つ母國語でない以上、ピタリと胸に響くわけには行かぬが、書齋の靜かな時間は、ゆつくり味ふ餘裕を與へてくれる。そして想像力の盛なる者には、劇といふ形式の讀み物は却て興味があるものである。無論沙翁劇は舞臺に於て演ぜられ、看客に向つて述べる爲に書かれたには相違ないが、又一方から考へると、此詩人の眞の價値が非常に世間に認めらるるに至つたのは、十八世紀以後文學として之を研究し初めてからのことである。

『作者等の願ひは、どうか沙翁のほんとの劇が、想像の力を豐富ならしめ、道德の力を强からしめ、あらゆる我儘勝手な又は貪慾な考へから遠ざかる助けとなり、あらゆる麗しく且高尙なる思想や行動の教訓となり、禮儀や、溫柔や、寬容や、人道やを敎ゆる導きとなることを、若い讀者等が後年に至つて、しみじみと悟るやうに成らんことであります。實に上に述べたやうな德目を敎ゆる實例は、沙翁の作のどの頁にも、充滿してゐるからであります』と。是れはラム姉弟が共のTales From Shakespeare に序して述べた一節であつて、此無上價の人生の寶を、一日も早く青年男女に讀ませたい、之と接觸させ度いと思ふ動機で、沙翁の作物の中二十篇を平易な文章に書きかへて此有名な「物語」は綴られたのである。恰度此ラムの述べた感想は、實に我々が沙翁を靜かに繙く毎に起こす感じであつて、何となく此寶庫を一人にて專有するのは惜しい、どうか之を開く人、享樂する人の一人でも多からんことを願ふの念に耐へないのである。

凡て文學を友とするの利益は、眼を横に廣い世界、縱に深い人生に向つて紹介せらるゝ點にある。經驗に由つて敎へらるゝ前に、若くは尋常の經驗では到底敎へられぬ人生を窺き見る點にある。但し或る種の文學に由ると、却て人生を見るの色眼鏡を與へらるゝ事がある。あまりに偏頗な看方を敎へらるゝ事がある。一例をいへば、米國のアラン・ポーなどはそれであらう。深刻な、怪奇な、幽妙な、いひ知らぬ味ひはあるが、斷えず彼を友としてゐたら或は腦の作用が變になるかも知れぬ。

イプセンなどでもあまりに陰鬱な、反抗的な色合ひに偏しはすまいか。

そこへ行くと沙翁の第一長所は、人生に對する健全な、不偏不黨な態度にある。總じてルネッサンスの作物は、常識にいふ意味に於て健全である。萠え出でようとする春早い頃の元氣な氣分で人生に對し、肉體も精神も眞直ぐに生ひ立つた者の見方である。第二は廣い看方である。高い立場にあるものは廣い天地を見渡す。茲に高い山に登つた時の如く、豪快な心持と、物に齷齪せぬ調子が養はれる。沙翁に少し後れたミルトンは、勿論人物も境遇も、時代は僅少な間隔ではあるが、ガラリと變つてゐる。彼に高さもある、深さもある。併し重には嚴肅な陰氣な四角張つた方面しか味へぬ。

第三には沙翁の作物に接すると、自ら萬人に對して同情ある看方をなせといふやうなことを學ぶ。一視同仁は宗教家や聖賢の等しく說く所であるが、我等は只命ぜられたり、訓戒せられたりしたのみでは、なか〳〵さやうな氣分に成れぬ。そこに文學の同化的教育の價値が尤も明白に現はれるので、沙翁の普き同情の光に描かれた人物に接し、性格や境遇に應じて或は悲み或は喜ぶ人生の浮沈興亡が、活き〻〻と吾人の眼底に映ずる間に、他人を見、人生を察するに只自分の狹い尺度に由るべからざる事を、次第〻〻に感得する。實に沙翁の人物が、溫き息と血とを以て、紙の間から飛び出でさうに思はれるのは、作者の偉大なる天才に由るのであるが、其天才を平たく云へば、彼が萬人に對する普く且熾烈な同情力である。此同情力の發するところ、啻に劇中の主要人物に於てのみならず、只二言三言を述ぶる許りの端役にも、チヤンと個性の色が鮮かに出て、讀者は彼れに引き着けらるゝと共に、此の小なる者にも同情すべき多くのもののあることを發見する。

面白い一例は『ヴエニスの商人』のシヤイロックであると思ふ。沙翁の先輩であり先生であるマアローの筆に成つた『モールタの猶太人』も、同じ猶太人を取扱つたものであるが、全然行き方を異にしてゐて、只殘忍刻薄、貪慾無恥、少しも憐れむべきものを見つからぬ。シヤイロックも傳說に由ると、又當時人の一般に猶太人に對した考へから推察すると、一個の笑ふべき、好い氣味だといはる可き人物に演じたものらしい。それが近代人の我々に取つて見ては、こは一種の喜劇ではなくて、彼を中心とした悲劇としてよく萬人の涙を絞るではないか。沙翁は決して任俠なアントーニオーや、怜悧なポーシヤの任俠を示し怜悧を現はす爲に、其犧牲として此老猶太人を供し終りはせぬ。若し我々皆が個樣な廣い同情ある看方を萬人に對してすることが出來れば、此人生はどんなに麗しく、どんなに平和なものに成るであらう。

第四には沙翁の樂天的な、人生の苦痛悲慘を認むると共に、正しき者に最後の勝利があるとい

ふ確信に立つた、近代で謂へばブラウニング振りの態度が非常に嬉しい。殊に彼の第四期卽ち最後期の作物は、實に哲學的であると共に宗教的である。哲學を說かずして人間の哲學を敎へ、宗敎を語らずして人生のかなたに存する世界を暗示する力は、說かれたる哲學、語られたる宗敎よりも更に力ある印象を讀者に與へる。其他凡ての時期を通じて、彼の人物は多く男性的である。少くとも男性的な人物が必ず一人や二人はある。肉體上にも精神上にも强い者が多い。我等はかゝる人物と接觸する每に、どんなにか沈める意氣を鼓舞し、屈せる志を立て直すのである。

樂天的であるから、快暢なユーモアが到るところにある。私は活社會に處するに當つて、ユーモアのいかに必要であるかは到底述べ盡されぬ程であると思ふ。試に一例として、フォールスタッフといふ一人物を擧げて見ようか。彼は「ヘンリー四世」上下兩篇に亘つて、盛に痛快なる、そして人生を悟り拔いた機智諧謔を擅にする肥大なる老ナイトである。彼は其友なる皇太子、後の英明なるヘンリー五世の旗下に屬して叛徒平定の軍に從ひ、シュリュースベリーの戰場に臨んだ。そして敵の荒武者ホットスパーのヘンリー・パーシーが、血に燃え立つ劍を振て向つて來るのを見た。さそくの機轉に彼は地に倒れて死を裝ふた。かくて勁敵の去るのを見、楯の間より覗いて謂ふには『勇氣の優等部分は分別なり』と（後揭「ヘンリー四世」の章參照）。無論眞面目に論じて、卑怯未練といはゞ夫れ迄である。併し此血腥き間にあつて、此機智を弄し得るのは、實は大なる勇氣であるといふべきかも知れぬ。大事の境に臨んで發するユーモアの氣分は、どれほど人を勇氣あらしめ、沈着ならしめるかも知れぬ。

沙翁賞讃の辭は十九世紀の批評家、學者、文豪に由つて實は盡されてゐる。盡されてゐても又自分で研究して見れば、更にいひ知れぬ味ひが、其奥にも奥にもあるやうに思はれる。獨逸の世界的詩人ゲーテが初めてシェークスピアの作に接した時、彼は新天地が眼前に展開するやうに感じて『これほど自分に大きな影響を及ぼした書物なり人物なり事件なりが一生の中に他にあつたとは思はぬ』と告白し、そして彼は其長き一生を通じて此英國詩人の作物に親しむことを捨てなかつたが、晩年に至つて又述べて曰ふ『だが我々はシェークスピアについては、迚も何ともいへない、何と言つて見ても不充分である』と。近くはゴールズワージーの如きも『シェークスピアが人類の爲めになす事は、恰かも人間が眺むべき蒼空と大海とを持つてゐる事から受けるものに稍〻似たものであつた』といつて居る。批評に耳を傾くる前に、兎に角彼が作物、大凡そ三十七種の一つ一つを繙けば一生涯忘れられぬ友が玆にあることを見出すであらう。

沙翁の時代

シェークスピアの生れたのは一五六四年四月、卽ちわが永祿七年、將軍は足利義輝であつたが所謂戰國爭亂の時代で、英雄織田信長が美濃を略取して漸く頭角を露はしはじめた年である。彼は五十二年間此世に生き、一六一六年四月に沒したが、これ元和二年家康薨去と同じ年である。故に若し彼が日本に生れてゐたのであつたら信長の興亡を見、秀吉の雄圖を見、そして德川家の礎の堅く据ゑられたのを見た事になる。

文學上には彼れの時代はシェークスピアの時代といはれるが、政治上にはエリザベスの時代である。女王エリザベスはシェークスピアの生れる六年前卽ち一五五八年に卽位し、在位四十五年、一六〇三年卽ちシェークスピアが其の偉大な悲劇に筆を執り初めた頃――「ハムレット」が書かれた頃――に崩御し、蘇國のヂェームス一世が來つて王位を繼ぐ事になつた。かくてなほ約十年間も梨園に其靈筆を振つたのであるから、シェークスピアの時代は政治上にはエリザベスとヂェームスの二代に跨つてゐるわけである。

此女王四十四年の在世中に榮えた所謂エリザベス朝の特色を一括すると、

1 好奇心知識慾の時代
- 文藝復興、古典研究
- 海外に活躍―冒險、航海
- 科學上の發見
- ベーコンの歸納法

2 誇りの時代
- 國內統一（政治的に、宗教的に）
- 國威宣揚（宗教上ローマからの獨立）（政治上スペインを壓迫した）
- 國富增進
- 女王崇拜

3 詩の時代

此エリザベスの時代の特長は何であるか。若し一言にして之を盡せといはれれば、それは詩の時代であるといへよう。歌つた時代、批評でも解剖でもない、直觀に由つて直に物の本質に達しようとした時代。時代がそれ自らを表現するのに到底散文では適切に表現し得なかつた時代である。シェークスピアの劇に於ても、人の感情思想動作が概ね詩で書かれてあり、非常に粗野なも

の、滑稽なもの、猥雑なもののみが散文に書かれるのであつた。（後掲「沙翁の作品」の章末段參照）

詩が當時の社會に充滿してゐた一例は、些事ではあるが當時の衣服からでも察せられる。羽毛のついた帽子、一尺近くもある Ruff と稱する鍔廣のカラー、色樣々な上衣、短いヅボン。リボで留めた靴下、靴、黃金作りの細身の大刀を横へた男子の風俗の華やかなのはいふまでもなく、更に驚かれるのは、それが人々によつてみんな一樣でないことである。我々のユニフォームな服に於て個性を示すことはホンのネクタイの色、ヅボンの縞ぐらゐのものである時、人々別々の衣と圖案と裝飾の衣服を着けてゐた事は、それが詩の時代の一反映と見て差支ないことであらう。

此詩の時代は何に由つて招致せられたか。詩は平和の間から來る。第一にシェークスピアの時代は平和の時代であつた。二つの大なる內亂の中間に於ける無風時代であつた。中央集權の實が上つて、一國といふ觀念の非常に強くなつた時代である。英國の文明を百年間遲延せしめたと史家の慨歎するランカスター・ヨーク兩家の「薔薇戰爭」（Wars of the Roses「赤薔薇と白薔薇の戰」）はヘンリー七世によつて調和の緒につき、ヘンリー八世に於て完全になり、その子エリザベスの時代に於てその實りを見る時代となつた。そして世界革命の魁であるクロムウエルの內亂はまだ數十年後の將來であつた。

やゝもすれば內亂の導火線にならんとした蘇國女王メリーは一五八七年に刑に處せられて斷頭臺の露と消えた。その翌年英國の獨立を脅かす西班牙の無敵艦隊（Invincible Armada）は全滅してしまつた。英國は茲に內憂外患の雲霧を散じて、久し振に麗かな平和の春に逢つた。

宗教の名に於ても、どれ程の罪惡が行はれたかわからない。エドワード六世を擁立した新教派の政治家は舊教派の政治家をどれ程殺したが。やがてメリー（エリザベスの前代の英蘭女王）の舊教政治となつた時、忽ち復讐は來つて、幾多新教徒政治家の首は飛んだ。その後を繼いだ女王エリザベスは彼女自らロンドン塔に久しく幽閉せられて、危く一命をば失ふところであつた。彼女が政權を握るに當つて大なる妥協に出たのは時の必要でもあり、人民のすべての願ひでもあり又彼女の性格でもあつた。彼女の政治は新教に由つたが、又舊教徒に對しても充分寬容であつた。

かくて、あらゆる方面に於ける國の惱みが、明君エリザベスを中心として悉く平和の解決を——少くとも一時は——見た。

平和だけでは詩は生れない。そこに大なる感激がなくてはならぬ。エリザベス朝の感激はまづ好奇心に生れ、知識慾冒險慾にあふられて、新しい鮮やかな眼を睜いて宇宙と人生を見るところに發した。

一方に時の流れを遡つて、古きギリシヤ、ローマの文化を研究し、そこに大なる詩のあるのに驚いた。他方に空間の障害を船艦に由つて破つて、そこに曾て知らなかつた大陸があり、大きな河川があり、盡きざる寶庫のあるのを發見した。(ドレーク提督の世界一周は一五七九年)。粗雜な凡庸な宗教劇や道德劇やに見慣れた眼には、かの羅典のセネカの悲劇、プラウタスの喜劇がどんなに立派な優れたものと見えたのであらう。其頃新たに知られた地球が太陽のめぐりを回轉するといふ事も不思議であれば、其頃から遠からぬ後にハアヴェーによつて發見された血液が循環して身體の營養を充足させる事も實に不思議である。

併し何よりも不思議なのは此人間である。人間の性格と感情とである。幾多の王國は興きて倒れて、幾多の偉人は榮えて衰える。その榮枯盛衰の根を深く掘つて見れば、皆その人の性格に崩してゐる。大事を成すも人、大事を破るも人、思へば不思議中の不思議は人間である。魂と超自然物との爲めに長く壓迫されてゐた人間は、再び立つて其權利を主張し其感情を吐露し、その自我を表現し初めた。シエークスピアの時代は詩の時代であるが、これは人間の詩の時代である。卽ち劇の時代である。

英語といふ方面から此時代を考へると、恰度近代英語の初めで、我々の學ぶ英語の將に確立せんとする時代にある。(六七世紀頃を其の最も古きものとすれば、それから一〇六六年ノルマンディー侯ウイリアムの英國を征服するまでの四五百年間が所謂アングロ・サクソン語又は古代英語の時代で、今日の和蘭語に最も近いものであつた。此征服王ウイリアムと其宮廷の人々は佛蘭西語を使用した。かくてノルマン・フレンチが宮廷語となり京語となり、アングロ・サクソン語は田夫野人の言語として全く蹂躪せられる事三百年、一三六三年に至り時の宰相は初めて英語を用ひて議會開院式の辭をのべた。此新しい國語こそアングロ・サクソン語でもなく、ノルマン・フレンチ語では無論なく、所謂今日の英語で、アングロ・サクソン語を父とし佛語を母として生れ出たものであつた。)

時代の相から云へば、シエークスピアの時代は正に我が安土桃山の時代に似てゐる。(近松の時代卽ち元祿の日本は遙かにデカダンの氣味が多いやうに思はれる。勿論文化文政の後の鼻持ちのならぬ敗頽氣分ほどではないにしても、好色と心中の時代なる元祿は慥に安土桃山時代の勢ひの敗頽した時代であつた。)假りにシエークスピアの時代と安土桃山の時代とをザツと比較して見ると、

1・中央集權の實擧る
2・宗教問題の寛容、不離不卽
3・國威宣揚、忠君愛國、國家觀念の勃興
4・國力充實、產物豐富、强大なる海軍の起り
5・向上の意氣、海外發展
　ドレークの世界一周（一五七九）
　米國への殖民
6・商人の時代、實力時代、都市發展時代、アントワープ沒落、ロンドン之に代る、地方の貴族沒落して宮廷中心の時代

〔エリザベス〕
天命に信賴し、忍耐、敏捷、目的に向て執着
豪華を好む—三千の衣裳、老いて尙化粧し、指輪を弄し、大使の前にて踊り若きを示す

秀吉の統一、（諸雄みな中央に出で天子を夾んで天下の統一を望んだ）
信長は佛敎を迫害したが秀吉は大佛を造營し又基督敎も許した
皇室尊敬。朝鮮を討ち、明を敗らんとしたのは珍らしい國家觀念の助勢となつた
財政豐裕
西洋諸國との交通、海外貿易。天正十年（一五八二）大友宗鱗等をローマに送る、後四回派遣。八幡船の活躍
秀吉自らの門閥打破
諸々の都市及び港の發達

〔秀吉〕
自信
角ばりたる衣裳、付ケ鬚
朝鮮の使者引見
行列、見せ物、芝居
平民的

名古屋陣の假裝行列、吉野の花見、醍醐の花見、高野詣、北野の大茶湯會、能樂
秀吉の書簡を見ても詩人の素質があつた事がわかる

卽ち此女王の御代は日本史では安土桃山時代に當るので、秀吉が天下を統一し、近代文明の端緒を造つたと同樣に、エリザベス女王も內には新舊兩敎徒の軋轢を調和し外は西班牙の欲望を挫いて眞の意味に於て英國の獨立を全うし、國運隆々の基礎を築いたので、英國が現に有する偉大さの抑〻の土臺は此時代にあると云つてもよいのである。

商業產業の發達、海外發展、國力充實、門閥打破、都市勃興などの著しかつたのも、亦此時代で、又外からはルネッサンスといふ熱が澎湃として英國に推し寄せ來り、玆に偉大なる文豪を出すべく時機は正に熟してゐたのである。狹くは彼の從事した劇の方面でも、一面に國民の劇に對する嗜好が欝然として起り、又劇そのものも次第に形を整へ始めた時代である。時代が偉人を作るか、偉人が時代を作るか、それは兎も角もとして、沙翁が生れた當時の英國は、正に全國民の充實した華かな元氣を代表する文豪の生れるのに最も適當してゐたのである。

沙翁の生涯

世界に無上價の寶庫を遺してくれた此大文豪の一生涯は抑〻どんなであつたらうといふと、遺憾ながら之を傳ふる材料に甚だ乏しいのである。これは彼れの沒後に起つた内亂などの爲に色々な文書の湮滅したにも由るであらうが、又日本でもその通りだが、當時は兎角帝王武人などを傳ふるに詳しくして、文學者だの思想家だの〻經歷を疎略する傾向のあつたにも由るので、沙翁も彼を知る者の間には、其文才其性格を大に尊敬せられてゐた證據は殘つてゐるが、廣く世間には今日の如き名聲は勿論なかつたので、從つて詳しい事跡が傳へられなかつたのである。

彼れが呱々の聲を擧げた處は、英國の中央なるウォーウィックといふ平原州の、その又中央のエーヴォン河上のストラトフォードといふ町で當時人口二三千許りの田舍の小都會である。時は一五六四年四月二十二日又は三日で、英國史上珍らしい名君エリザベス女王卽位後六年目である。

父はジョン・シエークスピアといひ、祖先の家は此町より東北四五哩許りの田舍の小百姓であつたが、貧しい小作人で終るのを惜んでか、一と旗あげるべく此ストラトフォードの町に出で、

農産物の問屋をしたり、羊毛商を營んだり、屠牛業をしたりして次第に家產を作り、程なく地方の豪農の末女でメリー・アーデンといふ婦人と結婚した。わが詩人は此二人の間の三番目の兒で名をウイリヤムと命ぜられた。前の二人は女の兒で而も早死したので、事實上彼は總領として育つたのである。次で三人の男の兒と、二人の女の兒が生れ、中々立派な子福者となつた。そして父は次第に町の人々の信用を得、色々の公職に就き、一五六八年ウイリアム四歲の時には町長に擧げられた。

ウイリアムの教育に就いては、確かな記錄が殘つてゐないが、當時此町には文法學校（グラマースクール）と名づけられた今日でいふ小學校があつたから定めし之に通學したであらう。通學してゐたら其學んだ學科は拉典語の文法、論理學、修辭學の初步の外に多くは古文學で、日本でいへば寺小屋などでやつたやうに實際のことにかけ離れた漢文の素讀や解釋などに類したものである。そして子供の教育には今日の目からは似もつかぬ古典の大家などの文を少々ながら讀み習つたのである。併し此學校生活はあまり長からぬので、滿七歲に入學したとして十三歲頃には最早學校を退き、父の業を助けてゐる。是は當時の習慣にもより、又此頃には父の家業が非常に衰退して借金は出來、町の公職にも就いてゐられぬ狀態となつたので、長子たる彼れは通學を止めて、幼年の細腕ながら

家族の多い父を助けたのである。それから以後は少しも教育らしい教育を受ける餘裕が無かつたので、家業の片手間に夜を更かして獨學勉強した事と想像せられる。而かも後年に至つてあの様な大作をなし、英文學史上前後を通じて沙翁ほど澤山な異つた語を使用した者は他にないと謂はるゝ程、用語の豐富を得たのは、勿論凡人の及ばざる天才の然らしむる所とはいへ、又秘かに苦心し努力した事も夥しかつた事と思はれる。傳はつてこそゐないが、人知れぬ苦學談は彼れの少年時代にも必ずあつたことであらう。沙翁劇中にも數ケ所少年青年時期の苦しい事が述べてあるのは、或は彼自らの經驗を謂つたものかとも考へられる。そして幼にして文才の卓越してゐたことについては色々の逸話が殘つてゐるので、父の家業の屠牛に從事しながら、立派な詩句を以て牛豚を屠るの詞を述べた事や、土地の貴族のあまりに峻嚴なるを諷した詩を作り、大に其怒を買つた話などがある。それでゐて又一面には快活に陽氣で、町の若者共と罪のない惡戯をした事なども傳說に殘つてゐる。

かくてウイリアムは滿十八歳に達した時、隣村の農家の娘アン・ハザウエーといふ女を娶つた。そして其翌年には女の兒の父になつてゐる。今日に較べると當時は誰も早く成人したには相違ないが、何にしても頗る早婚で、或意味から云へは天才の早熟を示すものと見られよう。そして此夫人は詩人よりも八歳の年上で、古來偉人に年長の夫人があつた例として、此沙翁と、今一人は回々教の開祖マホメットとが引合ひになるのである。夫人の年長者であること、當時彼は尙十八歳の青年であつたこと、長女生誕の早きことなどからして、駈落であるとか、父母の許可は得たが婚約の女が姙娠したので急に取纏めたのであるとか、此の結婚に樣々な臆說が生ずるのであるが然し之を以て失敗せる結婚と考ふべき何等の理由はない。新夫婦の間には越えて翌々年双生兒が出來た。

一家の財政上より見ると當時は不如意の極點にあつたらしく、父は多くの子女を抱いて惡戰苦鬪を續けてゐるし、新たに妻を持ち父となつた彼も、いつ迄も此田舍町に居ては到底苦境を脫れ、父母を安心せしむることも出來ぬといふ考を次第に抱いたらしく、遂に一五八六年、齡二十二の頃幼兒三人を妻に託し、決然故鄕を去つて首都ロンドンに向つたのである。當時ロンドンは二十五萬足らずの人口を有する、今日よりいへばあまり大なる都會ではなかつたが、兎に角和蘭の首都アントワープの陷落後世界通商の中心地となり、集まれる富と共に夥しく活氣に充ちてゐて、男子正に志を成すべきの所であつた。

彼れは此首都に來り、先づ誰を賴り、又何をしたらうといふ問題に就いては樣々な傳說はある

が、確かな證據は一つもない。貴族ルーシーの鹿を盜んで故郷にゐたゝまらなくなつた話、旅役者の群に投じて、共儘町を後にした傳說、オクスフォード附近で彼が休息したといふ宿の事、乃至首都に出づる前に小學校教員を勤めた話、首都に出て法律家の書生となつた話など、何れも眞僞未定、恐らく不可定の臆說であらう。彼が梨園に關係するに至つた最初の逸話も同樣に根據はない。何にしても片田舍から飛び出した貧乏な青年であるから、賤しい業をも厭はず樣々に苦心した事であらうと察せられるが、兎に角自己の興味と才分との最も多くあり又無名の一寒士が一番早く世間に名を知られる場所として、劇場に關係したらしく、田舍を後にしてから五六年目には既に伴優として又作者として立派な名聲を博してゐた證據がある。『偉大なる思想家、哲學者、豫言者は模倣に値ひすることを、最も模倣し得らるゝやうに模倣した人物である』と或學者は云つてゐるが、いかなる天才も自己獨特の天才を發揮する前に、必ずよき師に就きて深く學ぶ時代がある。藍より出でて藍より濃き所に其人の偉大なる點があるので、初めから師のなき手本のなき偉人は決して居ない。沙翁も其如く初めは當時の大劇作者の弟子となり、其作の手傳をなす間に次第に劇作の骨法を覺えたものと見える。

爾後彼の活動は洵に驚嘆するの外ないので、筆硯に親しむこと前後二十年間に、著すところの劇合せて三十七篇、長詩二篇、短詩（ソネット）百五十四首。俳優としても殆ど座頭として活動し、女王の御前に演じた事も再三あつた。

若うして貧苦を嘗めた彼は、一方には、斯く活動して得たる金錢を敢て浪費することなく、彼れの先輩が飲酒放埒の間に天壽を縮めたのに鑑みた爲でもあるか適當なる思慮を物質方面にも用ひて餘財を蓄へ、故郷にもロンドンにも家を購ひ土地を買ひ双方に立派な邸を構へて、父母を慰め一族を養ひ、遂には父の乞ひに任せて家門の紋章を政府に出願し、富み榮えた紳士として鄕黨に推重せらるゝに至つた。彼が大なる常識の結晶と呼ばれるのは實に所以あるのである。

早熟なる彼れは其四十七歳の時には既にロンドンを退き、故郷の閑靜な町に隱れて靜かに餘生を樂んでゐる。不幸にも男の兒は夭折して家を繼ぐべき者は無かつたが、長女は沙翁四十三歳の時に町の醫師なる人に嫁し、翌年には初孫が出來た。次女が友人の子に嫁したのは一六一六年沙翁五十二歳の二月で、此頃には彼れも大分健康を損ねてゐたらしく、其年の正月に遺言狀を認め三月に又之を訂正し、そして月を越えて四月二十三日に、此偉大なる雄魂は天に歸つた。行年五十二。葬儀は二十五日に行はれ、ロンドンから多くの友人知己が會葬し、町のツリニチー教會に葬つた。

未亡人は生き殘ること七年、一六二三年に逝き、詩人の墓側に葬られてゐる。そして此年には今も世界中幾萬の人の年々參拜する彼れの有名な記念碑が寺に立てられ、其前面に半身像が置かれた。併し此にも增して沙翁を不朽に傳へるものは、同じ年に其友人共によつて出版せられた全集で、所謂『第一フォーリオ』版といはれる大きな二ツ折版がそれである。作者存命中にも其作物は色々出版せられ、其中には隨分版を重ねたものがあるが、尤も正確な纏つたものとして今日我々の讀む沙翁全集の土臺となつた書物（約百頁の二段組大本）は是れである。

一市民としての沙翁の傳記の材料となすべきものは、以上述ぶるが如く極めて稀少である。而して其の稀少なるものゝ吾人に與ふる印象は、極めて平板な凡俗な、何等偉大なるもの、何等詩人らしきものゝなき生涯である。而つて其不朽の記念品なる作物に轉ずれば、玆にはあらゆる人生の思想、感想、興亡、善行、罪業が、まざ〳〵と淨玻璃の鏡にかけたる如く、吾人の前に轉回する。一字一句の間に生きた血の色、肉の溫みが感ぜられる。此人と此作と、何たる懸隔であらうぞといふ樣な感が動機となつて尤も笑ふべき、沙翁はベーコンであるの、サー・ウオルター、ロウリーの變名であるなどいふ奇說が立てられる。それらは只奇說として面白がられる外に價値のないものであることは論ずる迄もない。

沙翁は其生前に於いて、今日の如き無上の賞讃は得なかつたにしろ、其隣人に、其友人に、又其同時代人に愛せられ、尊敬せられ、又文才を賞揚せられてゐた事實は、色々の根據に由つて論證し得らるゝ所である。其死後に於ける名聲は日一日と重きを加へ、曾て斷絕するところなくして今日に及んでゐる。大まかに云へば十七世紀から十八世紀の初葉にかけては、勝手な解釋と亂暴な改訂とを沙翁劇に下した時代で、それから少しづつ眞に理解せんとする研究の緒口がつき、十八世紀の中葉から十九世紀にかけて、非常な沙翁熱の勃興があつた。名優も數多く輩出し、詩人文豪などの熱烈な崇拜の聲も所々に起つた。二十世紀は之を以てあまりに主觀的な態度となし、彼の時代、彼の舞臺、彼の觀客と結び付けて、眞の此大劇作家を味はうとしてゐる。

沙翁の作品（總論）

物語詩「ヴィーナスとアドーニス」

シエークスピアが筆を染めた處女作は何であるかといふに、たしかな記録の徵すべきものなく、學者の推定して說くところ多樣にて容易に一致點を見出し兼ねるのであるが、其の自ら名を出した最初の出版は、「ヴィーナスとアドーニス」Venus and Adonis と題する長篇の物語詩で、一五九三年四月十八日の日附で彼れの同鄕人リチヤード・フィールドといふ出版業者が出版願を出して許可せられた記錄が存してゐる。此の詩の卷頭に作者が眷顧を蒙つたサウサムトン伯(Earl of Southampton) に捧ぐる獻本の辭があり、それに William Shakespeare と署名してある。サウサムトン時に二十歲、宮中一の好男子の噂高く、且つ寬大な文學藝術の保護者であつた。此獻本辭中「わが創作の初ひ兒」The Firs Heir of my invention とあるので、出版は此年でも、書かれ若くは考案されたのは大ぶ前で(ブランデスは一五九〇—九一とす)眞に最初の作であるといふ說と、當時は劇を以て立派な詩作と考へなかつたから、其以前に彼れに劇の作がなかつたといふことの證據にはならぬ、以前に劇作はあつても之を念頭に置かなかつたので、此以前に劇作があつてもそれは問題にならぬといふ說とある。

此物語詩（總行數一一九四）は羅馬の詩人オヴィッドの「變形」Ovid's Metamorphosis に負ふところ、又直接には一五八九年公にせられた Lodge's Scillas Metamorphosis に負ふ所が多いと云ふ。「女神ヴィーナス美男の牧者アドーニスを戀す、アドーニス聽かず、狩に行き、猪の爲に殺され、その血から花が咲く、白頭翁（おきなぐさ）(Anemone) がそれである。ヴィーナスは戀を呪ふ」といふ筋（神話では、ヴィーナスの悲み甚だしきに神が同情を表し、數ケ月間アドーニスの地上に留まるを許す)。

さすがにルネッサンスの英國を語り、伊太利への憧憬を示して華かな映像、韻律の妙味がある。一五九〇—一六〇〇年に戀歌の流行したのに投じすぎて、あまりに淫蕩なといふ非難も全然無根とはいへない。その世界は夢とロマンスの世界である。而かも描かれた姿は明白な浮彫である。戀の香りがむせ返へるほど強い。ヴィーナスは接吻抱擁、あらゆる嬌態をつくして少年の何もわけの分らぬアドーニスを誘惑する。遂には牡馬を追かけて行く牝馬の光景さへも加へてある。怨みのヴィーナスは下の如き戀の豫言をする。どこかに深い意味があるやうに思はれる。——

'Since thou art dead, lo, here I prophesy
Sorrow on love hereafter shall attend:
It shall be waited on with jealousy,
Find sweet beginning, but unsavoury end;
　Ne'er settled equally, but high or low;
　That all love's pleasure shall not match his woe.

'It shall be fickle, false, and full of fraud;
Bud and be blasted in a breathing-while;
The bottom poison, and the top o'erstraw'd
With Sweets that shall the truest sight beguile:
　The strongest body shall it make most weak,
　Strike the wise dumb, and teach the fool to speak.

'It shall suspect where is no cause of fear;
It shall not fear where it should most mistrust;
It shall be merciful and too severe,
And most deceiving when it seems most just;
　Perverse it shall be where it shows most toward,

'It shall be cause of war and dire events,
And set dissension 'twixt the son and sire;
Subject and servile to all discontents,
As dry combustious matter is to fire:
　Sith in his prime Death doth my love destroy,
　They that love best their loves shall not enjoy.'

「汝既に逝きたれば、見よ、茲にわれ豫言す　（一一三五行から）
　足れよりして怨は戀にかしづかん
　嫉妬をもてはんべらせん
　初め麗はしくして、やがて苦き終りとならん
　　仲で一たびだに均合よく安定することなく、あるは高く、あるは低く
　　戀のすべての快樂をもて、その惱みには及ばさらん。

そは定めなく、僞りふかく、又奸智に滿ち、
蕾むと見し間に、やがて凋む
底に毒を盛りて、しかも頂きに蒔き散らされしは
誠ある眼を欺むくの甘さ。
いと强き肉體をも、いと弱きものとなし
賢きは啞の如く、愚者こそ却て語れ。
（此次一節略）
怖るゝ所以なきに疑ひ
いと懸念すべきに更に怖れず
慈悲に過ぐる事あれば、又苛酷に過ぐる事あり
いと正しく見えて、こよなき僞はりもあらん
いとすなほに見ゆるところ却て曲り
勇氣あるものに怖れを抱かしめ、心臆したるものに勇氣を與ふ。

戰ひと又戰慄すべき事件は之が爲に起り
父とその子の間に不和生ず
あらゆる不平不滿の源泉たらんこと
乾ける爆發物の火に於けるに似たり。
死はわが戀人を花の盛りに亡ぼしたれば
いと深く戀するものも、その戀を樂しましはせじ。

實際ヴィーナスの此呪が實現されたかのやうに、最も美しかるべき「愛」に斯樣な多くの罪がつき纏ふのは何故であるか。沙翁の「愛」のドラマはある意味に於てそれの解決でなくてはならぬ。狩の場の猪と馬の記述は、いかに彼が緻密な觀察者であつたかを示し、詩のうちに見る珍らしい寫實的な描寫である。

物語詩「ルークリース」

翌一五九四年には「ルークリースの辱かしめ」The Rape of Lucrece が出版せられた。同じく

サウサムトン伯に獻げられ、珍らしい友情が此兩人――當時では餘程懸隔ある社會上の地位であつたが――の間に既に成立してゐた事が認められる。物語は矢張オヴィッドに發してゐるが、チョーサーも「善女物語」Legand of Good Women に歌ひ、沙翁同代人も多く歌つてゐる題材である。即ち其荒筋は「羅馬の王子タークィン、貞淑無比の聞えある、一武將の妻ルークリースの美貌に心動き、一夜その良人の不在に私室に忍び、强ひて其操を汚して去る、ルークリースは憤りと悲みを父と夫に訴へて復讐を求め、自刄して死す、タークィンの一族は遂に衆怨の府となつて追放さる」といふにある。

此詩（總行數一八五五）は外形に於て、「ヴィーナスとアドーニス」の六行に一行を加へて七行とし、力と美とを加へたが、只それだけではない。テーマの大いに異つた長詩である。此は男子の獸的情慾の研究として、前の詩の、女子の報はれない愛慾と對してゐるとは云ひ條、此篇ではタークィンはホンの從位に屬し、不當な取扱ひを受けた婦人の苦しみと、それに打克つ魂の强さとの研究で、もはや前のヴィーナスの詩の、みだらはしい木精の花のやうな匂ひは更にない。後に「シムベリーン」や「冬の物語」などに見る强い女性の解釋の先驅をなしてゐる。

描寫の妙味は、いつもながら潤澤で、殊にルークリースがトロイ落城の光景を想ふ一條りは靈活な寫實である。やはり、遠くはチョーサーから近くはメースフィールドに至る story-telling の英文學の一特長は、シェークスピアの完全に有してゐたところである。

叙述詩より劇詩へ

以上の二詩篇は少なからず歡迎されて度々版を重ね、叙事的詩人として作者は十分に其才を示し、其文名大いに揚つたが、殊に「ヴィーナスとアドーニス」に至つては、非常な人氣を博し、彼れの初期の同時代人が彼を以て「美辭家」honey tongued といふのは多くは此詩のためであつて、流行を追ふ婦人にして此詩篇をもたぬものはロンドン中にゐなかつたとさへ云はれた。然るに彼が此流行に乘つて再び斯樣な詩を作らなかつた事は、何となく意味深いやうに思はれる。或は物語詩人として同時代の詩宗スペンサーに及ばぬことの自覺もあつたものか。兎に角、彼れの本領は別に他にあつて存する、即ち劇詩の方面に在る。つまり、シェークスピアのシェークスピアたる所以の壇場は、劇を措いて他にはないのである。

今、劇作家としてのシェークスピアの事に入らんとする前に、尙ほ一つ言ふべく殘つてゐるのは、彼の Sonnets(十四行短詩集)である。其の一トまとめにして出版せられたのは一六〇九年であるが、一五九八年頃にはより〳〵寫本の儘友人間に讀まれてゐた證據があるので、恐らく彼が作者としての二十年間に、折に觸れ、事に應じて書き連ねた述懷であらう。總數百五十四篇あつて、其中には若き華やかな時代を連想せしむるものもあれば、深き悲痛の調子を帶びたものもあつて、深き心の反影を玆に認め得るといふ定評である。蓋しソネットといふ詩體は抒情詩の一形式で、エリザベス時代の英詩人の喜んで用ゐたもの、之を試みて成功した詩人は殆んど第一流の詩人にのみ限られて居り、隨つて其成否は大詩人たると否との一試金石とさへ見做されるが、沙翁がソネットに於けるは、當時流行の詩の一形式を喜び模倣したといふに止まるのではなくて、ダンテ・ゲーブリエル・ローゼッティをして「構想(コンセプション)――基本的な頭腦作用――こそ凡ての藝術に於て等差を作るものである。如何なる形式も之を用ふる頭腦の働きの如何によつて非常な優劣を來たす。シェークスピアのソネットは形式の最も完全なものよりもよい、そはシェークスピアが書いたから」と激賞せしめたくらゐである。

劇詩人として

扨て沙翁當時の劇作の有樣を一瞥するに、遠く十二三世紀頃に起源を發した靈異劇(ミラクルプレイ)、神祕劇(ミステリイプレイ)、道德劇(モラルプレイ)、それから間劇(インタルード)、年代紀劇(クロニクル)などいふ色々な經路を經て、少しく形をなしかけて來た英國劇壇が、十六世紀の初葉に於て外國文學及び古文學の影響を受け、俄然として種々の試みを見るに至つた。而してそは畢竟試みであつて、未だ劇文學として一個の完全な定型を備へたものでなく、謂はば筋の進むが儘に、若くは作者が筆の向ふにつれて書かれた對話に過ぎない觀がある。中にも最も名高きは、典雅な抒情詩風な、そして輕快なジョン・リリー、血腥き、肉體的恐怖を催さしむるトマス・キッド、傳奇劇の試みをなして流暢快活の筆に人氣を集めたロバート・グリーン、殊に『力ある句(マイチーワーズ)』を用ひて痛烈なる悲劇を作り、又初めて白韻句(ブランクヴァース)を試みて成功せしクリストファー・マーローなどで、沙翁も其初めは上記の人々の中最後に擧げた二人に影響せられ、殊にマーローとは殆ど師弟の關係があり、合作もあると想像せられてゐる。如何なる天才にも、先輩の模倣時代はある、たゞ之を突破して獨創に入るか否かゞ問題である。(我が近松にも古淨瑠璃の模倣がある。)

劇の種類別

かくて彼れが段々に書いた劇の種類には、史劇もあれば、喜劇もあり、悲劇もある。先づ第一に、史劇は作者二十六歳の頃より三十五歳の間に書かれ、英國史中の著名なる君主を主題とし、陰謀、軋轢、戰爭を經とし、之に色々滑稽な人物や、悲哀なる物語を緯として成つたものである。そして何れも愛國、忠君の熱に滿ちて居ないものはなく、皆當時英國が西班牙の無敵艦隊を破り蘇國のメリーの陰謀を挫き、上下を擧つて母國を熱愛し、女王を崇敬する感情に滿ちて居た時代精神を代表し、國民に代て大英國讃美の聲を上げたものである。此史劇中に數ふべきものは合せて十篇あるが、我々外國人で英國史の背景に親しみの深くない者にさへ、興味を唆るほどである。多くは作者が初期にものしたので、誰の習作時代にもありがちな誇張や多辯やがいはゞ缺點としてあるが、あふれる程の天才、はちきれるばかりの力は讀むからに心地がよい。

次に、喜劇に屬すべきものは大凡そ十四篇ある。華やかな戀と詩との天地で、綠の濃かい匂ひのすぐれた夏の野邊に譬へられよう。赤、青、紫の絲は十重に二十重にもつれはするが、やがて解けて樂しい大團圓に歡喜の舞踊となる。其中九篇許りは快活な面白い筋と文辭との物で、本で

讀んでも芝居で見ても、氣持のいゝ樂しい人生を味はせる類のものが多いが、餘の五篇は最後が目出度く收まるといふ點に於てのみ喜劇で、其全體の色合ひは寧ろ寂しい、沈んだ、灰色の人生を見せてゐる。

次に、悲劇は作者三十八歳より四十五歳頃迄の作に係り、合計七篇、怖ろしい人生の深味が殘る隈なく探られてゐる。悲劇は霜と氷の多である。咲きかけた花もしぼみ、暖い小春日も永く續かず、運命の嵐は強く鋭く荒すさむ、涙が常のすがたであり、死のかなたにもなほ恨は盡きず纏綿する。

これら三種の外に、尙ほ所謂る浪漫劇なるものがある。こは劇の形式を借りた浪漫的（ロマンチック）な小說といひ知らず麗はしい花野をぶら〳〵と逍遙するやうに感ずると譬へた。類ひなく美しい。何といふ詩の橫溢。そしてどことなくノンビリして、悠揚として迫らず、全體を引締める調子は寬裕の精神に覆はれてをる。若し作者が悲劇で筆を留めたならば、彼れの人生觀は頗る悲觀的で、我等は運命の手に擒縱せらるゝ人生を寧ろ呪ふの感を起すのであらうが、幸に其の最後の作物として、第四種の浪漫劇があり、之れに接して吾人は自ら人生の解脫を學び得るのである。

沙翁劇の天地は廣い。登場の人物千人に近く、主要の役を演ずる者丈でも百二三十人はある。此中には王、貴族、善人、惡人、愚黨、愛國者、僞善者、若き戀人、老いたる厭世家、武人、勇士、意志の强きもの、弱きもの、感情の鋭きもの、鈍なるもの、金貸し、忠僕、學者、奸婦、狂人、殆どあらゆる種類、あらゆる階級、あらゆる樣式の人物を網羅し、而かも其人々が吾人の面前に血と肉とを以て跳り上つてゐるのである。彼れに冠せらるゝ「萬魂の」myriad-minded といふ形容詞まことに空しからず。

劇作上の四期

なほ以上の四種を通じて、沙翁の劇作的生涯をば、大方の學者の略々一致せる所に從つて、四期に大別して考へて見ようか。

第一期　一五九〇年から九三年に至る三ケ年で、史劇に於て『ヘンリー六世』の上中下三篇、『リチャード三世』、『ジョン王』を含み、喜劇に於て『戀の骨折損』、『間違ひの喜劇』、『ヴェローナの二紳士』の三篇、悲劇に於て『タイタス・アンドロニカス』を有してゐる、いはゞ試作時代である。此時代の作はさすが大天才の青年時代である丈けに瀟洒たる詩と想との湧發に驚かされるものがあるが、全體として疵が多い。第一に組立がルーズである、緊密でない、しつくりしてゐない。物語があまり複雜してゐて、うつかりすると誰が誰か、何が何か判らぬやうな場合もある。悲劇はかのキッドの『西班牙悲劇』を想起せしむるやうな、雜駁な、そして無殘な出來事の連續である。史劇『ジョン王』は古い劇の改訂であるかも知れず、『リチャード三世』にはいたくマーローの匂ひがある。作者の獨創力の發露が大分窺はれるのは喜劇であつて、或は面白き會話や、滑稽な仕組や、或は入組んだ事件を巧に取扱はうとする技巧の面白味や、或は多少性格の發展に注意した點や、『仕事場(ワークショップ)に於ける』(ダウデンの所謂る)沙翁の腕がそろそろ冴えてくるのが見える。

第二期　前期の史劇『ジョン王』に於ても、勇ましき愛國の聲は、暗黑な此劇に一道の生氣を與へると共に、又大敵國を破つた當時の英國々民全體の聲を代表してゐるが、此愛國熱の反響は第二期に於て頂點に達し、『リチャード二世』より『ヘンリー四世』上下二卷、『ヘンリー五世』の四篇を有してゐる。故に此第二期は、一面に於て史劇時代とも謂へるが、又其他面には『眞夏の夜の夢』、『ヴェニスの商人』、『悍婦馴らし』、『ウィンザーの陽氣女房』、『空騷ぎ』、『御意のまゝ』、『十二夜物語』の最も愉快な喜劇七篇を出せる快活なる喜劇時代とも呼べる。準備時代に於て錬へ上げた腕を持つて、仕事場から廣い『世間』に出て見る。愉快な活躍せる人生が目の前に展開する。愛國

の血に湧き立つ陰には、夢のやうな戀物語がある。茲に陽氣な、そしてロマンチックな時代となつたのであらう。夢のやうな戀も時に冷刻な運命の手に弄れて、いぢらしい最後となる事もある。此時期に當然加ふべき『ロミオーとジューリエット』の悲劇は正にそれである。此時期のも一つ他の悲劇は『ジューリヤス・シーザー』で、後の偉大なる性格悲劇に連絡してゐる。年代より云へば此第二期は一五九四年より一六〇一年に亘る七年間で、作物合せて十三篇、當時存在してゐたあらゆる形式の劇は、最早嚢中に物を探るが如く自由自在となつた。作者の年齢は三十歳より三十七歳に至る壯年の男盛り。

第三期　一六〇一年より同じく九年に及ぶ八年間で、十一種の劇を含む。其中史劇は一篇もない。エリザ女王の崩御と共に、狂熱的な愛國心も次第に冷却し、又取つて詩化すべき材料もなくなつたのであると解釋せられてゐる。此時代は正に悲劇時代と稱すべきもので、『ハムレット』『オセロー』、『リーヤ王』、『マクベス』と相次いで出でたる所謂沙翁の四大悲劇は、何れか涙を絞り腸を抉り、身も家も將た天地をも破り覆へす底のものでないものはない。此當時沙翁はハムレットの眼を以て世界を見たか、それ共當時の看客の要求に應じて、かくの如き深痛な聲をなしたか。恐らく兩者何れも事實であつたらう。稍後れて出でたる『アセンスのタイモン』、『アントニーとクレオパトラ』、及び『コーリオレーナス』の三篇も其力に於て其深さに於て、多く劣れるものではない。此期の喜劇に數へらるゝ『トロイラスとクレシダ』、『終宜きは總て宜し』、『尺に尺』の三篇も、作者が目出度き大團圓のため、深き注意を拂つて材料を取扱つてあればこそ、我等は少しく安堵の吐息をつくのであるが、其深刻なる言語、暗黑なる結構は、之を第二期の快暢（のんき）な喜劇と比較して、何たる相違であらうぞ。此人生の『深處（ディプス）』に突入した作者は此期の終りに於て四十五歳である。

第四期　人生問題の深い深い奥處に潜り込んだ作者は、そこを探り終つて向ふ側に浮び出て、こゝに理想の『高處（ハイツ）』に立つて人生を下瞰してゐる。此時期に屬する劇の主人公は皆一時浮世の荒波に揉れ揉れてゐる。そして其間に立つて確く最後の勝利を信じ强き忍耐を以て騷がず、いらつかず、よく屈しよく耐へて、遂に其目的を完全に成就してゐる。『シムベリーン』、『冬の物語』、『あらし』の主人公皆然り。此三篇は第一フォーリオ版全集の區分に倣つて一般に喜劇の部に屬せられてゐるが、其妥當でないのは何れの學者も稱ふるところで、多くは之に劇的傳奇小說（ドラマチック、ロマンス）の名を與へんとしてゐる。卽ち上記種類別の中に於て一言した所謂る浪漫劇である。この浪漫劇なるもの〻由來について茲に稍や精しく說明を費して見たい。——

シエークスピアは廣く人生を見た。人生のあらゆる喜怒哀樂の根柢に觸れた。心臟を突然凍らせてしまふほどの人生の冷たさも、天をこがすやうな欲情の悽じさも、皆了解し解剖し又取扱つて來た。戀の甘さ、友情の美しさ、心からの笑ひの樂しさも無論味つて來た。併し人生は更に廣い、更に深い。既に浪漫的詩人として作者の筆は、希臘の古典に則らない極めて自由な放奔な人生の喜びと悲しみとを寫してゐるが、併し久しく人生を觀察するにつけ、そは悲劇と銘をうち喜劇と貼札をするものに含めるべく餘りに多種多様である。そこで人生を如是に寫す態度を徹底せしめたのが此浪漫劇なるものの成つた一つの原因と思はれる。

第二には、觀察と技能の圓熟と共に作者の角が全く取れて來た。先には或は大に笑ひ大に泣き大に悲み又大に怒つた。その怒るや髮天を衝き現在の秩序を傾伏し盡さねば止まぬ趣きがあり、悲しみ泣くや、幕畔の柳の雨に打たれてゐるやうに、冷たい涙は地の底に底に沈んでゆく、そして大に笑ひ大に樂しむや春風に胡蝶の舞の輕さと鮮やかさがあつた。けれども作者はそれに疲れた。むきに成つた態度が緩んで來た。さう緊張し切つたのみの人生ではないといふ心持が生じた。そこに浪漫劇は生れたと考へられる。

斯樣にして、「ハムレツト」に於て理想と現實の痛ましい衝突を示し、「オセロー」に於て愛と嫉妬の矛盾に怒り、「リーヤ王」に於て人生の最も基礎的な感情——親子の愛——に於ける幻滅の悲劇を描き、「マクベス」に於て限りなき欲望と遂せられたる欲望の痛ましさを泣き、「アントニーとクレオパトラ」に盛り過ぎての癒ゆべくもあらぬ戀の病の救はれぬ破局を哀れんだ作者は、茲に心機一轉して大悟、大安息の處に出て來た。そして書いたのが此等三篇の「劇的ロマンス」である。

浪漫劇の特長を擧げると

一、自由である。どの規則にも縛られず、思ふまゝに空想の趣くまゝに筋が運んである。そして時に作者は只自分を喜ばせる爲めに、聽衆をでもなく、批評家をでもなく、後世の人をでもなくたゞ自分が好むからといふので、ぶらぶらと詩の境域を散歩してゐるやうな處がある。

二、原因結果の關係が輕く取扱はれてある。例へば、「オセロー」や「マクベス」に於ては甲の原因が乙に及び、やがて丙に結果する、其連絡の樣が誠に嚴しい。けれど實際の人生はそんなものであらうか。無論因果律は疑はれまい。けれど原因なるものは決して單純な一二のものでない。無數の糸が織込まれて人生の織物が出來る時、今甲の色又乙の色を以て主要基調とする時には、どうしてもそれを並はづれて誇張せねばならぬ。併し浪漫劇には其れはない。

三、劇的動作がない。只動くのが動作(アクション)ではない。意志を現はし、性格を現はすものでなくては

ならぬ。故に近代劇ではそれを言葉や風采などで示さんとしてゐる。然るに浪漫劇では元來意志の衝突や性格の衝突やは大なるあるものに調和されてしまつてゐる。そこで其れを示す動作があらう筈はない。――と謂ふ意味は、描いて深刻でないといふのでもなく、人物が人形のやうなといふのでは勿論ない。たゞ極端に走つてゐない。broad humour もなければ、tragic intensity もない。凡てが高雅、優美である。熱烈な集中がなくて、寧ろ遊戯分子が多い。

四、藝術として至上なものである。美しい極致である。finish である。少しの增減を許さぬ渾然たるものである。

さて此浪漫劇の三篇と共に同じく第四期に編入せられて、それらよりもまだ後の作と見做されるものに「ヘンリー八世」と、「二人の高貴な親族」The Two Noble Kinsmen とがあるが、兩つながら沙翁の筆としては斷片であつて、後進の作家フレッチャーが後に書き合せたものと謂はれてゐる。殊に後者は沙翁劇中に入れぬ學者が多い、故に本書中にも之を省く。

表現の形式

言ふまでもなく、沙翁劇は上演するために、役者にいはしむべき科白を書いたものであるが、それらの科白は主として韻文で書かれてをり（それで本書に於て各篇の研究の初めに幕數場數と共に行數をも記してあるのである）、たゞ折々或る特殊の場合に散文を交へ用ひてある（前掲「沙翁の時代」の章第三節參照）。即ち沙翁の劇は劇詩に屬するもので、上品な、典雅な、詩味豐かな、而かも生々とした言葉使ひのうちに、之を述べる人物の性格が現はれ境遇が窺はれ、又說盡されぬ金玉の辭句に充ちて居るのである。そして其詩の形式は所謂る白韻詩句（押韻なき短長音五歩格）、即ち行の尾に韻は踏まぬが、アクセントなき音節とアクセントある音節との二者相連なつて組成する音歩が五ツあつて一行と成つてをるもので、日本ならば七五調とでもいふべき、最も通俗な、律呂の快よき、耳に入り易き詩格である。

この白韻詩句はエリザベス時代の作家サックヴィルが初めて之を劇に用ひ、マーローや沙翁によつて完成され、表現の偉大な用具となつたものである。殊に沙翁の自由自在な其の使用は、近松などが七五調の不自然ならぬ微妙な使用に於けるが如く、ひたすら驚歎に値ひする。しかし小作家になると、屢々たゞ型式的に流れて、器械的な筆拍子に由つて甚だ光彩のない不自然なものになる事も免かれ難い。すべてコンヴェンショナルな律語は、少しく習熟すれば、すぐ書けて、甚だ樂である、あまり腦力を要しない。近代劇などの散文の會話の方が如何ほど骨が折れるか、

それは云ふ迄もない。

劇作の年代順

三十有七篇（本書に於ては「ヘンリー六世」上中下三部を合せて一篇と數へるゆゑ三十五篇となる）の劇個々を年代順に配列することは、沙翁研究者の一大任務であつて、尤も煩雑な、而して尤も興味ある問題の一である。それには内容の方面から、又外の方面から、様々の材料を基礎として研究するので、未だ研究者の間に正確なる一致點を見ないのであるが、多くの學者が不退轉の努力に由つて、大方の順序は付いてゐる。今以下に掲げる其順序（其中7までが上記四期中の第一期、20までが第二期、31までが第三期、自餘が第四期に屬す）は、各篇の年代的順序に關する諸家の色々の説を彼此參酌し、ザツと年代順と假定する所のものに隨つて排列したのであるが、固より極めて大まかのものに過ぎぬ。

沙翁劇各篇の研究

〔編修者曰く、以下列記の中、取わけ傑作名篇と稱せらるゝ「ヴエニスの商人」、「ハムレツト」、「オセロー」、「マクベス」、「リーア王」、「ローミオーとジユーリエツト」、「ジユーリアス・シーザー」、「アントニーとクレオパトラ」、「あらし」、「眞夏の夜の夢」、「悍婦馴らし」の十一篇には、著者は特に力を込めて精細に解釋や批評を試み、「ヴエローナの二紳士」、「リチヤード三世」、「間違ひの喜劇」、「戀の骨折損」、「ヘンリー四世」、「ヘンリー五世」、「ヘンリー六世」、「リチヤード二世」の八篇にも多少の解説を施してゐるが、餘餘の諸篇については、未だ評釋の筆を進めるに及ばずして遂いたゞめ、遺憾ながら、著者がかねて書き置いた梗概（中には簡短な評語や參考用の註記等を加へたものもある）だけを掲げるにとゞめざるを得ざりし次第である」

1. Love's Labour's Lost.

「戀の骨折損」

五幕(アクト)、九場(シーン)、總行數(ライン)二六八八。

ナヴール(Navarre—今は西班牙の一州なる昔の一王國)王フアーヂナンド(Ferdinand)は學問に身を捧げたる嚴肅なる生活を營まんがため、三ケ年の間女人禁制の布告を出し、其貴族ビーロン(Biron)、ロンガヴィル(Longaville)、及びデューメーン(Dumain)の三人にも之を守ることを誓はしめる。此布告は頗る嚴格に施行せられ、コスタード(Costard)といふ滑稽な野人は、村の娘ヂャケネッタ(Jaquenetta)と會話してゐたといふので、捕へられ一週間の禁獄に處せられる。(以上第一幕)。

折柄佛蘭西の美しき王女は、父王の病に由り、其代理として、ローザライン(Rosaline)、マリヤ(Maria)、及びキヤサリーン(Katharine)の三侍女を從へ、朝貢の事を議する爲に訪問する。之をいかゞはせんと樣々討論の末、遂に城の外に帷舍を建てゝ、茲にて面會を遂げ、王宮に導いて歡待し得さる所以を辯明する。(以上第二幕)。

女人禁制の宣誓に尤も後れて承諾したビーロンは、又之を破るに最先きであつた。彼は豫ねて知己の間柄であつたローザラインに思ひを寄せ、切なる心を筆に謂はせて、窃かにコスタードを通して女の許に屆けしめんとする。コスタードは同時に怪奇なる西班牙人アーマドー(Armado)がヂャケネッタに送る戀文の使者をも云ひつかり、文盲の悲しさに間違へた方へ手紙を屆ける。(以上第三幕)。

王女と其侍女等はアーマドーの高慢な誇張した戀文を披いて興を催してゐる一方には、ヂャケネッタはビーロンの手紙を判讀し得ず、嚴格なる村夫子ホロファーネズ(Holofernes)の許に到り代つて讀まんことを願ふ。此教育者は一見其ビーロンの戀文なるを見て、こは禁制に反ける一大事となし、女に命じて王の手許に之を差出さしめる。かゝる間に王と他の二人の貴族も夫れ〴〵戀の奴となり、窃かに女によする歌を朗吟するのを森に隱れて互に立聞きする。中にもビーロンは頗る得意となり、散々に彼等の不信を嘲罵するが、彼の誇りも束の間にて、手紙の一條現はれ、今や四人何れも戀に心を焦がすことを白狀し、力を協はせて其目的を貫徹しようと相談する。(以上第四幕)。

婦人等は城外の歡待に滿足し、日々森林を逍遙して遊樂する。かゝる間に王と貴族等が假裝し

て近く來るといふ報知を得、こなたも假裝して彼等を待ち、當の相手を間違へしめて笑ひ興ずる。其内王女は父王崩御の使者に接し、取るものも取りあへず歸國の準備をする。於是王はあらはに王女に婚を求むるのであるが、王女は彼等が十二ヶ月と一日の間隱遁生活を送らば、其期の明くると共に色よき返事を與ふべしと約して侍女を從へて去る。彼等の戀は少くとも一時無駄骨折であつた。（以上第五幕）。

此喜劇は沙翁の劇作として世に存するものゝ中、最初の作といふことになつてをり、其の著作年代については一五八九年說、一五九一―二年說などがある。

特長―（一）婦人客の前―特に處女王エリザベスの前―で演ぜられたものであらうと想像せられること。

（二）筋が極簡單でもあり、他の作と異なり話の材源がなく、全然獨創の筋立であらうといふこと。

（三）主要な人物の名は悉く當時英國人の非常に注意してゐた佛國の内亂―一五八九―一五九四年間の―にあづかつて居た人物の名を用ひてゐること。

（四）田舍の巡査の無智無力、村の教師の非常識と學問自慢に對する諷刺が、かなり鋭く又眞に迫つてをること。

（五）沙翁の先輩作家リリーの Euphuism（著者の「英文學史要」參照）の流行がまだ劇場を支配してゐたと見えて、全篇がリリーの影響著しく、劇的事件は甚だ少なく、只 talking である。優雅な又巧みな會話の連續である。

又作者が一生の特長であるところの、觀衆の要求を知る點が此最初の作で充分に現はれてゐる――婦人客を主要な相手と見る事が確かだとして。卽ち色文の取遣へて送られる事と、輕いリリーばりの會話の運び方は、確かに婦人に受けたものに相違ない。戀物語ではあるが、そこに戀の情熱はない。たゞ遊戯として弄ぶのみである。人物描寫に於ても皮相なカリカチュアである事は云ふ迄もない。

2. Titus Andronicus.
「タイタス・アンドロニカス」

五幕、十六場、總行數二五一四。

羅馬の大將タイタス・アンドロニカスはゴッス人(goths)を討つて、大捷を博し、首都に凱旋する。折柄先帝崩御に際し、二皇子の何れを後繼者となす可きかにつき、議論鼎の沸くが如くであつたが、人民は寧ろ此戰捷の大將を王位に上らせたらといふのである。タイタスは此人望を利して帝位を襲ふを潔しとせず、寛宏なる心から長皇子サターナイナス(Saturninus)に味方し、彼をして皇統を繼がしめる。新帝は表に之を徳とし、タイタスの娘ラヴィニア(Lavinia)を容れて后とせんとし、タイタスも之を許したのであつたが、ラヴィニアは既に弟の皇子バシェーナス (Bassianus)と婚約が成立してゐたので、此皇子は強いて彼女を奪ひ去る。タイタスは激怒し、此反亂に與したわが實子の一人を切り殺す。彼の勢力の日に加はるを恐れてゐた帝は、此暴行を口實とし漸く彼を遠ざけんとする。そして彼が捕虜として連れ歸つたゴッスの女王タモーラ(Tamora)を容れて后とす。此タモーラは曾て己が子が軍神の血祭りとしてタイタスに屠られたるを恨み、帝と協力して復讐を企てる。(以上第一幕)。

タイタスは皇帝夫婦が此心であることを知らぬ。彼は彼等が佞言を信じ、或日彼等の爲に獸獵會を催す。然るに何ぞ計らん、却て之は陰謀の機會を與ふる結果となり、王后は其情人にして殘忍刻薄なるムーア人エーアロン(Aaron)と密會し、身の毛もよだつ惡計を廻らし、我が二子を使嗾してタイタスの娘ラヴィニアを辱かしめ、其舌と手を切り取りて、物言ふことも書くことも能はざらしめる。そして同時に殺害せられたる王弟バシェーナスの下手人をタイタスの二子であると言ひ觸らす。(以上第二幕)。

かくて二子は捕縛せられて刑の宣告を受け、刑場に導かれるのであるが、直に刑を施さずしてタイタスに使を送り、其手を切つて渡すならば二子の命を助けんと云ふ。タイタス之を承諾し、手を切つて送つたが、やがて其の手は二子の首と共に突き返へされる。ここに於て只復讐の鬼となつたタイタスはわざと狂を裝ふて其機會を待つ。(以上第三幕)。

かゝる内にタイタスの他の一子ルーシアス(Lucius)は羅馬を放逐せられてゴッスに赴き、强大なる兵を集め來つて首都を嚇す。タモーラも敵し兼ねて講和を乞ふ。(以上第四幕)。

其講和の談判はタイタスの家で行はれるので、タモーラは其準備の爲に假裝せる二子を伴ひ其

家に行く。僞狂のタイタスはタモーラの歸つた後に其二子を殺し、死骸を燒いてパイを作り、皇帝夫婦並にルーシアスが談判の宴會に調理方に變裝して自ら此パイを持出す。そしてタモーラを殺してサターナイナスに殺され、其サターナイナス帝はルーシアスに殺される。ルーシアスは人民に此刑罰の理由を說き示し、王位に推される。囚虜となつてゐたムーア人は生き乍ら土中に埋められる。（以上第五幕）。

羅馬詩人の物語から題材を取つた此悲劇は、一五八九—九〇年或は一五九三—四年頃の作とせられてをるが、沙翁の作であるといふことを否認する（少くとも一部を除いては）異說も多い。隨分込入つた物語で、無殘な復讐、陰謀、殺戮等の連續である。斯かる慘劇も當時の人には或は左まで恐怖戰慄の印象を與へないで、一種のメロドラマとして喜ばれたかも知れぬが、今日の吾々には、血腥い、ゾッとする戰慄劇 bloody drama の一標本たる外はない。

3. The Comedy of Errors.

「間違ひの喜劇」

五幕、十一場、總行數一七五八。

シラキュース(Syracuse—シ、リー島の都會）の商人イーヂオン(Ægeon)は、久しく行衞の知れぬ妻イーミリア(Emilia)と其子を尋ねつゝ、敵國關係にある通商禁制の港エフェサス(Ephesus 古代小亞細亞の都會）に上陸し、領主(ディューク)に捕へられ、贖償(あがなひしろ)金のないため獄に投ぜられる。そして死を覺悟しながら其前に引出され、來歷を尋ねられて、涙のうちに、妻子に別れた一條の身の上話をする。——

彼れ嘗て商用で行つて居つた滯在先で、妻との間に男の双生兒（其名も同じアンチフォーラス Antiphorus)が生れ、又此双生兒の附添にとて、これと同刻同所に生れた他人の双生兒（其名も同じくドローミオー Dromio)をも引取つて養つてゐた。それから間もなく一族を携へて鄕里シラキュースへ向け歸る航海の途中、難船に遭ひ、一同救はれはしたが、夫は妻に離れ、双生兒の息達も各自の僕を隨へたまゝ互に離れ〳〵となつた。父のイーヂオンは双生兒の弟の方

幷びに其僕と共にシラキユースに着き、居ること十八年間、絶えて他の三人の消息を得なかつた。此子やがて成人して、母や兄を捜がしに出かけ、イーヂオンも亦た自分で諸方を尋ね廻つた。然るに爾來七年、今日に至るまで未だ親子兄弟相互に何等の便りをも聞かぬのである。

斯くの通りの次第と聞いたエフェサス公は、いたく之に動かされ、イーヂオンに、死刑に對する贖償金を調達し得させるやう更に一日の猶豫を與へる。

丁度その時、親や兄弟を尋ねんとて、父の知らぬ間に弟の方卽ち「シラキユースのアンチフォーラス」と、其僕なる弟ドローミオーとが、偶まエフェサスにやつて來る。所が偶然にも「エフエサスのアンチフォーラス」と呼ばるゝ兄の方も、其僕なる兄ドローミオーと共に、早くより同市に住んでゐた、が、神ならぬ身の、どちらもお互にそれと知る由もない。この兄アンチフォーラスはエフェサス公の眷顧を受け、エードリエーナ(Adriana)といふ富める婦人と結婚して、立派な暮しをしてゐるのであるが、其の下僕——兄ドローミオーは、途中で逢つた「シラキユースのアンチフォーラス」をば、外出中のおのが主人と思ひ違へ、もう食事時ですから早くお歸りになるやうにと、エードリエーナからの言ひつけを傳へる。(以上第一幕)。

とんでもない事を申し傳へた僕は、自分では思ひがけなく、馬鹿にしやがると怒られて、ぶん撲られて家へ逃げ歸る。そこでエードリエーナが自分でやつて來て、途中で弟アンチフォーラスを見て、わが夫と思ひ込んで、早く私と一緒に食事に赴く樣にと、呆れて返答も出來ぬ彼れに迫つて、家へ迎へ入り、又彼れに隨行の弟ドローミオーに命じ(わが家の下僕と取り違へて)食事中誰れも入れてはならぬと門口に番をさせる。(以上第二幕)。

間もなく、そこへ眞の夫(兄アンチフォーラス)がやつて來る。そして門が塞がれてゐるのを見て、一方ならず驚き且つ憤るが、人になだめられて、癇癪をこらへ、一ト先づ近くの料理屋へ引揚げる。この間に、僞の夫(弟アンチフォーラス)は、エードリエーナが己れの妻でなく全くの他人だといふことを頑として言張り、夫(と思ふ人)の疎々しい薄情さに泣いてゐるエードリエーナよりも、却つて其妹のルーシエーナ(Luciana)に、愛嬌を振り蒔き、甘い嬉しいお世辭で言ひ寄る。一方、二人のドローミオーも、相變らず間違つた使に遣られたりなどして、色々とんだ迷惑をさせられる。(以上第三幕)。

混亂は兩主人兩下僕の間に益々大きくなつて複雜化する。商人達も二人のアンチフォーラスを混同し、兄アンチの誂らへによつて拵らへた金の鎖を弟アンチに渡しなどする。そして兄アンチは其れの代金を支拂はぬからとて拘引されたりする。そこで遂に弟アンチと其僕とは、何が何だ

かサツパリ分からぬのに面くらひ、魔物にでも取り憑かれたやうな心持がして、早速此町から逃げ出さうと準備をする。（以上第四幕）。

ところが、此兩人をば、商人達は不埒者と呼び、エードリエーナは發狂者と誤認して、追ツかけて來て捕縛しようとするので、彼等は餘儀なく、或る尼院（あまでら）に避難し院主の保護を受ける。丁度その時イーヂオンはエフェサス公一行に率ゐられて刑場に赴く途中こゝを通る。エードリエーナは公爵に向ひ、自分の夫が氣が違つて尼院内に逃げ込んでゐると謂つて、監守ありたき旨願ひ出る。しかし双方證據人の中立が衝突して紛爭容易に收まらず、とう〳〵アンチフォーラス兩名とドローミオー兩名が、一緒に公爵と尼院主との前に現はれて、一切の經緯が判かり、漸く此の謎の縺れが解ける。兄アンチは妻と仲直りし、弟アンチは更めて其妹ルーシエーナに求婚をする。老イーヂオンは贖罪金を納めるに及ばずして命を助かり、二人の息子に廻ぐりあふ幸ひに加へてかの尼院主こそ、別れて久しい外ならぬ己れが妻であることを發見し得て、いよ〳〵喜ぶ。一方兩ドローミオーも絶えて久しき兄弟邂逅の歡びに、今までの憂き目や受難の數々を忘れてしまひ、四方八方めでたし〳〵となる。（以上第五幕）。

〔此一篇の筋書は、著者のかれて書いて置いた梗概が餘り粗略で他の諸篇のものと釣合を失するため、編修者が改めて特に手記したものである〕

此篇の書かれた年代に關しては、早くは一五八九年、晩くは一五九四年までの間に種々の說がある。

親が子を妻が夫を間違へるほどの似方は不可能でなくとも、有りさうに想はれぬ事である。けれど玆に作者は此難關を突破し、樂々と觀衆の興味を捉えて了ふ。そして、どう此上ともこんがらがるか、どう展開して行くか、と興味の suspense は終りまで弛まない。或人は此作を以て第一期の作の一番終りのものとし、又後日改訂せられたものと做すほどに、作者の腕はシツカリして來た。そして恰も自信を以てのやうに、此話材の源なる羅馬戲曲家プロータスの原本には更にない從僕なる双子をも添へ、これら二組の双生兒は、妻が其夫を間違へ僕が其主を誤まるほど相酷似してゐるので、問違へば間違ふものだよといつたやうな風に、玆に無限の滑稽的な行違ひを惹き起し、混雜は更に混雜を生ましめて、觀客は只呆つけに取られるばかり。つひに大間違ひの極點に達して互に相理解するの緒口を開き、皆々目出たく局を結ばしめてをる。

臺詞（せりふ）は概ね長いが、よく磨かれて詩趣多く、そして劇的經濟も十分考へられてあつて、僅か第

一幕（原文では百五十三行）のうちに、見物は來るべき混雜を豫想し得られる。

『恰度謎のやうに、洵に心をいらつかせるのであるが、それで誰しも之を解かうとして止まぬ』とは、ハズリットが此劇を評した語である。勿論深い性格描寫などのあり得ない一個の Farce（笑劇）であるが、眼まぐるしい變化と局面の展開とは、之にふさはしい活潑な言葉と頓智とにて綴られ、出でては入り、入りては出づる人物の取扱ひに、快き巧みも見え、全篇に漲る若い血氣の匂ひは、いつ迄も鮮かな心地よいものである。

4. King Henry VI.—Part I. Part II. Part III.

「ヘンリー六世」上篇、中篇、下篇

上篇——五幕、二七場、總行數二六六五。中篇——五幕、二四場、總行數三〇九四。下篇——五幕、二八場、總行數二八九六。

上篇に於て。佛蘭西を征服したる武勇の王ヘンリー五世は赫々たる名聲の間に若くして死んだ。其子ヘンリー王位を繼いで六世を名乘り、條約に由り英佛兩國の王權を一身に集むるに至つたが、年齡尙幼少、而かも庸劣にして到底父王が大統一の跡を受けて群臣を駕御する力はない。世は再び祖父曾祖父時代の怨恨を呼起こして所謂薔薇戰爭の內亂時代となり、日本の源平の昔よりも更に殺伐たる骨肉相屠るの有樣を現ずる。

勇將トールボット(Talbot) 卿は佛國に在て先王の領土をよく護り戰ふと雖も、本國の貴族等が軋轢のため充分の軍資と兵力との補充を與へず、而かも佛軍には牧羊者の娘ジヤン・ダアク(Joan of Arc) が愛國の熱を煽るあり、英國軍の形勢益々非なる有樣であつたが、トールボットの勇敢無雙なると、ジヤン・ダアクの捕虜となりて刑死したとのため、遂に英軍の勝利となり、佛太子

は遂に屈服して英に對して臣下の節を取る。サフォーク(Suffolk)伯は王ヘンリーのため佛のアンジュウ(Anjou)公の娘マーガレット(Margaret)を容れて王后となさん事を王に勸める。

中篇に於て。マーガレットは皇后となり、此弱き夫を無限に拘束して我意の儘ならしめんとしてゐる。(第一幕)。そして貴族等と心を合せ、攝政グロースター(Gloucester)公を讒し、遂に罪なきに投獄し、サフォーク公の命に由つて遂に殘酷なる死を遂げしめる。(第二幕)。人民は此戮殺の事を聞き大に騷擾して、サフォーク公の追放を求める。應報到ること早く公は遂に流謫の身となり、後、海上に賊の虐殺に身を終る。そして一國の權力はヨーク(York)公に集まる。ヨーク公は愛蘭土征討を名として兵を集め、ケント(Kent)の勞働者ジャック・ケイド(Jack Cade)を使嗾して叛亂を起さしめる。(以上第三幕)。反軍は程なく潰敗し、首領のケードは殺され、人民は王に臣從の誠を披瀝する。(以上第四幕)。ヨーク公は征旅より急ぎ歸り、自ら却て王に向つて挑戰し、遂に兩軍は聖オールバンス(Saint Albans)の野に戰ふ。今やランカスター派(Lancastrians)を代表する王は此役に脆くも敗れ、ロンドン指して退却する。勝ち誇れるヨーク並にウオーウィック(Warwick)の兩軍は之を追擊して首都に向はんとする。(以上第五幕)。

下篇に於て。ヨーク公は王軍に先ちて首都に入り、ウオーウイック公の勸誘に由り、王の不在にて空虛となれる王位に座する。弱き王は後より到着したが、ヨーク公は其座を讓らぬ。かくて兩人の間にヘンリー崩御の後はヨークの王位たるべき和議成て一時の小康を得る。而しそれは束の間で、傲岸なる王后マーガレットは、己が愛子の王統を繼ぎ得ざるを憤り、自ら兵を集め遂にヨーク公を擊ち、遂に此勁敵を斃す。(以上第一幕)。ヨークの二子エドワードとリチャードとは一時は父の戰死に落膽したがウォーウィック公の助力に由り、兵を起して遂に王否寧ろ王后軍を敗り、ロンドンに入りて長子自ら王位に上りエドワード四世と呼ぶ。(以上第二幕)。ウォーウイック公は新王の卽位を見てより佛國に渡り、王のために皇女ボナ(Bona)を容れて王后と成さんと談判中のところ、本國より報ありて王は他の婦人と結婚せるを聞き、忽ち不信を怒り、折柄佛王朝に在つた先王の皇后マーガレットの願を容れ、兵を率ゐて急ぎ英國に歸る。(以上第三幕)。そして兵力を以て王エドワードの頭より王冠を奪ひ取り、塔獄中に呻吟せるヘンリーに冠らせる。エドワードはバーガンディ(Burgandy)に走り、新たに兵を募り再擧して來て無力の王ヘンリーを再び獄に投ずる。(以上第四幕)。そしてバーネット(Barnet)の一戰には、王製造者の名ある此ウォーウィック公を殺し、又テュークスベリー(Tewksbury)の決戰には王后マーガレットを捕虜となし、其子太子エドワードを陣中に虐殺し、エドワードは血に由つて得たる王冠を暫く安固に保つことゝな

つた。そして獄中に幽閉の身となれる先王ヘンリー六世はエドワードの弟、後のリチャード三世たる腹黒き而かも手腕と膽力のあるグロースター公リチャードの手に刺される。(以上第五幕)。

玆には此の三部の史劇を都合上合せて一個の作として一緒に取扱ふが、三篇一度に出たのではなく、前後三回に分つて各篇別々に刊行されたのである。其の著作年代に關しては一五八九年乃至九五年までの間に種々の說がある。其の作者についても異論紛々としてゐて、全然沙翁の筆に成らずといふものもあるが、既にフオーリオ版に集收せられた以上、全く他人のものを加へる筈もない。マアローと合作といふ說最も近きに似たり。

作としての失敗は興味の中心がない事に歸する。劇に於て集中は何より大事である。マクベスとマクベス夫人とに全興味を置けば置くほど他の人物は多少スケッチたるを免れない。然るに此作には此統一がない。上篇で勇將トールボットが中心のやうだが、彼は第四幕の第一場で戰沒して了ふ。ジアン・ダアクが出て來るが、興味の中心かといふに無論さうでない、此偉大なる愛國的烈女の描寫は頗るみすぼらしくて沙翁の筆でないとさへ思はれる。そしてフランスとの戰は第四幕と共に終つてしまふ。

中篇下篇に於て舞臺は英國に歸り、玆に「薔薇」の內亂を見るが、そこにも中心點はなく、ヨークとランカスター兩家の間に移動して止まない。

併し中篇の初めの二幕半は實に立派な壯大な劇に出來てゐて、恐らくマアロー、シエークスピア兩友の合作と見られる。その頓挫はマアロー變死の爲めか、それとも他の理由あるか。兎に角此勢で完成せられたら、實に立派な悲劇となつたであらうと思はれる。

下篇に於てはシエークスピアの筆は更に少く、混雜はいよいよ多い。

5. The Two Gentlemen of Verona.
「ヴェローナの二紳士」

（「世界文學全集」中著者所譯「沙翁傑作集」參照）

五幕、二〇場、總行數二二一三。

ヴェローナ（伊太利ヴェローナ州の首都）の若き二紳士ヴレンタイン（Valentine）とプローテュース（Proteus）とは無二の親友である。互に奥底なく語り明かして曾て秘密といふものがない。さる程にヴレンタインは「廣き世間の不思議を見」實世間の學問せんとて、道化者のスピード（Speed）といふ從僕を隨へ、ミラン（Milan）の宮廷を志して旅程に上る。彼は友プローテュースにも同行を欲するのであるが、是れは美しきジューリヤ（Julia）を戀して寸時も家郷を去ることを望まぬ。此事を知らぬ父アントーニオー（Antonio）は、我が子のいつ迄も家に居て青春の時を空費するを惜しみ、プローテュースに親友の跡を追うてミランに急がんことを嚴命する。彼は詮方なく涙と共にジューリヤと指輪を交換し、再會を期して出發する。同じく道化者の其從僕ラーンス（Launce）も彼に隨伴する。（以上第一幕）。

（Silvia）と深き戀に陷つてゐる。然るに公爵はシューリオー（Thurio）といふ貴公子を愛し、娘を此公子に嫁がせんとする。プローテュースが跡を追うて此市に來た頃には、二人は百計盡きて窃かに逃亡を計つてゐるところであつた。ヴレンタインは舊友を迎へていたく喜び、彼を姫に紹介し、且つ意中を告げて其援助を求むるのである。心浮きたるプローテュースは一目姫を見てはや故郷のジューリヤを忘れ、煩惱の炎に友情を燒盡して、術策を用ひて姫を我物とせんとする。斯とは知らぬジューリヤは久しく便りなき戀人を慕ひ、男子に變裝してミランに急ぐ。（以上第二幕）。

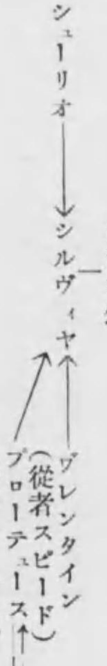
ヴレンタインは公の不興を蒙つてミランを放逐せられる。これプローテュースが逃亡の事を密告したからである。（以上第三幕）。

彼はミランを出てヴェローナへと赴く途中、山賊の手に擒へられたが、其男らしき振舞に却て推されて彼等の首領となる。プローテュースはセバスチァン（Sebastian）と名乘る少年をわが古き戀人とも知らず、彼を使ひとして厚かましくもシルヴィヤに戀を迫る。又「ヴレンタインの愚かな競爭者」シューリオーをも欺き、彼の爲にシルヴィアの愛を求めてやると稱して姫に近づかんとし、ジューリヤと言換はしたる指輪を送りなどする。（以上第四幕）。

シルヴィヤは陋しきプローテュースが振舞を憎むにつれ、放逐せられたる戀人慕はしく、或日勤

行の暇を窺ひ、心知れる老紳士を具して逃走する。姫在らずとの報知に館の騒動一方ならず、公爵初め一同追手に立向ふ。シルヴィヤは森林中にて一旦山賊の手に擒へられたが、プローテュースの爲に救はれる。プローテュースは之れを恩義に被せて、愈々言葉汚なく姫に迫る。始終の樣子を立聞いてゐた山賊の首領ヴレンタインは、此時現れ出でて彼の不信不義を面責する。折から公爵の一隊も山賊の虜となりて茲に來り、改めて姫をヴレンタインに與へ、恥入つたプローテュースは元の戀人ジューリヤに歸り、茲に森のロマンスは大團圓となる。(以上第五幕)。

此喜劇に登場する主要の人物八人の關係を圖で示せば左の通り——



此篇は一五九一年—二年の作と云はる。

シェークスピアの觀衆の要求したものは、我々の要求するものとは非常に異つてゐた。我々も決して物語が嫌ひではない。けれど我々は、それよりも深い心理描寫であるとか、巧みな人生の或る瞬間の表現であるとか、乃至は社會の諸相を具體化した場面であるとか、稀な性格の解剖であるとかに、より多く興味を感ずる。けれどシェークスピアの觀衆は——殊に初期の頃には——全く物語の興味に沒頭してゐたらしい。複雜した事件、それが、もつれにもつれる。そして、どうなるかと手に汗を握るうちに、そこに解決の曙光が現はれる。見物はホッと息をつく。此觀衆の爲にシェークスピアは書いてゐる事を瞬時も忘れてはならない。

併し複雜な物語ではあつても、やゝこしい、どれがどれやら判然しないものでは、見物が滿足する筈はない。全く同じやうな人物と同じやうな關係とは、只倦怠を覺えさせるのみである。

作者が對照の妙味を示し初めたのは、此劇からと云つてよい。二人の友人ながら、男らしく義氣のあるヴァレンタインと、卑怯な賴み難たないプローチュースと對照してゐる。女のシルヴィヤとジューリヤとも、積極と消極とほど遠ふ。場面でも眞面目な感情の昂ぶつたところと、滑稽な場面と相交替させてある。

併し此劇で如何に exposition (introduction「筋の緒」(プロローグ)「脚色の發端」(エピソード)) 卽ち科白などの中におのづから事件の起原たる事情を明かならしめて置く部分) といふ事が、まだ若い作者によつて充分に注意せられてないのが、缺點としてよく現はれてゐる。此四人の關係を述べ、又從僕のラーン

ス(駄洒落を連發する大の道化者として沙翁の讀者間に名高い人物となつた)とスピード(同上)とを出すために二幕十場を費してゐる事は、後の劇で決して見ないところである。exposition のあとにも、dramatic suspense がまだ充分に保たれず、分りきつた事の反覆と、只言葉の爲にアクションが邪魔せられて進まない點が、數ケ所に見られる。

見物を喜ばせる爲めには、性格の矛盾や、人生に不忠實な事などに平氣であるのは、わが歌舞伎に少なくないが、さすがのシェークスピアも此初期の作にはそれさへある。

性格の描寫や、科白の呼吸に於て「詩的才能」が勝れてゐて、まだ劇的天才に發展してゐない。要するに、伊太利(當時の伊太利といへば、奸惡な血醒いところか、さもなくば、浮々した戀とマンドリンの巷であつた)を天地にした輕い瓢きんな劇で、筋だけで見るとよほどマジメな場面が展開するやうに思はれる場合にも、ホンの一寸觸れるだけで、いつも愉快に込合つてゆくばかりである。

6. King John.
「ジョン王」

五幕、一七場、總行數二五六九。

剛腹で我儘で、軍事上の機略、政治上の才幹は相應にあるが道德的には只狡獪な卑怯者であるジョン王は宮廷に於て佛王フィリップ(Philip)の使者を引見する。佛王はジョンの長兄の遺子アーサー(Arthur)を以て正當の王位繼承者となし、ジョンに王位を讓れと謂ふのである。もとより王の諾すべき筋のものでなく、王は言下に峻拒する。そして佛使が急ぎ歸り復命する踵に次でジョンの大軍はアンジェール(Angiers)に逆襲する。軍中には勇猛を以て曾て歐亞を震駭した獅子王リチャードの人妻に生ませたる庶子フォークンブリッヂ(Faulconbridge)といふ年若の荒武者が脾肉を撫して居る。(以上第一幕)。

英佛兩軍の爭は市民の仲裁によつて血を見ずして終ることゝなつた。卽ちジョン王の姪西班牙のブランシュ(Blanch)を佛太子に嫁し、多くの地を割いて其持參金となし、兩國和解の楔(くさび)としようとするのである。失望したのはアーサーの母コンスタンス(Constance)である。我兒の爲に義

軍を起さんと誓つた佛王の聲尚耳を去らぬに、今此妥協を聞くは何事である、と怒つても恨んでも其聲は後世幾萬の子を持てる母の涙を絞るのみで當時に益がない。(以上第二幕)。

處が不圖したる障害が起つてコンスタンスが願ひの一時は成就したかの觀を呈するのである。それは恰もよし此時法王の特使パンダルフ(Pandulph)なる者現れ、英王が法王の言に反して僧正の任免を敢てしたのを叱責する。ジョンは斷乎として王權を主張し、敢て下らぬ。遂に法王の名に於て破門せられる。破門を怖れた佛王は法王に恭順の意を表し、遂に成らんとせる兩國の和議が再び破れるといふ次第となる。戰は英軍の利と成り、若きアーサーは捕虜と成つて凶漢ヒューバート(Hubert)なる者の手に托されて獄裏の人となる。ジョン王は劍の舌を蜜にて包み、極めて婉曲に狡獪に『我が行方に横はる小蛇』をなきものにせよと使嗾し置き英本國に歸つて行く。(以上第三幕)。

書齋の讀者にも劇場の看客にも潛々たる萬行の涙を禁じ得ざらしむるは、いたいけなアーサーがいかにも子供らしい調子で諄々とヒューバートに惡意を翻へさん事を說くの一場で、さすがの凶漢も遂に凶器を加ふる處を知らず、竊かに王子が庇護を計るのである。英國にてはジョン王の將來に就いて蜚語流言が何處となく起る。王甥アーサー殺害といふ噂がいたく貴族等の反感を買ふ。壓迫を受けた僧侶共が此間にあつて苦肉の計をなす。外には佛太子軍襲來の報がある。偶々王はアーサー未だ死せずとの事實をヒューバートより聞き、貴族等と和解する此報よりよきはなしと使を走らせたが、時非なる哉、王子は自ら逃れんと欲し高き屏より飛下りて我れと身を破り、死屍は却て貴族等の發見する處となり、貴族等は皆走つて佛軍を歡び迎へんとする形勢となつた。(以上第四幕)。

百計盡きたるジョン王は遂に王宮にて降を法王の特使パンダルフに乞ひ、自ら王冠を取て特使の手に渡す。特使は之を嘉納し、再び共手にて王に冠らせた。日は恰も兼ねて京童の豫言してゐた救主昇天の日であつた。かくて勝利に誇つた法王の使者は佛英の和解を計つたが、血氣に勇む佛太子は我儘勝手な仲裁を欲せず、遂に兵を進むるに至つたが、貴族等は腹黑き僧侶共の密計を知るに及び再び王に復歸し、且は勇ましきフォークンブリッヂの善戰に由つて、幸に英國は敵軍の蹂躪を免かれた。然し王は噂に由ると或る修道僧の毒害に逢ひ、熱を病んで苦しみたる末、戰の終決をも見ずして崩じ『悲哀と愛國の此劇』も同時に閉ぢられる。(以上第五幕)。

此史劇は一五九三年乃至九八年の間の作とせらる。

アーサーの母コンスタンスは愛子の捕虜となるに及び氣も狂はん許りに慕ひ歩いた末遂に病死した。彼女は誇りかに氣高き魂と隠し難き野心とを有する婦人で、母たるの愛情の熱烈なるは多く他に類を見ぬ。マクベス夫人に好み扮した女優シドンス夫人が頗る熱き興味を以て、コンスタンスを研究したのは面白い事實である。

教會と國家との爭の此底黑き劇に全篇を縫ふて清新の氣を與ふるはフォークンブリッヂで、彼は實はアルマダ熱に煽られた武士道の聲、愛國の聲の第一の叫びである。

7. King Richard III.
「リチャード三世」

五幕、二五場、總行數三五七八。

「ヘンリー六世」下篇の終に於て見た如く、暗愚なりし王ヘンリー六世は塔獄の内に凶手に倒れた。其長子エドワードは之より先きチュークスベリーの合戰に勝り殺しに逢つた。此エドワードの未亡人アン(Anne)は今や喪主となり王なる岳父の骸を寺に送つてゐる。此悲しい行列の先頭に立ち塞がり、雷雲の押しよせ來る如く柩の行列を遮る黑裝束の若者がある。色黑く丈低く脊は所謂猫背で前に屈して醜い。只爛々たる眼が獰惡にも敏捷なる頭腦と強くして挫けざる意志とを語つてゐるので、これこそ現王エドワード四世の幼弟グロスター(Gloucester)公リチャード、後のリチャード三世である。リチャードは醜い、其形も心も曲りくねつてゐる。彼は一切の愛を知らぬ、彼は全く孤獨である。『愛を知らぬ故に力を以て智を以て人生を壓服せん』としてゐる、彼が此野心の途上に横る者は誰彼の容赦なく其凶手に倒れる。今や彼は己が刺したる者の未亡人に向ひ、葬儀の途上に結婚を申込むのである。弱き者は女とよ。就中アンは弱き女である。リチャードの此振舞に

火の如く怒れば怒る程皮肉なる求婚が愈々迫つて來る。アンは遂に之を承諾する。(以上第一幕)。

力なき現王は病床にある。流言を信じて仲弟クラレンス(Clarence)を獄に投じ、次で彼を暗殺せんとする。やがて此令を悔いて赦免を命じた頃には既に遲く、リチヤードは機を利して早くも此兄を亡き者にしてゐた。その内に王は愈々病革り、王后エリザベス(Elizabeth)の悲愁限りなけれ共、遂に病死する。王子猶幼なきが故にリチヤードは攝政に推される。(以上第二幕)。

リチヤードが腹黑き野心は次第に鋭鋒を現はす。彼はバッキンガム(Buckingham)公を唯一の腹心となし、反對者を逐次に振ぎ取り切り去つて自己の礎を固くする。そして、先王エドワードの兒等は嫡出兒でない、從て王位繼承の權利がないとの蜚語を放たしめる。之に對し人民の更に反響せざるを、强ひて市長をしてリチヤードの王たらん事を求むる請願をなさしめる。バッキンガムと面白い八百長演說をやる。かくて遂に先王の幼子を廢して自ら帝位に上る。(以上第三幕)。

長き努力——尤も殘忍なる努力に由つて得た王位を保持する爲めには、彼は更に殘忍ならねばならぬ。彼は仲兄クラレンスの遺子を幽閉する。先王の子エドワードに暗殺者を送る。肺を病める妻のアンの逝くに任せ、自らの地位を堅くする爲め、長兄卽ち先王の娘を獲んとし、己れを惡魔の如く惡める其母に向つて代つて求婚せんことを求めて、遂に成功する。狩る狐の無くなつた時獵犬のバッキンガムに用はない。約したる報酬をも與へずして不興の間に放ち遂に刑に處す。かゝる振舞ひに向つて、いつ迄反抗が起らずして止むべき? 果せる哉リッチモンド(Richmond)伯の擧げたる義軍に從ひ行く貴族は次第に增加する。(以上第四幕)。

王軍とリッチモンドの軍とはボスワース(Bosworth)の野に於て對陣する。愈々決戰の前夜リチヤードの惱める夜の眠を襲うて、曾て己れが刄にかけて亡した幾多の魂がかたみ交りに來り怨の聲を放ち、『明日こゝ復讐』とののしる。同じ亡靈はリッチモンドの夜營に行つては、あすの戰捷を祝ふ。喇叭の響、太鼓の音に朝の戰が初まる。流石は勇ましきリチヤード更に屈せず、兵を率ゆること神の如く接戰大に力め、敵將と覺しき者五人迄も屠つたが、遂に馬を射られて徒步となり、『馬を、馬を、我王國にも代へてん、馬を、馬を』 A horse! a horse! my kingdom for a horse! と叫びながら遂に戰場の露と消えた。(以上第五幕)。

「悲劇」と銘打つて出た此の史劇は一五九三年乃至九七年の間の作と傳へらる。純粹に沙翁の筆に成つたものである事は明かであるが、マアローの影響は著しく現はれ、あの誇大、あの哀感(パーソス)の缺乏、あの散文の更に無きことは、たしかにマアローぶりを見る。ギリシヤ劇らしい、悲劇の名

家セネカに最も學ぶ所あつた作である。

I have no brother, I am like no brother;
And this word "love", which greybeards call divine,
Be resident in men like one another,
And not in me; I am myself alone.

おれには兄弟はない、おれはどの兄弟とも似てゐない。
白髭爺共が、神聖などとぬかす「愛」なんて言葉は、互ひに似てるやつらの間に住へ、おれのとこには居るな。おれは獨りぼつちだ。」

よく引かれる此句は「ヘンリー六世」の下篇(第五幕第六場)に、ヘンリー六世を殺して置いてリチャードの述べる述懐であるが、此一句が更に示すが如く、リチャードが獨立獨行の人のやうに、此劇もリチャード一人の悲劇である。そこに集中が出來、そして興味ある此人物は、名優が好む人物の一人となつた。

リチャードは何よりも意志の人である。ニーチェの望む超人の面影がある。彼が愛を欲して得

られない事を自覺した時、彼はひとへに力を得ん事を願つた。そして現世に於ける力のシムボルなる「王」たらん事を決意した。此時彼と王との前にはどんな障害物があつたか。それは殆ど普通人をして到底人力を以てして乗越え難いと思はせるものであつた。しかも彼は此絶大の障害物に向つて敢然として突入した。しかし彼は決して猪武者ではない。彼には冴えた智力があつた。彼の智力は敏捷で、正確で、強力であつた。智力の點に於てイヤゴーと相匹敵する。イヤゴーはその智力を誇り之を弄んで喜ぶ心持があるが、リチャードは同じく自己の智力の優越さを意識してゐても、之を己れの野心に向つて眞面目に役立たせる事に注意してゐる面影が見える。彼が眞先に、自分の手にかけて殺した男の葬式の行列の前に立塞がり、その未亡人に向つて求婚するといふ事は、その勇氣に感心すると同時に、又彼の智力の優越さに驚嘆するのである。彼は此行爲によつて重大な、直接の收穫もあるのだが、それ以外に、彼の黑い大きな影を社會人心の上に投げかけ、印象深い一つの figure と自分をする事は、かなり重大な事であつたと考へられる。そして此不可能な求婚は、斯樣な思ひもかけぬ行爲に由つてのみ初めて成就せられる事は、考へ易い事である。ブランデスの云ふやうに、只見物をびつくりさせるだけではない。

かくて彼は自分を正當に取扱はなかつた自然への復讐として——此魂と此智慧を持つてゐるの

に何故もつと人並みに作つてくれなかつたか、人並みに婦人に愛せられるやうに造らなかつたか——そして權力へのあこがれを追うて、君を殺し、兄弟を殺し、幾多の殺人を經て遂に目的地に達する。その手も足も血みどろではあるが、兎に角目的地に達する。そこに豪いといふ感じを與へる。彼の憎むべき奸譎、虚僞、殘忍、强慾を以てして、尙よく同情をひく主人公たらしめる所以は、此「豪」といふうちにあるのであらう。その强さは實に性格の强さである。その上、彼にはユーモアに近いほどの頓智がある。その點早くも作者の偉大を示して十分である。

さりながら如何にリチャードの巨大な智力と意力とを以てしても、無理無體に奪略した政權が安全に永續しよう筈がない。敵は八方に簇り起る。之に對抗して雄々しく彼は奮戰して來たが、愈々翌日は天下分けめの決戰といふ夜、彼はボスワースの陣營に眠つてゐる。すると彼が直接間接に手をかけて殺した人々の亡靈が彼の枕頭に現はれる。ヘンリー六世の王子エドワードのそれを先着として、ヘンリー六世、仲兄クラレンス、その一族三人、王室の有力なる忠臣ヘースチングス、それからクラレンスの二子、卽ち彼の實の甥二人、最初の夫人であつたアン、それから曾て腹心の臣下たりしバッキンガム、合せて十一人の亡靈出現して彼を責めたてる。流汗淋漓、彼は夢うつゝの心に、はね起きてわめき出す。

Give me anothor horse! —bind up my wounds! —
Have mercy, Jesu! —Soft! I did but dream. —
O, coward conscience, how dost thou afflict me! —
The lights burn blue,— It is now dead midnight.
Cold fearful drops stand on my trembling flesh.
What, do I fear myself? there's none else by:

. . . . . .

There is no creature loves me;
And if I die, no soul shall pity me.
Nay, wherefor should they, since that I myself
Find in myself no pity to myself?

. . . . . .

Methought the souls of all that I had murder'd
Came to my tent, and every one did threat
To-morrow's vengeance on the head of Richard. (Act V. Sc. III.)

『別の馬をよこせ。俺の傷口を縛れ。イヱス樣、惠みを垂れさせ給へ！ ——シーツ！ 何だ、夢を見てゐたのだ！ オー臆病な良心め、なんと貴樣は俺をいぢめつけるのぢや！ 燈火が靑

く燃えてゐる。今は眞夜中。冷い臆病な汗の玉が、俺の震へ戰いてゐる體にびつしよりしてゐる。何を俺は怖がるのか。俺自身が恐いのか。他に誰もゐない。……俺を愛する者は一人もゐない。死んだ後も、俺を氣の毒だと思つてくれる者は一人もゐない。何の氣の毒だと思はう。おれみづからが自分を氣の毒だとは思はぬもの。何でも俺の打殺した者共の亡靈がおれの陣に來て、一人々々翌日の復讐を此リチャードの頭に下だすぞと威しをつた。』

リチャードの怖るゝところは、彼等の脅威によつて翌日の戰爭に負けはしないかと云ふことだけである。こゝにも、かの空想的なマクベスの良心を惱ましたやうな魂の痛みは見られない。たゞ結局彼れの子供の時から惱んだ孤獨の寂しさ、友ほしさ、情けほしさの堪へ難い心境の描寫がある。彼は更に良心の呵責を感じない、彼には良心といふものがないかとさへ見える。彼れの獸的神經力――殆んど無神經――には寧ろ壯絶といふほどの感じを抱かしめられる。

兎に角、バーベーヂこのかた幾多の悲劇役者が最も好んで研究した此の脊むし王は、沙翁劇中イヤゴーと相並んで力强い而かも痛快とでもいふべき大惡漢である。が、しかし彼は生來の惡人と云ふよりも、意識して成つた惡人である。彼れが脊むしでなかつたら、彼はモツと仁慈な立派な人間であつたらう。

8. King Richard II.
「リチャード二世」

五幕、一九場、總行數二七三九。

ウィリヤム三世が七人の兒の內、長子 異名「黑皇子」夙世し、其嫡子たるを以て祖父の後を受けて王位に上りしリチャード二世は、正當の王位繼承者である。然るに德薄く力足らずして遂に王冠を拋ち、其命をも失ふに至つたのは、簒奪者たるジョン王が生涯と相似て而かも興味ある對照をなすのである。

無策なる王に對し其從弟ボリングブルック(Bolingbroke)は術策に充ちた若者で、王が誅求を以て人心を失へるに反し、常に辭を卑うして士民の意を迎へ、又迎合の一手段として王が眞の味方なるノーフォーク(Norfolk)公を以て、先に疑問の死を遂げたる伯父グロスター公の下手人であると罵つた。爭は兩人の間に起る。王は武士道の習に從ひ、眞劍勝負を以て其審判を天に任せやうとする。面白い決鬪の場が來る。と王は突然兩人の勝負を止め、敵なるボリングブルックを六ケ年の追放に、味方なるノーフォークを無期追放に處す。(以上第一幕)。

兎に角一段落つくとボリングブルツクの父ランカスター公は老齢の故と獨り子の追放せられた
る悲痛との爲に病死する。王はやがて其家産を沒收し軍資の一部とし、折柄反亂せる愛蘭土親征
に出かける。王は無定見である。そして常に佞臣に誤られてゐる。王の大蠡西に靡くと同時に、
機を見たるボリングブルツクは父の遺產要求といふ名義でドーヴーを渡つて東に上陸する。動搖
せる貴族等は我れ先きにと走せ參ずる。中にもノーサムバランド伯と其の子ヘンリー・パーシ
ー(Henry Percy)の來り投ぜるは百萬の味方である。(以上第二幕)。

憐むべき王が遠征より歸つて『再び我が王土に立つの喜びに涙こぼる』と詩的空想に耽つてゐる
頃には、英國は最早彼れの王土ではなかつた。王の周圍には尙二三勇ましき忠臣がないではなか
つたが、王は不在中の事情を詳にすると共に、只周章して最早策の出づ可き處を知らぬ。愚痴や
詩的宗教的慰安の詞を述べて王冠に戀々たる許りである。一戰に及ばずして降を叛軍に乞ひ、倫
敦に送られる。(以上第三幕)。

王は正式に王冠をボリングブルツクの手に渡し、其報酬として牢獄ロンドン塔に送られる。(以
上第四幕)。

後變更して王はポムフレット(Pomfret)の城塞に幽閉せられ、心優しき王后は佛國へ別れ別れ
の悲みとなる。王の遺臣數人は、せめて恨の一太刀をと謀反を計つたが、事發覺して皆刑に處せ
られる。そして王は凶漢エグストン(Exton)の刄に掛つて獄裏の鬼となる。かくてヘンリー四世
の御代となるが、此間にあつて新王をして今日あらしめた唯一の功臣はノーサムバランド伯父子
である。(以上第五幕)。

「悲劇」と標題して出た此の史劇は一五九三年乃至九六年の間の作と見做されてをる。

是は第一期のものかも知れないが、漲つてゐる詩的氣分は第二期に屬せしめてもよい。單なる
Story telling が主要な目的と見られ、又劇的アクションはなくして、アクションとして大に活
躍すべき筈のものが皆記述に由つて說明せられてゐる感じがする。役者に取て所謂「仕場」がな
い。見せ場がない。そこに此劇の不人氣な一原因がある。

同情を引くに足る主人公のない事が、面白い問題を提供する。「リチャード二世」は主人公では
ある。しかし妙な性格の人物である——或る智力がない事はない、しかし非常に迷行的だ。ぢき
に絕望する氣の弱い男であるかと思へば、王者らしい高慢さと我儘さもある。大に詩的な言葉を
述べて雄辯な事を好むと同時に、隨分慾深くもあり、小さくこすくもある。此等の性格が近代劇

式に心理學的研究としては興味あるものである。實際四幕五幕と進んで、主人公の苦のリチャードが一つの弱い心理研究の的になつた時に至ると、興味がグツと増してくる。ボリングブルツクが王に讓位の心ありや否やを問ふと、答へて Ay, no;—no, ay.「うん、いや——いや、うん」などよいタツチである。若し作者の當時の見物が心理研究を求め、作者もその氣で書いたものなら、「リチャード二世」は好個の題目である。けれども物語を求め、又その需要に應じてゐる作者は、適當な題目を擇んだものといへない。

9. A Midsummer Night's Dream.

「眞夏の夜の夢」

五幕、一二場、總行數二二二二。

希臘アセンス市の領主(デューク)シーシウス(Theseus)はアマゾン族(Amazons)といふ女軍國を征服し、却て其女王ヒポリタ(Hippolyta)の美容の虜となり、結婚を約す。扨樂しき其日の至る迄、面白き遊興の催しを命ぜしに、上に忠節の心から織物師ボトム(Bottom)を初め、樣々の市人等相集まり、素人芝居の仕組をする。

玆に此市の貴族なるイージーアス(Egeus)の娘ハーミヤ(Hermia)は父の擇べる若者ディミートリアス(Demetrius)を嫌ひ、却てライサンダー(Lysander)なる者と行末を誓ふ。父は怒りて娘を領主の許に連れ行き、說諭を乞ひけるに、領主は女に父命に反くまじきを令し、若し反かば命を失ふか、さなくば尼僧の生涯を送るべしと嚴達する。二人は主命の悲しくて、今や逃亡の外詮なしと、近き森にて逢はん計を定め、之を女の友ヘレナ(Helena)に語る。ヘレナは日頃ディミートリアスに思ひを寄せてゐた事とて、我が戀や叶はんと態と此密計を男に洩らす。(以上第一幕)。

戀人等が逢はんとする森は月影ほの暗く、此處を住家とする妖精(fairies)の王オーベロン(Oberon)は、后タイテーニア(Titania)の愛する侍童を己れに得んとて懇願すれども、聽かれず。腹立たしさに千里飛行の術にたけたる惡戲好きの臣下パック(Puck)に命じ、遠き印度より戀藥を齎らさしめる。此戀藥を眠れる者の眼に注げば、目覺めて見たる第一の者に、盲目なる戀を催さしむる不思議の靈藥である。之を后の眼に注ぎ、望みの聽かれぬ復讐とせん目論見。此處へやつて來た二人の戀人は森の繁みに道暗く、疲れて木の根を枕に眠る。それを追ふて他の二人も來る。中にも叶はぬ戀にあこがるゝヘレナの物語を聞ける妖精王は、いたく憐を催し、男に例の靈藥を注ぎ、醒めて乙女を戀ひするやうにしようとしたが、疎忽なパックが他の男ライサンダーに誤つて施したが爲に、彼は忽ち婚約のハーミヤを忘れてヘレナを戀し、玆に限りなき混雜が生ずる。(以上第二幕)。

他方にボトム一味の職人共は、芝居の下稽古に屈强の處と、又夜に乘じて此森に來る。之を見て、徒ら好きなパックは、ボトムに驢馬の假面を着けさせ彼等を嚇かして散亂せしめ、又妃タイテーニヤの眠れる處に此假面の驢馬をつれて行き、其の醒めるのを待つて居る。やがてタイテーニヤは醒めて藥の効顯著しく、驢馬の鼻面を撫でて切りに彼を愛する。(以上第三幕)。

既にして漸く妖精の王が怒り解け、皆々藥を拭ひ去られ、それ〴〵元に復する時には、森の夜が明け離れて、アセンス領主シーシウスが狩獵に來る。彼は玆に二組の戀人を見、始終の物語を聞き、改めて彼等に結婚を許す。(以上第四幕)。

領主の宮殿には三組の夫婦が出來た祝の大饗宴がある。ボトム等の俄か優人は、兼て仕組める滑稽な悲劇を演じて喝采を博す。後に妖精等が式を祝ふて祝福を祈る踊がある。(以上第五幕)。

此喜劇に登場の主要人物十名の關係を圖にして見ると次のやうなものになる。——

本篇の著作年代については一五九〇年—九八年までの間に種々の說がある。

込入つた話を上手に、興味ふかく話すことは、それも確かに一つのアートである。第一期の「ヴエローナの二紳士」ではまだ作者は十分そのアートをマスターしてゐなかつた。「間違ひの喜劇」

に來ると、一段とすぐれた腕の冴えが見えるが、更に第二期に入つて此「眞夏の夜の夢」に來ると、四對の戀愛關係の物語が實に手際よく取扱はれてゐる。

しかし話を上手に取扱ふだけでは、藝術としてまだ十分の尊敬を拂ふことができない。殊に劇では、單に story（筋）又は fable は殆ど劇の眞價を定める何ものにもならない。そこに、脚色（plot）が巧に作られねばならぬ。プロットは劇の目的で、その目的のため、くさぐさの素材を選擇し、調節することである。此「眞夏の夜の夢」で云へば、此劇の目的は或る貴人の結婚の式に上演せられるといふ實際上の用途があるので、此用途にふさはしい一つの空氣を作り出すことにあるらしい。夏の夜、薄月夜で森の影はほのぐらい。そこへ無數の螢が飛交ふてゐる。そのちらちら明滅する螢火を見てゐると妖精群が踊り狂つてゐるやうに見える。どこか人間を共の踊りに招きよせようとするかの如き樂の音さへ聞える。それは實は谷川のせゝらぎか、木の葉のさやさやとすれ合ふか、美しい、心地よい、晴々した、踊りたい、高笑ひしたいやうな空氣である。之が作者の狙つた此劇の目的ではないか。すると、いかに巧にすべての材料が此目的のために選擇配置せられてある事よ！

まづアセンスの名君シーシウスが勇婦國として知らるゝアマゾン族を征服して、却つてその女王ヒッポリタのために戀の征矢を射られて征服せられる。近いうちに華燭の大典が上げられる。その大典をことほぐため、道化者ボトムなどの町の忠誠な市民だちが Pageant を行ふといふ。いづれ面白い仕組に、面白い上演に相違ない。

只一抹の陰影は老臣イージーアスの訴へで、その娘ハーミヤが父の欲するディミートリアスと結婚するを嫌ひ、父命を辱かしめるにつき、とくと吟味を願ひたいといふ訴へである。勿論希臘でも（英國でも）父の命萬能である。父命に從ふか、さもなくば一生不犯の處女の生活をつゞけるか、二つに一つの返答、ささどうぢや、といふ事になる。ハーミヤは戀人ライサンダーと語り此上は逃亡の外はないといふ事になる。此事を友のヘレナに話す。ヘレナは兼々ディミートリアスを思つてゐるので、ハーミヤを思ひ切らせて我が戀人としたい願ひから、此事をディミートリアスに告げる。彼は、さつそくに跡を追ふ、ヘレナも又その跡を追ふ。——といふ錯綜で、見物は此先どうなるかと思ふ。しかし取扱ひ方は極めて輕く出來て、此錯綜から悲劇的結果が來ようとは誰も豫期しない。却て錯綜は面白い局面を作りはせぬかと豫期させる。そして次の森の場面で妖精群の仙郷が紹介せられる。

此妖精達が非常に人間的に取扱はれて、人間の世界と妖精の世界が全く一つであつて、二つで

ないといふ取扱ひ方に、一つのお伽噺式な劇としての成功する一原因がある。

しかし結局此劇は「situations の劇」である。幾組かの戀人の互の異樣な關係が主要な興味を作つてゐる。そして其それぞれの situation は少しも性格から來てゐない。實際四人の若き男女は皆同一樣で、之を區別する事さへ容易でない。作者は性格の痛切な研究に未だ力が及んでゐないのか——しかし、「リチャード三世」を見れば、さうも云へない——否、大方性格の研究は此場合喜劇をあまりマジメにする憂ひがある。あくまでも輕快に華々しいのが、此の初期の喜劇の特長である。

いたづら者で愛嬌者なるパックの藥汁を眼に注がれて、眠る前には死ぬほどにも戀してゐた男が、他の女に急に心を變へるなども、motivation（「動機づけ」即ち或る行爲又は事件が云々の動機、境遇、因緣から起つたものと人々をして解せしめるやうに描くこと）としては薄弱を極めたお伽噺式のものであるが、しかし若き人々の空想的な戀、あれにも此れにも心の移りゆく戀の表裏（おもて）を示す一種のシムボルとして考へられぬこともない。

しかし性格の研究のない代りに、玆にはむせ返へる程な詩の甘さがある。「ヴィーナスとアドーニス」の作者は再びその自由な空想を廣げて、眞夏の夜の夢に夢みる心地もて、思ふ存分に詩の領域に逍遙する。そして「ヴェローナの二紳士」の道化者ラーンスに於て芽を見た作者獨特のユーモアが、粗雜ながら道化者ボトム一味に依つて、こゝに餘程の發達が見られる。げに Quiller-Couch の云ふ如く、シェークスピアの really careless grace を示す一番初の藝術的作品は此れである。

要するに、この『眞夏の夜の夢』は、一篇の戲曲卽ちガツシリした構造の上に性格のあやを刻み込んだドラマといふよりも、その名の示すがまゝの夏の夜の幻想と田園への思慕とを歌つた劇的形式の抒情詩であらう。若しくは、あの美しいメンデルスゾーンの序曲に共まゝ連續する素晴しい牧歌的ソナタとも云へよう。領主御夫婦の華燭の盛典といふ莊嚴な和諧音に第一樂章が初まるが、やがて、思ひ思はれても叶はぬ戀人と、思ひ思はぬ戀人との四人の交錯に全く異つたディスコードが基調となつて第二樂章に入り、それへ妖精夫妻のいさかひと、パックのいたづら者とが加はつて、輕快に敏速に旋轉又旋轉する。しかし、すべては夏の夜の夢であつて、血を見るの、魂を呪ふのといふ悲劇的變調は決してはいつて來ない。青白い月の光のかすかに通す小暗い森陰に飛びかふ妖火の消えると共に、誤解は釋明せられ、もつれは解けて、ボトムと其一黨のバーレスクな哄笑の最後の樂章に移つて、音樂は靜に閉ざされる。

三十歳のシェークスピアは、故郷からロンドンへ出て以來、はや少くとも七八年を經過してゐるであらう。勤勉努力のかひがあつて、天與の才能はずつと磨きがついた。俳優としても、一座の株の配當を受けるだけに認められ、作者としても、既に五六の作を上演して一部の人にその文名を唄はれてゐた。功名心の足臺はできた。彼は大手を振つて首都を濶歩していいのであるが、その半面に、大都の喧噪と奸譎を厭ふ心は、靜かな平和の故郷を思慕する念と合體して、やるせない鄉愁に惱む心は、少しづつ芽ぐんで來たやうである。此時、恐らく或る要路の大官に結婚の祝典があつて、その餘興に一つ芝居をといふ註文が出たらしいので、爰に若き作者は滿腔の思鄉の心を傾倒して、この『眞夏の夜の夢』を作つたものと推測せられる。場面がなんで遠いアセンスであらう！　それは作者の鄉里の町だ。シーシウスがなんで神話中の人物であらう！　彼はイギリスの地主大名だ。暗い森陰を戀人を追ふて、思はずトンダ人違ひをした悲喜劇の經驗は、シェークスピア共人にもなかつたであらうか？　ましてボトムの率ゆる一隊は、作者の想像には一々そのモデルを指摘し得られたことであらう。殊に注目すべきは、此劇に於て作者が話源（ソース）として用ひた先人の書物のない事で、彼は其創意のまゝにオーベロンでもパックでも勝手氣儘に驅使し、活躍せしめる。作者の想像の翼は思ひきり羽を廣げて、幼時からの追憶に懷かしくてたまらない故鄉の森、小路、草花（四十幾種かのいろ〳〵な草花が此一篇に歌ひ込まれてあるといふ）、奇癖ある田舍人、妖精についての噂ばなし、それからそれと限りなく飛んで行く。だから此一篇に見るべきものは、作者に最も得意な性格の微妙な描寫とか、機微を穿つた人性の洞察とか、寛濶な死生の達觀への暗示とか、ではなくて、あくまでも牧歌的田園的の詩趣とユーモアである。此點では、彼の三十有餘の戲曲中にも、この一篇と比較すべき清新な初夏のイギリスの土の匂ひのさながらに馥郁たる詩篇は他にないのである。

戀愛に對する態度の苦だ皮肉なのは、やがて一兩年内に純情の戀愛悲劇『ローミオーとジューリエット』を書かんとしてゐる作者に取つて、大に面白いといへよう。シーシウスの男らしい戀とその成功も、やがてオーベロンの夫婦喧嘩に終るのだと見るのは、それこそあまりに皮肉な觀察であらうが、パックが齎らす藝草の液を眼に注がれた者は、目覺めて見た最初の男若しくは女に戀ふるといふのは、眞理ある皮肉であらう。見亘し、見來り、見据えた末、惟ふに世間大方の若い男女で、「春の目覺め」といふ靈液を注射されて、そして見つけた最初の男若しくは女にたゞならぬ心を寄せないものが幾人あらう！　他人事（ひとごと）ではない、作者シェークスピア御自身が十二年の前、同じ靈液のお蔭を蒙つて、最初に見付けたのが八歳年長のアン・ハザウエイ。一里の田舍道

を夕な〳〵通ふた道には、パックの待伏せにも逢つたであらう、ボトムの驢馬と道連れにもなつたであらう。淡かつた眞夏の夜の夢を、彼はどんな苦笑を面に浮べて想ひ起こしたことであらう！

10. Romeo and Juliet.
「ローミオーとジューリエット」

（「世界文學全集」中著者所譯「沙翁傑作集」參照）

五幕、二四場、外に Prologue（序詞）。總行數二九八三。

ヴェローナのモンタギュー(Montague)とキャピュレット(Capulet)家との間には長い間の確執があつて、兩家の一味は、上は高位高官の親戚から下は召使に至るまで、お互ひに出合ひ頭に街中といはず何處といはず嗤嘩口論の絶え間がなかつた。或時キャピュレット家では假裝舞踏會を催して友人知己を悉く招待する。勿論モンタギュー家の人々はこれに招待されない。けれどもモンタギュー家の嗣子ローミオーは、父の甥なる其友人ベンヴォーリオー(Benvolio)と共に途で我家の僕に逢つて舞踏會のあることを知り、友の勸めるがまゝに、かねて想を懸けたるローザリン(Rosaline)といふ美人を一目見るため假面を著けて此會に出ることになる。然るにローミオーの眼は最早ローザリンに向つては餘り注がれない。彼れはもう一人の乙女を見付けるが、その美しさは曾つて覺えぬ程、彼の心に激しい鼓動を與へる。彼は其乙女の名前を訊ねて、キャピュレット家の女嗣子

ジューリエットなるを知り、びつくりする。とかくする中、キヤピュレツト夫人の甥に當るチボールト（Tybalt）といふ血氣にはやる短氣者がローミオーの正體を見付け出して、モンタギユー家の彼と闘はうとするが、キヤピュレツト家の主人に諫言されて思ひ止まる。（以上第一幕）。

ジューリエットも亦この美しい見馴れぬ若者のことが忘れられず、憂鬱と戀々の情やみ難く、露臺（バルコニー）に出て月と星とに向ひ、已が心の秘密を打明ける。ところが偶々その下にローミオーが居て彼女が己れに對する戀心を打開けてゐるのを聞き取る。喜びの餘り彼れは己れが下にゐる事を知らせる、それで乙女は胸に秘めてゐた數々の熱い思ひを打明けねばならなくなる。戀人二人は逸早く秘密に結婚しようと決心する。結婚はローミオーの友人修道僧ローレンス（Friar Laurence）の僧房でその翌日行はれることとなる。（以上第二幕）。

結婚の當日、ローミオーの二人の友人がヴエローナの町を歩いてゐると、チボールトに話し掛けられる。彼はキヤピュレツト家の宴會にローミオーが出席したことを根に持つて、彼を見付け出して、闘はうとしてゐる。口論がつゞいて、その眞最中にローミオーが姿を現はす。チボールトに罵られながらローミオーは物柔かに受答へする。彼はたつた今結婚式から歸つたばかりで、其目には、もはやキヤピュレツト家の人々がさう憎くは見えなくなつて來てゐる。しかし他の連中には、彼の氣弱なのが合點行かず、ローミオーの友人マーキューシオー（Mercutio）といふ元氣者は怒りの餘り彼に代つてチボールトと闘ふが殺される。こゝに至つてローミオー遂に復讐心もだし難くチボールトを斬る。ヴエローナ公の命により、ローミオーは追放の身となる。泣きくづれゐる僅か一夜の花嫁ジューリエットを後に殘して彼は此地を去る。ジューリエットの父親は彼女の秘密結婚などは露知らず親戚の青年貴族パリス（Paris）に彼女を娶はせようとする。（以上第三幕）。

絶望の淵に沈んだジューリエットは親切な僧ローレンスに相談を持ちかける。ローレンスは、パリスとの結婚を承諾した樣に見せ懸けて、結婚式の朝、彼が彼女のために用意して置く水藥を飲む樣にと勸告する。之れを飲めば假死の狀態に陷るので、彼女が假の墓窖に横つてゐるとき、ローミオーを呼びにやつて、彼女を助け出さうと謂ふのである。彼女は僧に教へられた通り藥品を飲む。兩親は娘が死んだものと悲歎に泣き暮れつゝ墓場に送る。（以上第四幕）。

僧ローレンスは伴りの死の事をローミオーの所へ知らすべく同門の僧ジョンを使者とする。然るに傳染病流行の折柄、途中で檢疫官の疑を蒙つて停められ行くこと叶はず、空しく歸つて來る。一方では他の使者が、ローミオーに彼女の實際に死んだことを知らせる。彼は悲歎のあまり狂亂して、貧乏な藥屋から毒藥を手に入れ、已が妻の側で死なうとしてジューリエットの墓場へ行く。

墓場の入口で彼はパリスに出會ひ挑戰される。パリスは殺される。ローミオーは墓窖に入り、毒を飲んで最後の息を引取る。間もなくジューリエットは昏睡から覺め、戀人の屍體に氣がつく。そして今墓場へ入つて來たばかりの僧ローレンスから事の眞相を聞き知る。彼女はローミオーの七首をつかんで自殺する。この重なり合つた悲劇がキヤピュレツト、モンタギユー兩家の人々をいたく動かし、遂に兩家は和解するに至る。(以上第五幕)。

も少し詳かに筋を語れば、——先づ初幕の前に序詞役が

Two households, both alike in dignity,
In fair Verona, where we lay our scene,
From ancient grudge break to new mutiny,
Where civil blood makes civil hands unclean.
From forth the fatal loins of these two foes
A pair of star-cross'd lovers takes their life;
whose misadventured piteous overthrows
Do with their death bury their parents' strife.

……

權勢いづれ劣らぬ二名族、
我等の舞臺とする美しきヴェローナにありて、
古き怨みは新しき爭ひを生じ
市民の血は市民の手を汚す。
この敵視する兩家の胎内より
星に惠まれざる二人の情人生れ、
運命拙なくも戀は憐れに破れはて、
二人の死と共に、双親の爭ひをも埋め了りぬ。

（下　略）

云々と序詞を述べてから、開幕第一に、街頭のキヤピュレット、モンタギユー兩家の家來の喧嘩。兩家の近親のものが出る。主人が出る、大騒動になる、そして領主が來て初めて鎭まる。怒つた領主は、以後斯樣な謂はれのない口論からヴェローナ市の安寧を亂るものは死か追放かと嚴命す

る。爭ひの空氣と、領主の嚴命とで、悲劇的種子が蒔かれる。モンタギュー夫婦は此爭ひの中に一子ロミオーの居なかつた事を喜び、どこにゐるかと氣遣ふ、それも自然。そして主人公――男嫌ひと評判のローザリン孃に對する報はれぬ戀に思ひ惱むロミオーが出てくる。

と、すぐ幕が變つてキヤピュレット家になり、茲では若き貴公子パリス伯が、娘自身でなく娘の父キヤピュレットに緣談を申込んでゐる。之も、モンタギューと違つて家長風を振廻して我儘なキヤピュレットの性格をわきまへたパリスの仕打ちでもあり、又パリスが直接ジューリエットに申込まないところに卑怯さも見えて、パリスが振られてもあんまり氣の毒でないといふやうな豫備感情を見物に與へる。その返答に「まあ、あの子もまだ十四の小娘、何といふか分らない。幸ひ今夜舞踏會をやるから是非來て、その機會に娘に言寄つて見てくれ」といふ。そして下男に案內狀を町中にくばらせる。

と、無學な下男は字の讀めぬ悲さ、どこへどの手紙を持つて行つてよいか分らぬ。そして道に青年に逢つて讀んで貰ふ。それが折あしくか又折よくかロミオーとその友人のベンヴォーリオーだ。面白い催しだ。此舞踏會には屹度同家の緣者ローザリン孃も行かうし、又町の美人が大方集まるから、大勢の美人を見て、片思ひに惱むロミオーの心を他に轉ぜしめようと、ベンヴォーリオーは假裝して出かけるやうにとすゝめる。之も甚だ自然。

キヤピュレット家では假裝會の準備をしながら、母親は乳母と共に結婚の事、パリスをどう思ふ事など語つてゐる。ジューリエットの方の感情や心の準備も十分に出來てゐるわけ。

假裝會――ロミオー、ベンヴォーリオー、マーキューシオーまぎれ込む。ロミオーとジューリエットとの戀のめざめ。

そして美しい戀の蕾(はなゝ)く場面で、一面にチボールトといふ嗤嘩ずきの火のやうな男がロミオーの一味の入場を見つけ、立腹して劍に手をかける、キヤピュレットの主人なだめる、といふ一挿話もあつて、此戀の容易くは治まらないといふ感じを與へる。

やがて假裝會が閉されると、引かへしてロミオーはジューリエットの後室へ忍び込み、美しい lyricism（叙情詩的情調）のうちに二人の戀は成立する。かくて次々に少しの無理がなくて、いろいろの偶然事を經て、運命の大きな淵へ若き二人は急いで行く。

それから最後の破局(キヤタストロフィー)に到るまでの經過は、僧ローレンスが人殺しの嫌疑者としてヴェローナ公の前に引出されて辯解する次の陳述でよく盡してをる。

『私がお二人の婚禮を取結びました。そしてお二人の秘密の結婚日がチボールト樣の最期の日

で、その時ならぬ死のため、花婿はこの市から追放になりました。ジューリエット様の悲嘆に暮れておいでなされるのは、チボールト様の爲めではなく、この方の爲めでした。(キヤピュレットに向ひ)あなた様はその悲みの圍みを解かうと思召し、パリス伯爵と無理強ひに結婚させようとなされました。そこで姫は私のところへやつて參られ、氣が狂つたやうなお顏で、この二度目の結婚を遁れる道を教へてくれ、さもなければ、私の庵室で自殺して了はうと言はれます。そこで、私は法術によつて習ひ覺えた催眠劑を差し上げましたところ、望み通り利目があつて、姫は死人の姿となられました。一方私はローミオー様へ書狀を認め、この恐ろしい宵こそは藥の力の消える時だから、こゝへ來て、假の墓場から、あの方を連れ出す手傳ひをしてくれと書きました。ところが、この手紙を持つて行く役目の男、卽ち僧のジョンは、ふとしたことから途でくひ止められ、昨夜になつて、私の手紙を持ち歸つたのでございます。そこで私はたつた一人、姫が目を覺ますと定つてゐた時刻に、御一族の墓穴からお連れ申さうと思つて、やつて參りました。私の心算は、姫を私の庵室へ隱して置いて、機を見計つて、ローミオー様のところへ送る考へでございました。ところが、私が參りました時は、姫が目を覺まされる時よりも一二分前でございましたが、氣高いパリス様も誠あるローミオー様もこゝに非業の最後を遂げて居られました。その中姫がお目覺めになられましたので、私はこゝをお出なさい、天命の致すところは是非なしと耐へて下さいとお賴みしました。ところが、その時物音がしたので、私は驚いて墓を出ましたが、姫は失望の餘り、私と一緒に行くことを承知なさらず、御自害なされたものと見えます。私の存じて居りますことはこれだけでございます。

この申立によつて一切の顚末を明かにするを得たヴェローナ公は、兩家の家長を喚んで「見い！何といふ懲罰が、そち達の憎しみの上に降つたことか！　天は戀を以てそち達の喜の種を殺す手段を見出したのだ、……皆々罰しられたのだ」と說き諭す。キヤピュレットとモンタギューとは兄弟として互ひに手を執りあひ、兩家不和の犧牲になつた亡き兩人を弔ふため相並んで紀念の像を純金で造らうと協議し、比翼塚のそれならで立派な比翼像が此町に建つことになる。

時は初夏の夜。ナイチンゲールの歌は森の深みから來る。花の杯は半ば閉されてゐる。靑白い光は森の木や草と、小山の輪廓とを照す。此深い靜止の底には豐かなる力が藏され、自然の休息する如き憂鬱の下には燃ゆるが如き情緒が伏在してゐるの感がある。夜の蒼白なる色と冷氣との下に我等は壓へ付けられた熱情を豫想する。沈默の裡に首をうなだれてゐる花一つ一つ、皆咲き出

でんとあこがれてゐる。此の如きものが是れ沙翁が此悲劇を發展せしめ行く特殊の空氣である。此の間にあつて、かねて若き人に有りがちのキューピッドの矢を受けて心鬱々としてゐたローミオーが、偶然に一たびジューリエットを見るに及び、先きの戀人は忽に捨てゝ、此新しき宮に全身の情火を捧げ、遂にシェークスピアの劇には例のない「心中」に近い死に方をして身を果てる。この若き二人の切なる戀は實に讀者のあつき同情を引くに足るが、實は故なくして同じ町に不和な關係にある兩家の犧牲となつたので、其結果兩人の悲慘な最後と共に兩家の爭を埋め了つたれば、兩人の死は決して空しくなかつたのである。

實に、世界に於ける最大の、熱あり力ある、Love と Death の讃歌が「ローミオーとジューリエット」である。此悲劇は、メーテルリンクが二つの宿命と謂ふところの戀と死とを此上なく美化したものである。それはルネッサンスにふさはしい花であると共に、百代に亘つて若き人々に欽慕せられ參詣せらるべき戀愛の殿堂である。

吾々は又此劇に於て青春の讃美歌を見る。そこには青春の純潔無垢なすがたがそのまゝ歌はれてある。實に青春は素直に信ずるの時である。他を其のまゝに信頼する。わけて其ハートに信頼する。ジューリエットがローミオーに對し、なみなみならぬ引着けを覺えた時、すぐ其の心を信じ、決して迷ひかなどと疑ひを挾まない。そして愛すると同時に、愛されん事を求め、二人は相抱いて、その同じ心にあつた事を只驚くばかりである。

オーソリティーのある說によれば、此作は一五九一年—二年頃に書かれ、一五九四年—六年の頃に改訂したのだといふ。

この物語は其頃の英國では人口に膾炙した話で、之を主題とした劇や物語も數多くあつたらしい。今日一つの「ロミュースとジューリエットの哀史」てふ韻文物語が殘つてゐる。それはアーサー・ブルックといふ詩人が、伊人バンデローの小說集に據つて草した一篇で、題して

The tragicall Historye of Romeus and Juliet, written first in Italian by Bandello and now in Englishe by Arthur Brooke.

これがシェークスピアの粉本であるとも云はれ、又粉本は別に今は存しない劇が他にあつたのだとも解かれるが、此物語詩のうちに既にローレンス法師、マーキューシオー、チボールト、乳母、藥劑師など、ほんの僅かながら、描かれてある。そして此物語と沙翁の劇とを比較すると、此劇

聖の腕の如何に冴えてゐるかに殆ど驚歎せしめられる。

その驚歎せしめる主要な點は、蒸し暑い南國と若き日の夢のやうな戀愛の空氣を織り出すの巧みさ、すばらしい場面のつぎつぎの演出、そして Motivation「動機づけ」(前掲「眞夏の夜の夢」の中參照)の鮮やかさ(批評家ベーカーの特に高調するところ)などである。

主として Motivation について考へると、此劇では隨分とアクシデントが取扱はれ、それが決して單なるアクシデントでなく、性格人情とよく合して、決してゆるみを見せない。

劇「ローミオーとジューリエット」で吾々が心を打たれる第一の事は、運命といふ事である。若くは說明しがたい偶然の出來事の我々の人生に及ぼす力である。之を我々はどう考へたらいゝのか。此劇に於て見る偶然の出來事はいろいろあるが、その主要なものを擧げると——

一、ローミオーやベンヴォーリオーがモンタギュー家の僕に道で逢ひ舞踏會のあるのを前以て知るのも偶然。

二、舞踏會に行つてジューリエットを見初めるのも偶然。

三、やがて奧庭に忍び込んで思はずジューリエットの自白を聞くのも偶然。

四、チボールトとマーキューシオーの喧嘩も、その死も偶然。

五、何よりもローレンス法師の使が疫病のため足留めされ目的地に達し得なかつた事の偶然。

此等偶然の事が、若し違つた有樣に起つてゐたら、どんな違つた結末になつてゐた事であらう。

實際我々の過去を顧みても、偶然の出來事のために一生の轉換を見る事は實に多い。或は、我々の過去は悉く偶發事件の連續で、自分の意志など何程も働いてゐないとさへも思はれる。普通運命だと考へられるものも、多くは此偶發事件の形に於て現はれる不可解な人生の要素を指してゐる。ギリシヤ人は宿命を神々よりもなほ以上にある力となし、人は如何にもがくも努むるも此宿命のさだめを破り又變ずる事は出來ないと考へる。即ち宿命主義で、人間の意志は極度に小さくなつてゐる。(無論全部さうではない、ソフォクリーズなど別な立場にある)。

又非常な悲觀論者は、人生には命運といふ程定まつた秩序はない、只偶發事件の連續で、人間の一生を支配するものは盲目な自然力である、人生にも宇宙にも目的もなく秩序もない、と謂ふ。

キリスト教では、主として神の攝理の解釋を下し、神が人間を正しきに導く方便として樣々の出來事が人生の上に下される、之に導かれ之に磨かれて人間は次第に完全になつてゆく、神の惠の一種の現れである、とする。此解釋も、人間の自由意志があまり認められない處れありともされる。

運命(又は神)――自由意志。興味あるが困難な問題。シェークスピアは何と解したか。すべての大藝術家の然るやうに、彼も人間の解釋し得る事と得ない事とを判然と區別したやうである。實際悲劇は可解事と不可解事との巧みな配列に成ると考へられる。說明し得る事だけでは一向につまらない平凡なものになり、お伽劇になり教訓劇になる、人生としても眞でないといふ感じを與へる。同時に、說明し難いものだけでは謎になつてしまつて、謎を解く一種の好奇心の外刺戟せられない。

つまり、人間は全然神とか運命とかに玩弄される操人形でもなければ、さりとて、人の意志が一切で、吾々は境遇と事件の完全の主人である、ともいへない、それが大方人生の眞實であらう。吾々が過去を振返へり見る時、すべて殆ど偶發事件に引づられて導かれて今日に及んだ如く見え、しかも將來を豫想する時、そこに盲目な偶然な事は更になくして、一路を以て白頭に到る意氣の氣旺んである。吾々の欲するところは成らぬかも知れない。しかし成らぬまでも成さんとして進んでこそ生存の價はある。

そして盲目な無秩序な偶發事件に遭遇するごとに、我々の魂のそれぞれ異る反應もあり隨つて發達もある。それを描きなしてこそ其藝術は研究に値ひする。すべての事件を經過し依然として元の杢阿彌である時、その人の甚だ無價値な興味のない人物であると同樣、左樣に取扱はれた劇でも小說でも、それこそ價値のないもので、劇では所謂メロドラマとは斯樣な類のものを指すのである。

かく「ロミオーとジュリエット」には偶然が非常に重大任務を帶びて、隨分しばしば現はれてゐるが、しかしそれが決して單なる偶然らしくない、やはりそこへ行くべきものだつた、といふ感じを強く抱かせるのは、やはり motivation「動機づけ」の強く描かれてゐるが爲に相違ない。

此劇に見はるゝ戀愛觀は、――

(一) 戀愛はすべて at first sight 一ト目見て陷る性質を持つてゐる。戀はそれほど直覺的なものであらう。段々つき合つて見ておのづから互に好き合ふ事もあるが、その場合にも大抵第一印象は必ず戀に導くに良好なものであらう。

マアローの Hero and Leander に記した一句 Who ever loved, that loved not at first sight を思ひ出される。

It lies not in our power to love or hate,

For will in us is overruled by fate,

……

Who ever loved, that loved not at first sight ?

愛すらも惡たもわれ等の力にあらず。

我等の意志は運命により支配さる。

……

誰か戀せしものありや、一目見て戀に陷らずして。

（二）隨つて、戀は運命である。第一幕第五場の末に於て、ジュリエットが自分の慕ふ其人を「ロミオといふ名でモンタギュー家のお一人兒、こちらとは仇敵の仲ですよ」と乳母から聞いて「たつた一つの戀が、たつた一つの憎から萌え出る。知らずに餘り早く見染めて、知つたのはもう遲かつた。不吉な戀が生れたものだ、憎い〳〵敵を愛せずに居られないとは。」と嘆息する通り、幾代の間同じ町に住んでゐて、深き理由もなきに互に仇敵視し、家僕の末に至る迄、道に逢へば刄に手をかける間柄の二家に生れた男と女と、遂に成就せぬ戀に陷るが如きは、全く宿命である。斯かる宿命的戀愛の例は、古來東西の傳說などの上に少なからずある。

Paris—Œnone　　Menelaus—Helen

Paris—Helen　　Hero—Leander

Tristram—Iseult　　Pyramus—Thisbe

Lancelot—Guinevere　　Troilus—Cressida

Abelard—Heloise　　Paolo—Francesca

日本では歌舞伎の梅川—忠兵衛、おさん—源五衛門、お初—徳兵衛、おさん—茂兵衛など。

（三）隨つて、戀するに理由はない。「なんであんな人が氣に入らぬか」「なんであんな人をそれほど思ふか」などは愚問。此劇の粉本と云はるゝ上記「ロミエースとジュリエットの哀史」には男も女も共に兩家調和の爲めといふ事を云ふが、シェークスピアは一言も之を言はせない。法師ローレンスの如く第三者にして初めて此心あるべし。（第二幕に於て法師はロミオ〳〵の說諭の中に「考へる事が一つあるので肩を貸してあげる。此緣談が好都合に行つて兩家の積る怨が純な愛に變へまいものでもないから」と云ひ、第三幕にも同じく「そのうち時を見てお前の結婚を披露し兩家を和睦させ」云々の言葉あり）。

（四）隨つて、一度であつて二度は來ない。All or Nothing である。emotional なプラツニングや西行や文覺のやうなもの。但しバイロンやゲーテの場合はどうも別である。

（五）實際戀愛問題は結局不可解である。人生そのもの同樣不可解だ。或る點まで解かれはするが、之だと明るみに把み出して見ると忽ち消えて了ふものらしい。「戀愛は幽靈の如く、あるといへばあり、なしといへばなし、そして人生の寂しいところに出る事も似てゐる」と云つた人がある。しかし此「ローミオーとジューリエット」に現はれただけではプラトーぶりの理想的戀愛觀である。イディアの世界、その世界で一つであつたものが分れて二となり、此假象の世界に生れてゐる。此二つがそれぞれ他の補足するものを求めあこがれる、それがラヴだ。それは實に魂の問題である。肉體は魂の宿る假りの形に過ぎない。

ところで此魂を高調し過ぎたプラトニツク・ラヴが中世紀に於て妙な形となり、夫婦關係と愛人關係を全く別種に考へて來る事にさへなつた。此點は日本人たる我々は特にわきまへ置くべき事で、我々の戀愛觀念のうちには、スピリチユアルな、マリヤ崇拜の如き（よし少しの影は佛教の普賢菩薩禮拜のうちにあつたにしても）ものゝないかはり、戀愛と結婚とを別にする考へは、全體として行き亙つてゐる觀念ではない。ほんの最近のそれこそ外來觀念であると斷言できる。

しかしルネッサンスの子たるシエークスピアは此中世紀ぶりの無理に引き歪げた考へに一顧も與へず、戀愛―次に結婚生活と、此はかない戀物語の「ローミオーとジューリエット」にも無雜作に進ませてゐるところは注目に値ひする。

（六）此意味の戀愛には、どうしても、人生のかなたに何ものかある事を感得せしめずには置かない。シエークスピアの靈魂不滅に關する考へはどんなものであつたか大に問題だが、人間に免かれ難い運命、そして最後の解決は之を死に求むるの外ないとき、我々の心はどうしても此世だけで滿足出來ない。近松の「心中物」は、いつも未來では必ず浮ぶといふ一蓮托生の觀念が伴うてゐるのは、當然であると思はれる。戀愛はもともと生きんが爲めの、生れんが爲めのものであるのに、それが少しく道を誤れば死に急ぐ。やはり十と一、生と死の相近い事を示してゐるのであらう。

（七）此意味にての戀のない場合を考察し來れば左の如きものであらう。戀は誰もするといふ考へを止めねばならぬ。戀愛には資格がある、資格のない人が戀の何のといふのは許されない。戀は凡ての人には來ない。

（イ）生物學的に單に種の保存の爲めの本能と見れば、そこに結婚はあるが戀はない。かうなれば、ある程度の範圍内では誰が誰でもいゝのだ。

（ロ）個性を認めないものには戀はない。（一人と一人とのものであらねばならぬ。一人立

の婦人、その魂の進歩し得る人、さういふ人が相手でなくてはならぬ。）

（八）詩（詩情詩心）のないところ、理想のないところには戀はない。

（八）かういふ意味では、かの痛ましい戀愛の三角關係は成立しない。

然らば、ローミオーがローザリンへの戀はどう解釋するか。それは戀のための戀であつた。ローザリンは美しく賢く嚴格で清淨な乙女である（第一幕第一場參照）が、必ずしも冷たい婦人であるとは思はぬ。若し彼女がキヤピュレット一族の者でなく、ローミオーの自由に愛を求め得る婦人であつたら、或はもつと色よい返事をローミオーに與へたかも知れない。しかし何となく此兩人は非常な熱情的な戀に陷るが如くには思はれない。

年若い男女は、まづ戀のために戀をする。何となく男戀し、又女戀しいといふ狀態が戀の幻影をすぐ捕へて戀だと思ひ込むことがある。之が成功して結婚生活に入ると、幻影がさめて劇の題目になるやうな樣々な問題を起す。「目についた女房近頃鼻につき」と川柳子の歌ふやうに、やいやい騷いだ結婚生活が存外うまく行かぬのは、皆戀の爲めの戀、戀を戀したものではないかと考へる。眞の戀はそんなものではないと思ふ。殊にロマンチツクの性質の人には戀のための戀が多く起り得るものである。

次に此劇にて著しい特徴は、その普遍性である。無論南國伊太利の空氣は充分に描寫されてゐる。話そのもの許りでなく、用ゐられた言語も南方の香りがする。ローミオーの言葉は全くペトラークが短歌のやうに流れ出てるし、ジューリエットも全くの伊太利人で、豫想の力に缺けてゐて、切迫つまつた場合には機智百出、熱烈であつて同時に純眞である。しかもローミオーとジューリエットとは直に天下の lovers である。時も處も超越して我々の心をうつ。それ丈此兩人は類型（type）であつて個人性が乏しいとも云へる。

尙ほ今一つ此劇に見逃がせない點は、コントラストである。第一幕第一場に於けるローミオーの「おゝ憎みあふ愛！　おゝ愛しあふ憎！　おゝ無から出た有！　おゝ重い氣輕さ！　まじめな輕薄さ！　見かけのよい出來そこねた混沌！　重い羽毛、明るい煤、冷たい火、病める健康！　常に覺めた眠！　かうしたものゝあらう筈はなからう！　かうした愛を感じてゐるのだ、かうした事に一向愛を感じない僕が。」

といふ戯言が何か全體のシムボルのやうにも思はれる。

（一）テーマの上の愛と憎みの對照。そこで場面がいつも愛と喧嘩と相交代して變化する。

（二）場面に於ける晝（又朝）と夜の交代對照。第四幕の第二場第三場でジューリエット二階に毒を仰ぎ、下にパリスとの結婚の準備。

（三）ロマンチックな心地と俗氣俗臭との對照——精神的情緒的事物に理解をもたず高潔優美なものに同情なき俗物根性の兩親などと、天眞的直情純情の青年男女とのコントラスト。自由な愛と、硬化した因襲の世界（此兩家の爭は單に因襲）。

（四）男女主人公の性格の對照、男は女よりも陰欝、女は男よりも實際的。

男女主人公以外の登場人物數名に關して、一言づゝ品評みたやうなものを云つてみようか——

キヤピュレット　家長制度の家の主人によく見る型。怒り易い。我意を通す。自分一個がえらいつもり。他を壓伏する。娘の意思を顧みざる點は夫婦とも同じ。

キヤピュレット夫人　夫の老人であるのと反對に夫人は若いが、性質は冷めたい。自分の事だけ考へてゐる。下賤である。ジューリエットは眞の子か知ら？　と思はれるほどで、第四幕第五場に於て娘が其部屋で死んで横はつてゐる時の悲みも、よそごとらしい。

キヤピュレットのやうな男の妻には、えて斯樣なキヤラクターのない樣な婦人がある。

マーキューシオー　The prince of wits で滑稽が口を衝いて出る。そしてルネッサンスの若者はかくこそありたれと思はれるほど、full of action, full of energy. 隨分惡口を叩くが、それで紳士たる態面は汚してゐない。非常に interesting な快男子で、彼を殺さねば劇の中心注意が彼にのみ向けられると云はれた。しかし彼れの死んだ時、我々の全注意は生ける二人の戀人に集中して彼は一旦忘れられる。そして時々又記憶に蘇つて、痛快な人物だつたと愉快な追憶になる。

チボールト　には此面白味がない。

僧ローレンス　彼の人生を解決する方法は只「哲學」——瞑想靜觀だけ（第三幕第三場參照）。彼れの藥は只「忍耐」の一服のみ。ローザリンへの戀であつた際はローミオーも此忠告でよかつた、否、却つて、樂しかつた。併しジューリエットとの戀では、さうはゆかぬ。彼が最後に取りし策はまづい。

ジューリエットの乳母（其名は記されてない）　鄙俗な下司女ながら、ジューリエットを愛してゐ

る。第三幕第五場に於て、娘がパリスとの結婚を否むとて父や母が散々に罵り毒づくに對し「まあお嬢様がお可哀さうに！　旦那様そんな口ぎたなく仰しやるものではありません」と庇ひ、せつぱ詰つてジューリエットが「お前は何と考へる？　何か一言でも嬉しい言葉を話してくれない？　乳母や、慰めてよ」と云ふところなどを見ると、彼女を愛してゐるは此乳母一人の觀がある。

11. The Taming of the Shrew.

「悍婦馴らし」

五幕、一二場、外に Induction（序幕）二場。總行數二三〇〇。

鑄掛屋のスライ（Sly）は主婦に酒代の督促を受けた儘、泥酔する。そこへ通り合せた或る貴族は戯れに彼を城内に連れ行き、美しき床に臥させ、醒むるを待ちて、彼を殿様として多くの侍臣にかしづかせる。そして彼は病に由て正氣を失ひ、十五年間を夢中に送つた名家の嫡流であると信じさせる。今や病本復の喜びにと、優人を誘ひて彼れの前に次の劇を演じさせる。（序幕）。

伊太利パデュア市の富豪バプチスタ（Baptista）に二人の娘がある。妹のビアンカ（Bianca）は艶麗にして柔和、多くの求婚者のあるに引きかへ、姉のカサリーナ（Katharina）は名うての悍婦にて、誰一人彼女を妻にせんとする勇氣ある者がない。そして父は姉の結婚の成らぬうちは決して妹を嫁がせぬと主張する。

妹の求婚者のうちにピーザ市の人ルーセンシオー（Lucentio）といふのがある。一計を案じて從

僕トラニオー(Tranio)を己れに扮せしめ、己れに代つてバプチスタに妹娘を乞はしめ、自分は私教師に化けて其家庭に入る。(以上第一幕)。

僕ツラニオーはルーセンシオーと名乗る紳士に化けてビアンカに求婚する一方に、家庭教師の地位を得たる本物のルーセンシオーは密かに彼女を靡かせんとする。さる程にヴェローナの紳士にペトルーチオー(Petruchio)といへるが、バプチスタ家の姉娘の事を聞き、心に期する所あり進んで求婚の候補者に立つ。そして父の許諾を得てカサリーナに會見し、詈り騒ぎ果ては繊手を擧げて彼を打ち据うる女を事ともせず、言ひ伏せ説き破り、うわ手うわ手に出でゝ、遂に自ら次の日曜には結婚の式を擧ぐると宣言する。(以上第二幕)。

愈々結婚日が來たが、肝心の婿殿が見えぬ。自烈たく待ちあぐんでゐる所へ現はれたペトルーチオーは、これは又一生の大典といふに異様の風采をしてゐる。呆れたる會衆に向て『着物と結婚をするのであるまい』To me she's married, not unto my clothes と煽り掛けて、其膳を奪ひ、式果つるや用意せる宴會の席に列するをも拒み、新婦を伴うて田舎の別邸に急ぐ。(以上第三幕)。

馴れぬ旅路にせり立てられて疲れ果てたカサリーナが家に着くと、ペトルーチオーは愈々猛り狂つて彼女に食を與へぬ。表面は彼女を頗る大切にする言ひ草のもとに、料理人の持ち出づる食膳を、一々斥けぶちまけて其無味を叱責する。空腹に耐へ兼ねた新婦が何にてもと哀願するのを更に顧みぬ。仕立屋を招きて彼女の爲に様々の美衣を註文し、出來上つたのを婦人が見て喜ぶのを尻目にかけ、又々苦情のあり丈を盡して割き棄てる。殆ど手の付けられぬ有様に、カサリーナは我が身の我儘勝手なるをうち忘れ、何とかして夫の短氣を直さんと苦心し哀願するやうに成る。かくてペトルーチオーの策は全く成功して、先の悍婦は世にも又なき從順の夫人になる。

一方パデュアでは、贋物のルーセンシオーがビアンカへの求婚に其父の同意を得ると同時に、本物のルーセンシオーは計略圖に中つてビアンカを手に入れる。そこでルーセンシオーの父の出席が必要となるので、僕ツラニオーは或る老人の小學教師に懇願して、似せ父の役をつとめさせる。(以上第四幕)。

その折しも眞の父がピーザ市から到着して、主人の服裝したる僕ツラニオーに出會ふ。ツラニオーはルーセンシオーをして秘密にビアンカと結婚を濟ましむるまで何とか其間をごまかして置かねばならぬので、此本物の父をば其筋へ拘引されるやうにしようとする。ところへ丁度ルーセンシオーとビアンカとが夫婦として到着する。それからお互ひに一伍一什を明かしあうた上、

パデュアに於けるルーセンシオーの邸で一同宴會に列し、カサリーナとペトルーチオーも來賓として其席に就く。宴終つて婦人客が別室へ退いたあとで、男子連が寄合つて、婦德の一としての柔順といふ事について談論し、「ペトルーチオーの妻こそは、どうしても一番の悍馬だ」との意見が出る。果して然るや否やと一同賭をやつてみる。豈に圖らんやカサリーナこそ妹ビアンカよりも、將又そこに出席の他の花嫁よりも、柔和で從順で、最も夫の意に逆はぬ妻であらんとは。といふのは、其證明の爲に各自新婦を呼び寄せ、眞ッ先に直ぐ來る者を最も柔順な妻と見做して茲に賭けた金を取らせるといふことになり、それ〴〵迎ひにやると、ビアンカは「今は忙しいから行かれない」とのキツい返辭。今一人は「こちらからは行けません、そちらからお出でなさい」との御挨拶。所へカサリーナが、しとやかに現はれて來て、恭々しく夫に「何の御用」と伺ふ。何千兩といふ大枚の賭金は彼女のものとなる。さしも名うての悍馬を馴らして了つたペトルーチオーは勝誇つて、カサリーナの手を執りつゝ去る。(以上第五幕)。

此喜劇の著作年代は一五九四年—一六〇三年の間に諸說區々である。

これはシェークスピアの作中決して傑作を以て稱すべきものでも、又非常に特長ある作でもない。しかし、不思議に舞臺に上せられる作で、今日に至るまで、なかなか人氣を失はない。其原因は此作が三十餘篇中「間違ひの喜劇」と共に愉快な笑劇(ファース)であるからであらう。

farce「笑劇」といふ語はシェークスピアが此劇を書いた頃にはなかつたので、それより百年もの後頃から用ひられて來た。短い滑稽な劇といふほどの義で、短いが故に十分性格描寫ができず、脚色の發展も少なく、多くは滑稽な關係や出來事を用ひ、一種の茶番狂言じみて、幾分誇張した、騷々しい芝居になりがちである。

しかし此「悍婦馴らし」は只の笑劇ではない。ジョン・メースフィールドは之を……farce with ironic philosophical intention と云つてゐる。鑄掛屋が殿樣になりすました處、又ペトルーチオーの行動のうちに確かに一種の鋭い皮肉が見られる。

此劇で最も特長あるは、劇中劇といふ仕組の巧妙さである。劇中劇は他に「眞夏の夜の夢」にあり、「ハムレット」にある。前者では純朴な市民が領主の婚儀を祝ふために催す一つの pageant であり、後者は、之に假りて王子が王の奸惡な心を暴露し、精神的に復讐しようとするのである。そして二者共に決して重要な分子でないことはないが、しかも「悍婦馴らし」に於けるほどの重要さを持つてゐない。

試みに問ふ、Induction（序劇或は序幕）二場は何のためにあるのか？　單に面白い仕組だからといふだけであらうか。之がなかつたら、どうであるか？　なかつたら餘りに短いから添へたのであるか？　若し醉漢スライの話に代へるのに、例へば、領主の姫君の結婚式があるので、その悦びに催すのだといふやうな仕組であつたら、どうであらうか？

私は此序の幕と本芝居との間に、もつと密接な不可分な關係があるやうに解釋する。

由來日本人は單に思付きだの、結構の妙だのいふ事をのみ考へて、更にその上に一歩を進めようとしない弊がある。從つて外國の大作に接しても、その底にひそむ深意などいふ事を尋ねるのを餘計な事、作者の實際と遠い事のやうに考へる。これは己れを以て人を律するの誹を免れぬ一事ではないか。私は單に興味本位に作者は筆を取つて居らぬと思ふ。若しくはシェークスピアに取つては、興味は興味だが、我々の考へるよりずつと深い興味でないと興味ではなかつたのであつたとも考へられる。

演劇は興味本位である、娯樂本位であるといふ。云ふまでもない。我々は樂しまんが爲めに劇場に行き、又小說を讀むのである。說教なら教會、學問をしになら教室、社會問題なら講演會に行く。

只何を樂しみとし、何を興味あるものとするか、そこに本當の人間が見られる。鑄掛屋のスライは此「悍婦馴らし」を見て、何の興味もなく、頻りに酒を求め、又妻と思つてゐるものと早く床につかん事ばかし考へて居る。諸君もさうか？

シェークスピアは單に可笑しい場面と臺詞（せりふ）を以て見物を笑はせさへすれば、それで滿足したであらうか。

Dr. Johnson は云つた——As knowledge advances, pleasure passes from the eye to the ear, but returns, as it declines, from the ear to the eye.

耳より入るものは想像力に訴へる。そして結局魂に訴へられる如きものを以て、初めて娯樂とし、興味あるものとする。

近來殊に青年の間に、演劇は結局官能のものであるといふ言を聞く。これは問題劇社會劇の流行に對する反動として一應尤もであるが、しかし之もほんの反動としての言葉だけで、我々が長く官能の陶醉だけで以て滿足しきれなくなる、否、陶醉だけでも容易に得られぬ事はいと明白である。音樂が與ふる如き陶醉は、決して官能だけの陶醉でない、官能を通して魂の慰安であり、目覺めである。それがなくては眞の藝術とは云へない。

まづ序の幕に於て、田舍の場末の酒屋の前に泥醉してゐる鑄掛屋と、通りかゝる獵歸りの領主の一行との描寫は、すぐれた筆つきで、作者の故鄕の匂ひのゆたかなものがある。あのなだらかな丘と、廣い牧場と、迂廻するゆるやかな流れの Warwickshire は、作者の心に深く愛着の心を泌み込ませたと見え、彼が田園の風光を叙する時、彼は殊に得意である。しかし叙すると云つても、叙景詩人や小說家の叙するとは異つて、だらだらと限りなく筆をやる事は劇作家には許されない。僅の一二語で、よく全般を髣髴たらしめることは、物の眞髓を捉む力ある者にのみ限られてゐる。シェークスピアは就中此點に秀れた作家であつた。

次に此序幕は之れだけで面白い仕組であり、又そこに立派なユーモアもある。單なる興味のためのものとしても一向差支ない。しかしシェークスピアといふ一つの偉大な心は、單なる興味のものを書いても、その底に何か意義深いものを托してゐるやうに思はれる。少くとも我々が觀て面白く感ずるのは、單に表面だけの事ではない。何か？

今日の社會が根本的に改革せられねばならぬ幾多の理由がある事は云ふまでもない。そして其れについていろいろの改造の提案がある。就中著名なのは社會主義とか、共產主義とか、無政府主義など數多ある。是等の提案には皆それぞれ相當な理窟があつて、必ず一長所を持つてゐないものはない。しかし其のどれにも通じて最大な缺點として、私共に全幅の傾倒を禁ぜしめるものは、いつも物を先にして心を後にする事である。制度がまづ改まらねば、人心も改まらぬといふ點である。

泥醉した夢のうちに、王侯の金殿玉樓に運び込まれたスライは、いつの間にやら勞農ロシヤのクレムリンの宮殿に運ばれて來た勞働者を思出させるものがある。そこへ運ばれて、主從忽ち顚倒し、常に支配せられた者が、支配する者となつた。スライは茲に一變して、正義と愛情を以て立派な支配者になれるであらうか。彼は昔の友人も先祖も酒屋の主婦も一つの夢であつたと忘れる事には同意するが、彼は酒を求め、演劇の如き少しく高尙な娛樂に對しては少しも興味がなく、眠るか、さもなくば美しい細君と思つてゐる者を側に引つける事だけしか考へてゐないではないか。

Sly. Am I a lord? and have I such a lady?
Or do I dream? or have I dreamed till now?
I do not sleep; I see, I hear, I speak;
I smell sweet savours, and I feel soft things:

Upon my life, I am a lord indeed,
And not a tinker, nor Christpher Sly, ——
Well, bring our lady hither to our sight;
And once again, a pot o'the smallest ale.　(Ind. ii. 70—77)

『ぢやおらは殿さまかね？　そんな奥方があるかね？　こりや夢ぢやねえ。見えもする、聞えもする、物もいへる、いゝ匂ひがするし、物の柔いのも分る、ぢや、全く、あの、おらは殿さまなんだ。鑄掛屋のクリストファー、スライぢやアねえいんだ。ぢや、奥方をこゝへ伴れて來てくんろ、それから醪(どぶろく)をもう一壜だ。』　（坪内博士譯による、以下準之）

私は世の中に一人の支配者も被支配者もゐない事が理想の狀態であると思ふ。しかし其日が容易に來るとは信じられない。その日の來るまでは、支配する人と、支配される人とが存在する。そして支配する人はどんな人間かと云ふと、自からを支配する力のある人でなくてはならない。自分で自分を支配する事ができないで、どうして人を支配する事ができよう。クリストファー・スライが偶然支配者の地位に置かれたからとて、彼が直に立派な支配者にはなれない事は勿論である。

しかし同時に、茲に昔から支配者の地位に置かれてあつた領主 (a Lord) が又眞の支配者らしく描かれてあるか、と云へばさうでは勿論ない。我々は此領主も此鑄掛屋も結局ちつとも違はない、同じものだ、同じく支配者たるの資格のない者だ、といふ事を痛感させられる。そこに皮肉がある。一日中用もない、獵に出る。翌日もそれだ。そして偶々路に醉ひどれた一勞働者を見ると、些しの憐みの心を起すでもなく、すぐに彼を用ひて慰みものにしようとしてゐる。彼の日常生活も恐らく神の目から見てスライと一分一厘でも善良であらうとは思はれない。スライは破(こわ)したコップ代を拂ふを拒み、巡査でも何でも屁のかつぱだと、世の中の法律を無視してゐるが、領主 (Lord) とても、これは更に大がかりに、人間としての法則、即ち人は人を憐れむべきだ嘲弄すべきではないといふ大なる法則を平氣で破つてゐる。

シエークスピアは飽まで公平である。

私は「人の本性はなかなか變らぬものだ」といふ事が此序幕の趣旨であり、又此劇全體の趣旨であると信ずる。そして此意味で、次に記す The Taming of a Shrew のやうに、スライが劇の全部を通じて舞臺の上にある事がよいと思ふ。

此 "the Shrew" より大ぶ古い The Taming of a Shrew といふ一つの劇があつて今日に傳は

つてゐる。一五九四年の出版である。此 "a Shrew" と "the Shrew" とは非常に似てゐるので此兩者の關係についていろいろの說が述べられてゐる。私は Pope を初め Raleigh 教授の說に賛成で、"a shrew" は若い頃のシェークスピアの作で、後改訂して今日の "the Shrew" としたのだと假に考へる。a が the になつたのも幾分その意味がないか。しかし今日の "the Shrew" も全部シェークスピアの筆に成つたものかどうかは疑はしいので、或は他の若い人が幾分筆を加へたものが今日に傳はつたものかも知れない。何しても "A Shrew" にはスライがもつと度々顏を出す。そして最後に又もとの酒屋の前に連れ行かれる筋になつてゐる。これがよいと思ふ。少くとも次の結末だけつけて欲しい。

Act v., Sc. ii の前に領主の臺詞を入れる。最後に酒場の前の場を入れる。

なぜさうするか？　私の此劇の解釋によると、前にも一言したやうに、此劇では序幕の趣旨がやがて本文の趣旨に成つてゐる。そこが面白い。卽ち單に面白い筋の話だからといふだけではない。若し假に序幕のあとに「眞夏の夜の夢」を入れたらどうか？「ヴェニスの商人」は如何に？「ウインゾアの氣輕な女房ら」は？　いづれも到底劇術的價値の無くなるものとなる。

扨本文だが――繰返へしてザッと筋をかい摘むと。パデュアの町にバプチスタ・ミノーラといふ富豪がある。此富豪に二人の娘がある。姉のカサリーナは非常に我儘な、口惡な、人を人とも思はぬ鬼娘であつて、もう十分年頃だが、どんな男も怖れをなして近よらない。ところで妹のビヤンカは打つて變つた、しとやかな、をとなしい婦人で、此方には多勢求婚者がある。しかし父のバプチスタは姉の嫁入らぬうちは妹は無論どこへもやらぬ、男子との交際も禁ずるといふ決心。妹の求婚者達が困つてゐるところへペトルーチオーといふ狂氣じみた男が出て、姉娘の持參金の多いのに目をくれて無理からに結婚し、上手へ上手へと出て結局名うての悍婦を馴らして了ふ、といふ話し。

しかし此は、ほんの表面だけの所謂お話で、單に之を上手に書き上げたといふのでシェークスピアが世界的名聲を博すといふのでは、あまりに馬鹿々々しい。彼の偉大さはそんな處にはない。彼はいろいろの才能を持つてゐるが、就中性格描寫の點に卓越してゐる。卽ち人間の性格の細かい特長を見ぬく力と、之を表現する力とが彼の最も得意の壇場である。此劇は作者の壯年の作で、後の悲劇其他ほどの力强い性格研究はないにしても、決して單に面白い話だから之を面白く綴つて舞臺に上せたいといふやうな事はしない。勿論藝術品として提供する爲には、何よりも印象深

いものとせねばならぬ。印象深からんが爲には、二三の中心點に集中しなくてはならぬ。卽ち爰では全力がペトルーチオーとカサリーナに置かれて、他の人物は比較的あつさりと取扱はれてある。そして全體として笑はす事を主眼とした事は拒まれないから、可笑しい關係を造るためには性格觀察が十分に遂げられない。それにも拘らず此二人は十分面白い人物に描かれてある。そして其性格は普通云ふところとは大分違つてゐるやうに思はれる。

かく云ふと諸君は云はん——現に劇の中にビヤンカは sweet で、gentle である、カサリーナは shrew（ガミガミ女）である、Kate the Curst（憎まれケート、癇（くせ）カサリン）である、rough である、と書いてあるではないかと。そこが劇が小說や物語詩と違ふ所以。小說では作者の云ふところを信ぜねばならぬ。劇でもさうであるが、劇では作者は何とも書いてゐない。劇中の人物が云つてゐるだけ。そこに劇は人生と同じく我々に物の表裏を見る事を敎へる。

第一に、ビヤンカは柔和であらう、又從順でもあらう、しかし存外淺薄な、意志の弱い、表裏のある女ではないか。從順とは云ひながら、姉の結婚式後に、良人の招きにも拘らず、用がある ならこちらへ來なさいと云つてゐる。

Biondello. Sir, my mistress sends yon word

That she is busy, and she cannot come.

ビオンデロ「奧さまがおつしやいますには、今は忙しいから行かれないと」（第五幕二場）

そして父バプチスタが姉の結婚の決らぬうち、妹の結婚は許さぬといふだけでなく、一切の求婚者と交際させぬと云つたのは、何となく此妹娘は意志が弱くて、尻輕で、つい男の口車に乘り飛んでもない間違を生ずる事もあり得る事を虞れたのであるといふ感じがする。第一幕第一場でバプチスタは切りにビヤンカをせき立て內へ這入らせるが、カサリーナに向つては、

……Katharina, you may stay.

「カサリーナ、お前はこゝにゐてもいゝよ」

と云つてゐる。

ビアンカは同じ所で父に向ひ、

Sir, to your pleasure humbly I subscribe:
My books and instruments shall be my company,
On them to look and practise by myself.

ビヤンカ……とうさま、お心のまゝにいたします。書と樂器とを友達にして、讀むのと、習

ふのとを樂しみにしませう。

と云つてゐる。無論一人の時は約束通り勉強してゐたかも知れぬが、第三幕第一場でルーセンシオーが家庭教師に化け込んで、彼女に飛んでもない事を教へ初めると、もう彼女は彼に心を傾けてゐる。

求婚者の一人であるホオテンシオーは輕薄な、此がいけねばあれ、といふ風に、戀愛を知らない、情慾のみで動く、戀愛をする資格のない男で、彼の怨言などどうでもいゝ事ではあるが、次の彼れの言葉はビヤンカの尻輕を證明するものでない事もない。

Yet if thy thoughts, Bianca, be so humble,
To cast thy wondering eyes on every stale,
Seize thee that list: if once I find thee ranging,
Hortensio will be quit with thee by changing. (III. i 88—91)

ビヤンカさん、若しも君がどんなつまらない囮にでも目をうろ〳〵向けるやうな、そんなさもしい料簡なら、好きなものをお攫み。君は浮氣者だと定ッちまやア、ホオテンシオーは敵手を他で求めるよ、君を捨てるよ。

勿論ビヤンカは他の求婚者が皆氣に入らぬ事は、第二幕第一場にある

Bian. Believe me, sister, of all men alive,
I never yet beheld that special face
Which I could fancy more than any other.
Kath. Minion, thou liest; is't not Hortensio?
Bian. If you affect him, sister, here I swear
I'll plead for you myself, but you shall have him.

「姉さま、正直、わたし、生きてる人のうちで、特別に好きといふやうな顔の人はありませんせのよ。」

「此のあばづれめが、嘘を吐け。ホオテンシオーぢやないの？」

「姉さま、あなたあの方がお好きなら、わたし誓つて、あなたの爲にあの方を說きますから御亭主になさい。」

この姉への言葉だけでも確かで、之は必ずしも姉への遠慮でもない。故に彼女はルーセンシオーと一ト目見て戀に陷るに差支はない。しかしルーセンシオーはどんな男か？　金持の一人息子と

いふだけで、とんと頼りのない、男らしくない男らしい。パデュアへ勉強に來て、勉強はしない。ビヤンカの噂を聞いただけで、すぐ戀心を起す。そして一向智惠がなくて、何もかも僕のツラニオーの指圖を仰いでゐる。殊にルーセンシオーに許し難い事は、彼は富裕な父の嗣子ではあるが、自分がまだ富裕なわけではない、それをバプチスタが懸念し、父親の證書がなくては娘はやれぬと云はれた時、彼は同じくツラニオーの入れ智惠で、贋の父を造る（冒頭の梗概參照）如きは、許し難い不良青年である。なぜツラニオーをビーザに遣はし、眞の父の許可を乞はないか。若し時日がないとすれば、その事を明白に述べてバプチスタに待つて貰ふべきである。

何だかビヤンカも、此ルーセンシオーに似つかはしい氣の弱い、ぐうたらな奥さんの感じがする。父親が第二幕第一場でビヤンカをルーセンシオーにやるか同じく求婚者なるグレミオーにやるかを決する所でも、金を多く娘に與へる方にやると云つて、娘の意志を少しも考慮してゐない。此妹に較べて姉はどうであらう？

カサリーナ　彼女は決して所謂おとなしくない、手荒れである、口ぎたない。總領兒らしくひどく我儘である。

しかし彼女にどこか腹黑い點があるか？　意地惡であらうか？　嘘つきであらうか？　妹のやうに意氣地なしであるか？　猫被りであるか？　彼女は決してさうでない。

彼女は明かに、妹のビヤンカのやうに、友を作り、又人の好評を得て、そして早く結婚生活に入らうといふ考へはない。しかし彼女とても決して結婚を嫌つてはゐない。ゐない所ではない、欲してゐる。彼女がビアンカを打擲せんとしたのを父が出て來て取りをさへる場合に彼女の父に向つての次の言葉が十分それを洩してゐる。

Kath. What! will you not suffer me? nay, now I see,
She is your treasure, she must have a husband;
I must dance bare-foot on her wedding-day,
And, for your love to her, lead apes in hell.
Talk not to me; I will go sit and weep,
Till I can find occasion of revenge.

おや、わたしの邪魔をなさるの？　いよ〳〵分りました。彼女はあなたの御秘藏です。彼女にや亭主を有たせなけりやなりません。わたしは妹の婚禮日に跣足で踊りを踊らなけりやなりません。あなたが彼女ばつかりお可愛がりなさるから、わたしは地獄へ猿を牽いて行かんけ

りやなりません。いゝえ、聽きません。わたしは部屋へ往つて、一人で泣くからいゝわ、此返報ができるまでは。（第二幕第一場）

只彼女のやうな太い膽玉、强い意志、勝氣な女に取つては、彼女の周圍の人々があまりに柔弱な、氣のない、それで惡がしこい連中で、到底彼女の興味を引かない。彼等はすべて彼女自らの所謂

I wit, it is not half way to her heart.　(I. i. 62)

「あれは亭主なんか、迎へたがつちやゐますまいよ。」

である。

彼の父さへも彼女の尊敬を購ひ得なかつたであらう。シェークスピアの描いた老人には兎角我儘な、專制的な、癇癪持ちの父があまりに多く、Prof. W. Raleigh の如きは、作者の父の面影がそれではないかと云つてゐるが、それは兎も角もとして、此バプチスタ・ミノーラも決してすぐれた智惠と分別とのある老人ではない。

彼女はホオテンシオーとか、グレミオーとかのやうな、愛に溺れたり、又甘やかす事を知つても眞に愛する事を知らないやうなヘナヘナ男でなく、眞に男らしい男を心ひそかに求めてゐたであらう。さういふ男と苦勞がして見たかつたであらう。そこへ現はれたのはペトルーチオーである。

ペトルーチオー　彼は理想的男性でもなく、又作者もそんな心持で書いた人物ではさらさらあるまい。しかし此劇に出てくる凡ての男性に比較して見ると、遙に群を拔いてゐる。

第一に　彼は plain-speaking である。思ふ事は率直に思ふまゝに述べて悔いない。彼はバプチスタに初めて會うて、口を開いてすぐ自分の意中を述べてゐる。グレミオーはあまり率直なので注意してゐる位である。

Gremio. You are too blunt: go to it orderly.　(II. i. 45)

「あんまり無作法すぎますよ。言葉づかひに注意なさい」

しかもペトルーチオーは平氣である。

第二に　彼は實際的であり、只ののらくら者ではない（ルーセンシオーとは違ふ）。バプチスタへの次の言葉がよく立證してゐる。

ペトルーチオー。…　あなたは父をよう御存じである以上、父の性質から推して、わたしがお分りでせう。わたしは地面、財產一切を相續して、それを決して、減さないで、むしろよりよくしたといつてよいのです。ところで、若し娘さんに異議がないとなつたら、いよ〳〵結婚といふ段になつて、財產は幾ら娘さんにお持たせになるんですか、承はつときたい。

バプチスタ。　わたしの死後に地所半分と所持金のうち二萬クラウンだけを遺はす心算です。ベトルーチオー。　すると、わたしは其持參額に對して、娘さんが、わたしに先へ死なれて、後家となつた場合にはわたしの持つてる限りの地所、借地權一切がつさいを讓ることを保證します。ついては、あなたとわたしとの間に、契約を双方共必ず履行するといふ特殊證書を取交すことにしませう。

第三に　彼は強い自信を有つてゐる。有名な其求婚の場を見よ。彼はカサリーナに向つては

「……ケートさん、僕はあんたを馴らすべく生れた男なんだ、山猫のあんたを手飼猫のあんたにすべき天職を有つて、生れた男なんだ。……」

と強く出で、バプチスタが娘との談判の模樣を尋ねるに對しては

「どんな鹽梅式？　成功は無論です。失敗しよう筈はないですよ。」「……嬢さんは、剛情張の我儘者どころでなく、まるで鳩のやうに、おとなしいのです。氣が短いどころか、長閑で長くつて、春の日のやうでさ。忍耐强いことに於ては、グリゼルダ第二世といつてもいゝくらゐだし、貞操にかけては羅馬のルークリーズそこのけです。で、つまり我々二人は、いづれ、そのうち、或日曜日を以て、式を擧げることに約束しツちまつたんです」

と答へる。想出すのは詩人ブラウニングのエリザベス・バレット女史（後のブラウニング夫人）への求婚である。此の「悍婦馴らし」を見て行つたのではないかと思ふほど、似ても居り、男性的な自信のあるやり方である。

（第二幕一場）

第四に　彼は意志の力が强い。彼は氣質から云つて非常に癇癪持ちである。第一幕第一場の初めに彼が下男のグルーミオーを打擲するのは無論當時の見物を笑はせる爲のものであるが、ベトルーチオーのため決して名譽ある行動ではない。しかし此癖を持つてゐて、彼は一度もカサリーナに對して、自分を抑へる力を失つた事はない。いつも上機嫌で good humour で、彼女のすべての惡罵、すべての反抗、頰を打つたのさへ平氣に耐へてゐる。茲に彼の最も大きな强所がある。カサリーナが彼を愛するに至つたのは恐らく此點にあらう。意志の强い人だけに彼は決して嘘をつかない。

I knew you at the first,
You were a movable. (II. i. 197—8)

「あなたは、見たところから、すぐと、撥返りさうな家具に似ててよ」

これは確に反對を意味してゐる。

彼の缺點も數多くあるらしい——。

第一に　彼の獸的なのは決して彼の美點ではない。しかし彼ほどの自制の力があれば、弱々した吹けば飛ぶやうな「モダンボーイ」よりは遙によい。

第二に　彼は witty ではない。カサリーナとの舌戰で負けてはゐないが、洒落の點では敵はない。第二幕第一場一八〇行以下に於てカサリーナと頓智を闘はすが彼の洒落は甚だ拙い。彼は "Much Ado About Nothing" の Benedick ではない。

此の二人の好一對の男女が幸ひ爰に合する事ができたのだから、二人は結婚しさへすればよいので、それ以上ペトルーチオーと氣狂じみた狂言をしなくともよいと云ふ人があるかも知れない。若しさういふ人があつたら其人に答へる。——人生はしかく單純には行かない。かういふ男が、悍婦を馴らすと云つたやうな大芝居をせねばならぬ事は、事それ自身で非常に皮肉である。

カサリーナの心は決して惡くはない。しかし彼女はあまりに我儘に育つてゐる。彼女はなほ多くの學ぶべきところ修養すべきところを持つてゐる。殊に深窓に育つた所謂箱入娘に取つては、飢えと寒さを知る事は必要である。

カサリーナの方からしても、眞のペトルーチオーを發見するには、あの奇妙な式、式後の武者修業を必要としたであらう。ペトルーチオーが式の當日に歸らない時、彼女は怒りと失望と、そして疑念とをまだ持つてゐる。

Kath. No shame but mine: I must, forsooth, be forced
To give my hand, opposed against my heart,
Upon a mad-brain rudesby, full of spleen,
Who woo'd in haste and means to wed at leisure,
I told you, I, he was a frantic fool,
Hiding his bitter jests in blunt behaviour;
And to be noted for a merry man
He'll woo a thousand, point the day of Marriage,
Make friends, invite them, and proclaim the banns,
Yet never means to wed where he hath woo'd.
Now must the world point at poor Katharine,

And say,——'Lo, there is mad Petruchio's wife,
If it would please him come and marry her.'

わたしだけの恥辱です。わたしは、いやでたまらない、氣まぐれの半氣ちがひの亂暴者に無理無體に結婚させられなけりやならんのです。あの男は、性急に、緣談を申込んでおいて、而かものろくさと式を擧げようといふのでせう。だから、あいつは、氣の違つた馬鹿者だといつたんです。不作法な行爲で、駄酒落の毒舌を塗隱してゐるんです。さうして、面白い極樂蜻蛉だといふ評判を得るために、千人も二千人もへ緣談をいひ込んで、式の日をも定めて、友達を招待したり、披露式を行つたりするんです。けれども、其の申込んだ敵手と實際は結婚する氣なんかあるもんですか！　さ、かうなると、世間ぢうの者がわたしに指さしをして、御覽、あれが氣ちがひのペトルーチオーの細君だといふでせう、萬一にもあの男がやつて來て式を擧げるやうだと。　（第三幕第二場）

それをツラニオーが慰める。するとカサリーナは平生にも似ず、「でもあたし、あんな人間に逢ふやうな事がなかつたらよかつたものを！」と云つて泣きながら這入つて行く。

そして最後に彼女が心から良人に服從するのは、具眼の批評家が、

Her ultimate submission is no mere result of want of food and sleep, but of her perception that he has been playing a part, and acknowledgment of the justice of the lesson.

と云つた通り、單に夫が横暴の言動を恣にして、安眠させなかつたり食ふ物も食はさなかつたりするので、それに困つて閉口の餘りに出てたのではなく、夫は芝居をやつて居るのだと悟つて、この亂暴と見える夫の訓練の下に彼女が修行を積むことの正當である事を識認したがためであらう。

一體から云つて芝居をしなくてもよいものを、餘儀なく芝居をするといふ點に、此劇のアイロニーがあり、又何となく一歩を誤れば悲劇になる可能性がある。メースフイールドは之を觀破して次の如く云つてゐる。

He (Sh.) indicates the tragedy that occurs when a manly spirit is born into a woman's body.

云ふところの manly とは何かといふ事で、一と議論あるべき一句であるが、ともかくも、カサリーナの悍婦的振舞も何となく一つの芝居を無理にしてゐる感じがする。「あらし」の主人公プロスペローのやうな賢明な父が父であつて、正しさと分別を以て彼女を教育して行つたら、彼女は

立派な、強い、しかも十分女らしい女に育つたであらうと思はれる。しかし不幸、父は此きかぬ氣の娘を只怖れ只心配して、結局我儘放題に育たせ、彼女をして本性以外の漫罵惡罵の人となしたと解釋して差支ない。

ペトルーチオーの芝居はもとより大芝居で、之で此芝居はできてゐるのであるが、これ又彼の本性からではない。彼は喜んで得意になつて芝居の立役になつてゐるとは解せられない。そして芝居はカサリーナの爲めよりも周圍の愚物の爲めになされてゐる點が多い。

此解釋で、よく批評家の非難する二つの白を見ると、しかく非難すべきものではない。

第一に　第三幕第二場で、

Pet. She is my goods, my chattels; ……
My horse, my ox, my ass, my anything;
And here she stands, touch her whoever dare;
I'll bring mine action on the proudest he
That stops my way in Padua.——Grumio,
Draw forth thy weapon, we're beset with thieves;
Rescue thy mistress, if thou be a man, ——

彼女は僕の所有品です、動產です。……

彼女は僕の馬です、僕の牛です、僕の驢馬です、僕の何でもです、現にこゝに（とケートを遮二無二引つかゝえて）立つてゐる。さ、どいつでも、おれが此女を伴れてゆくのを止めて見ろ、パデュアで一等威張つてる奴だつても敵手にするぞ。グルミオ、汝も拔け、盜賊に取卷かれてゐるんだ、汝が男なら、さ、早く奧さんを助け出せ！

妻を所有物の如く考へる不當さは無論である。しかし之は此際他を威脅する爲の誇張であり、そして彼の意味は、私有物だから、他の指の觸れるのを許さぬといふ保護の意味が強いと解釋し得られよう。實際の夫婦關係も、妻が夫のものであり夫が妻のものである事に成立する。勿論片務ではいけない。

第二は　婦人が夫たゝ旦那たる人に對して飽まで柔順である義務を力說する最後のカサリーナの言葉である。（第五幕第二場一三四——一七七參照）

しかし男女同權の眞義が何であるか、現制度の下に於ける男女の職能の相違を考へる時、此言

葉は決して不當な屈從ではない。

一番最後に、驚いた二人の傍觀者はかう云つてゐる。

Hortensio. Now, go thy ways; thou hast tamed a curst shrew.

Lucentio. 'Tis a wonder, by your leave, she will be tamed so (V. ii.)

ささ、めでたくお榮えなさい。名代の悍馬を馴らし附けてしまつたんだからね。

かういつちやア何ですが、全く不思議です、カサリーナさんがあんなに柔順におなりになつたのは。

しかしルーセンシオーは驚いても、我々はあまり驚かない。結局 Nature は少しの事件位で變ずるものでなく、只事件に由つて眞の Nature が現はれるだけである。"the shrew" は知らぬ人は馴らされたと思ふであらうが、實は單に眞の所を得ただけで、彼女はいつ迄も強く、いつまでも意氣地なしを罵倒し、そしてペトルーチオーとは眞に幸福な一身合體の生活に入るであらう。ペトルーチオーの得意の言葉は決して誇張でない。

Marry, peace it bodes and love, and quiet life ..... (V. ii. 106—108.)

「平和の前兆さ、愛の、家庭圓滿の前兆さ、……」

12. The Merchant of Venice.
「ヴェニスの商人」

（「世界文學全集」中著者所譯「沙翁傑作集」參照）

五幕、二〇場、總行數二五九〇。

ヴェニスの紳商アントーニオー(Antonio)は數ある親友中わけても貴公子バサーニオー(Bassanio)を愛してゐる、そして彼の爲めとならば如何なる犧牲を拂ふも厭はない。偖バサーニオーは相思の仲の才色兼備にして富裕なる「ベルモントの貴婦人」ポーシヤ(Portia)へ求婚の訪問に往かんが爲めの金がなく、止むを得ず心友アントーニオーに三千ダカットの借金を申込む。けれどもアントーニオーの持船はその時、全部外國に出てゐて、現金がなかつたので、彼れはユダヤ人の金貸しシャイロック (Shylock) から借金する。そして一定の期限に返濟すべきこと、然らずば代りに己れの肉一ポンドを罰金とすべきことを債權者に誓約する。(以上第一幕)。

シャイロックは自分を高利貸として罵り侮辱するとて以前からアントーニオーに對して怨恨を抱いてゐたが、その一人娘ヂェシカ(Jessica)がアントーニオーの友人、ローレンゾー (Lorenzo)

と駈落ちしたので、益々アントーニオーに敵意をもつやうになる。

ポーシヤの父は死ぬ前に、娘の結婚に關して次の様な奇妙なる方法をとるべきことを遺言とした。卽ち求婚者をして金銀鉛の三つの種類の小匣のうち、一個を擇ばしめ、その中にポーシヤの肖像畫あるを當てたものこそ彼女の夫たり得る資格を得ると。此籤を當て損なつて空しく歸つた數多の求婚者の殿（しんがり）に彼女意中の人バサーニオーが來ることになる。（以上第二幕）。

バサーニオーはポーシヤの邸に到着する、そしてうまく鉛の匣を擇んで幸運を當て、彼女を喜ばす。茲で二人は末變らぬ事を誓ふ。だが、バサーニオーの喜びも束の間、アントーニオーから彼れ所有の商船の難破したこと、及びその負債を辨償することができずシャイロックから肉一ポンドを切りとることを强制されてゐるといふ手紙を受けとるに及んで、彼れの戀が叶つた有頂天も破られる。彼は友を救はんと急遽ヴェニスに歸る。ポーシヤはアントーニオーの裁判に立たんと私かに決心する。（以上第三幕）。

法廷に於て、ヴェニスの公爵の面前で、アントーニオーが審問をうける。其處へポーシヤは誰にも知らさず秘かに邸を出で男裝して、法律博士となつて——侍女ネリッサ（Nerissa）を同じく男裝させ書記として隨へて——現れる。彼女の變裝については夫のバサーニオーさへも氣づかない。彼女は非常なる雄辯と巧妙なる論理とによつてシャイロックを敗訴に歸せしめる。恩人の勝利に歡喜せるバサーニオーは「私も私の友人も、あなた様のお智慧により悲むべき違約金の支拂を遁れることができました、その御禮として、あの猶太人に與ふべき三千兩の金子をお骨折に報ゐる心からのしるしと致したい」とて、負債の元金を辯護士と思はれた人に贈呈せんとする。併しポーシヤはその金を受け取らず、その代りにバサーニオーがはめてゐる指輪を所望する。それは二人結婚の約を交はした時に、ポーシヤがバサーニオーに與へ、そしてバサーニオーが身を離さぬと誓つた指輪である。彼れは心ならずも、懇望されるまゝ之を美貌の法律家に與へてしまふ。ネリッサ（これより先き主人と同時にアントーニオーの友グラーシヤーノーと結婚した）も其例に倣うて同樣に、グラーシヤーノーから、一生離さない約束をさせた指輪を强請（せが）み取つた。（以上第四幕）。

ポーシヤとネリッサは匆々邸に返り假裝を解いて、何くはぬ顏して良人達の歸るを待つ。斯かるべしとは夢にも知らぬバサーニオーとグラーシヤーノーは歸宅して各自の妻に「指輪を嵌めてゐないのはどうした」と詰られ「吃度どこかの女にやつたのでせう」と不實を咎められ返辭に窮するが、結局「この指輪をあげるから、こんどはもつと大切にして之を放さないやうに誓ひなさ

い」といはれて出されたのを見ると、こは如何に、其指輪は無くなつた指輪と同じものであるところから、變裝一件の事實が判明し、兩人共驚き且悦ぶの外はない。アントーニオー亦、その所有船の三艘が入港したので、幸に財産上の危機を脱し得たことを喜ぶ。(以上第五幕)。

一五九四年二月、英京ロンドンには非常な興奮があつた。それは二人の惡黨を拷問にかけたところ、その惡黨の自白により、女王エリザベス陛下の侍醫スペイン人ロデリーゴー・ローペズ(Roderigo Lopez)が毒を盛つて女王陛下を弑し奉らんとする陰謀をしてゐる事が明白となつた。今日から考へれば、どうも無實の罪であつたに相違ないらしいが、ローペズは六月七日絞罪の極刑に處せられ、生命を失つてしまつた。ところが此ローペズがユダヤ人であるといふので、さらでも忌み嫌はれてゐたユダヤ人は、殊に嫌惡の的になつた。事實をいふと、英人はユダヤ人とはどんな人種であるか知らなかつた――一二九〇年から十七世紀の中葉まで一切英國へ入る事を許さなかつた――が、何にしても彼等の最も尊崇するクリストを磔刑に處したのはジュウである。ジュウはクリスト教の怨敵である、ジュウはクリストの禁じた高利を取つて金貸しを業とし、人の弱點につけ込んで膏血を絞る人非人である、と當時の民衆は一般に思込んでゐた。

此時シェークスピアは年三十、劇壇に關係して數年、俳優として作者として相應の地位を占め、又かなりの經驗を積み、腕に充分の覺えがあつた。彼はジュウが人氣の中心に成つてゐるのを見て、何か此人氣に投ずる作をして見ようと考へた。――人氣に投ずる事は必ずしも惡い事ではない。當時人氣に投じ、今日に至るまで三百年間絶えず人氣に投ずる作をする人は、何としても偉大といはねばならぬ。――そして人肉を質入にした商人と猶太人との話を思ひ出した。此話と、今一つ之も當時人の喜んだ金銀鉛の三つの箱の話を打つて一丸とし、茲に「ヴェニスの商人」といふ沙翁作中でも最も纒つたものと稱せらるゝ作となつた。其の著作の年代は一五九四年から晩くとも一五九七年までの間と云はれてゐるが、現在行はるゝ其脚本は、上述の如き氣運に乘じてものされた當初の作の改訂であるといふ。

「ヴェニスの商人」はその表題の示す通り、ヴェニスの一商人アントーニオーの物語で、喜劇である。中世紀からかけてルネッサンスに至る頃の悲劇喜劇の概念は、大詰になつて主要人物が死によつて問題を解決するか、それとも、一旦の葛藤が芽出度く無事に終熄するか、によつて構成せられるので、言葉を換へると、悲劇は破綻劇、喜劇は圓滿劇の意に外ならない。故に悲劇必ず

しも悲しい空氣に充滿してゐるわけでなく、喜劇とても喜ばしく樂しい場面ばかりで終始しない。此のヴェニスの商人は、抵當に入れた胸部の肉一磅のため、あはや命を墜さんとしたが、危機一髪の間に救はれ、且つ失はれたと思つた財産も半ばは回收されて、彼はもと通り立派なヴェニスの商人になるのであるから、彼に取つてこの結末は決して不愉快ではないであらう。しかし、此の劇の最初の一行から入念に描かれてある彼の性格から見れば、彼が死に面して惡るびれず、いい覺悟と度胸を示した（第四幕第一場の法廷に於ける彼れの申立參照）やうに、生に會してさう浮立つであらうとは思はれない。彼は友人等の目的の成功を見て心から喜んだであらうが、しかし最後の幕切れで、彼等と一緒に手を繋いで踊つたであらうとは想像せられない。彼はそれほど變り者であり、そして徹頭徹尾所謂喜劇中の人物にはできてゐない。しかも彼は劇の主人公であり表題人物ではあるが、事實その中心人物ではない。中心人物は昔も今も猶太人（ユウ）のシャイロックである。

一五九八年の七月二十二日附で、『新刊書登錄簿』The Stationers' Registers に出版元ジェームス・ロバーツの名で屆出てある劇に『ヴェニスの商人又はヴェニスの猶太人と呼ばるゝ一書』とあるのは、甚だ興味深い事實である。此の新刊書が我々の『ヴェニスの商人』であることに疑ひはないが、或る批評家は之を以て、作者シェークスピアが一時どの表題にしようか氣迷つた證據であると視ようとするのはどうであらうか？　寧ろ之は一般民衆にとり、商人よりも猶太人がどれほど多く人氣があつたかを示すものであらう。人氣を標準とすれば、此の劇は正に『ヴェニスの猶太人』であるべきことは、同じく猶太人を取扱つたマーローの作が『モールタの猶太人』であるのと同じことである。然し『モールタの猶太人』は『ヴェニスの商人』を書かせる誘因ではあつたが、決してそのモデルではない。行き方はずつと違つてゐる。此の頃のシェークスピアはもう決してマーローの模倣者ではない。若し作者が『ヴェニスの猶太人』を書く積りなら、よほど變つたものが出來てゐなくてはならない。少なくとも彼には無關係の三つの小匣の挿話は取除かれてあつたであらう。かやうに猶太人のシャイロックが中心人物でありながら、劇は『ヴェニスの商人』であり、そして喜劇であることに、此劇を正しく解釋する鍵（キー）があると思ふ。

一體創作家が作をするに當つて、いつとはなく作中の人物に惚込むことは、しばしばあり得ることである。いや、あり得るだけでなく、名著大作に至つては左樣なくてはならぬとさへ思はれる。他の作者の例を引照するまでもなく、わがシェークスピアについて、彼が例へばハムレットを深く強く愛し、ぞつこん此の若き王子に惚れ込んでゐたことは多くの批評家の推定し、論斷すると

ころである。我々が卒讀しただけでも、さうに違ひないといふ印象を受けずにはゐない。しかし作者は只ハムレットだけを愛して、他の第二義的人物は愛せず、無頓着、若しくは憎惡を以て彼等を遇したかといふと無論さうではない。ボローニアスも、墓掘りも、オズリックも、等しく彼の暖いハートに包まれて書かれ、彼等は活き〳〵と躍動してゐる。愛すればこそ、その人々の立場に立つて、その人々をして彼等としての最上の言語行動をなさしめることができるのである。そこに彼の公平さがあり、包容力があり、彼をして實に自然に次ぐの巨大な人物たるの觀あらしめる所以があるのである。

シャイロックの場合に於ても、同じ事が明瞭に觀取されるのである。當時イギリス人全體が猶太人に對して抱いてゐた憎惡輕蔑の雰圍氣から考へても、既記の猶太人ローペスの死刑事件より俄かに猶太人に對する興味が湧き立つた事情から考へても、シャイロックが初め嘲笑輕侮の的として作られたことに疑ひはないやうである。丁度ヴェニスの男の兒等と同じく、娘に財寶を持ち逃げせられてわめき悲しんでゐるシャイロックの後を追うて『玉だ、娘だ、ダキャットだと囃し』（第二幕第八場の中參照）たてるのが當時人一般の猶太人に對する態度であつたであらう。實際このシェークスピアの『ヴェニスの商人』を上演するにさへも、一八一四年天才エドマンド・キーンが大革命を行つて黑髮で現はれるまでは、赤髮、卽ち笑ひの的となるやうな風采で登場する因襲であつた（後掲の記事參照）といふことは、我々に取つて信ぜられないほどの馬鹿げたことである。勿論シェークスピアとても全然時代を超越することはできない。しかし彼が机に向つてシャイロックを描いてゆくうち、次第にこの「憎くむべく笑ふべき」猶太人に惚れ込んで來た。愛せずにはゐられなくなつた。愛して彼の立場に立つて見ると、彼が盲目的に復讐に熱中することは無理もないことを感じて來た。いや、讀者をしてさう感じさせるやうに筆が運ばれて行つた。そしてシャイロックを主要人物とする喜劇『ヴェニスの商人』が出來た。

主人公アントーニオーはヴェニスの大商人で、わが紀の國屋文左衞門、奈良屋茂兵衞などを思ひ起させる冒險的豪商である、勇氣がある、そして何よりも心の大きな寛大な暖い人物である。彼は巨萬の富を作り又有つてゐる。けれど之を贅澤に使用するなど夢にも思はぬらしい。只險を賭して一か八かの勝負そのものに興味を有してゐるのと、得たる富を友人の爲めに用ふる事を樂みとしてゐるらしい。妻もない、子も勿論ない、甚だ身輕な身分である。

先づ初幕を見るに、――此アントーニオーが親友バサーニオーの求婚費にと金の才覺を頼まれ

る。頼まれてあとへは引かぬ。大商人でも手許に金のない事は屢々ある。急場の用に百計盡きて、兼ねて嫌つてゐるジュウのシャイロックに金を借りようとする。シャイロックの方では、日ごろ自分を罵り侮辱する憎いアントーニオーながら、戯談半分に條件として肉一斤をもち出し、貸す約束を結ぶことゝなる。

作者が開幕早々アントーニオーをして己れが何とも言ひしれず非常な「鬱ぎの虫」であることを自白し強調せしめて居るのは、意味ありげな事である。持船の心配からでもない、戀でもない、これこそ天分で、何故に氣が鬱ぐのか、友人にも判からねば當人にも分からない。但だ我々には判かる。卽ち作者シェークスピアの反映の一端である。我々の考へるシェークスピアは、非常に元氣のいゝ、快活な、活力の非常にすぐれた、才のはぢけた人である一方に、どこか一抹の慰め難いメランコリーを持つてをる。アントーニオーは慥にその面影に外ならぬであらう。

穿鑿好きの眼から見ると、どんな作にでも幾何の非難すべきものを發見するであらう。殊に小節に無頓着であつたと想像されるシェークスピアに於ては、それは寧ろ容易であると云はねばならぬ。今此の初幕に於て誰しも第一に氣づくであらう難點は、あの實際的でなくてはならぬ商人のアントーニオーが、なぜあんな肉一磅の抵當といふやうな馬鹿げた契約に同意したかといふことである。この話しの話源と見做されてゐるラテン語原本の Gesta Romanorum といふ諸國異聞集めいたものには、本人が婦人のために使ふ金を才覺する必要上、或る商人（猶太人ではない）から人肉質入れで金を借りることになつてゐるし、之れよりももつと話しがそのまゝであるイタリヤ語原本の Il Pecorone では、自分の熱愛する養子が『ベルモントの貴婦人』に夢中になつたので、彼の爲めに夥しい金錢を費やして盛裝させ、二度までも婦人の所へ送るのであるが、二度とも成功しない。それでもなほ思ひ切り得ない若者の三度目の支度に取りかゝつて金に不足を來たし、遂に己が肉を抵當にして或る猶太人から一千ダキヤットを借用する筋になつてゐる。一層古い話源と思はれてゐるペルシヤの寫本では、美しい妻を持つた貧乏なトルコ男が、貧のあまり、商業の資金にと隣人である富裕の猶太人に借金を申込む。ところがこの猶太人は聊か痴漢であつたと見え、彼の美しい妻に目を着け、萬一を僥倖して男の肉一斤を擔保にさせる。そして此の話しでは、旅に出た男は期限に遲れぬやう人に托して送金するのであるが、それが知らぬまに途中で消費されることになり、大分辻褄はあつてゐる。併しシェークスピアは一見必然性の强さうなこんな話のどれも採用せず、本文に見るやうに、重點を商人の性格と又時の「はづみ」に置

いて、何等破綻を見せずに運んでゐる。

アントーニオーの苦が蟲を嚙みつぶしたやうな嚴肅さ、あの分けのわからない憂鬱性、財產の心配からでも、無論戀愛からでもないメランコリーは、一面當時次第に勢力を得つゝあつた清教徒を描いたものとも見られ、又他面に作者のもつ憂鬱性、偉大な文豪は大抵幾分か持つてゐる憂鬱性、翌年に書かれた『御意次第』のジヤックに見、其翌年の『十二夜』の公爵に見、遂にハムレットに於て頂點に達するメランコリーの反映とも見られて興味があるが、爰では何よりも劇の必要上、彼はあゝした性格の持主とならねばならぬやうである。彼れなればこそ、嚴格に、苛酷なと思はれるほどにも、シャイロックの高利貸的態度を非難し、叱責し、從つて恨み憎みを一身に集めるのである。若し此商人がバサーニオーやグラーシヤーノー型の快活な、浮薄な、多辯な、猪口才であつたなら、どうして後に來るあの素晴らしい法廷の場面が展開しよう！　想像だもつかないことである。その上、彼れのあの憂鬱――金錢よりも友情を大事に思ふと云ふよりも、どだい金錢財寶、否、此世に於ける存在そのものすら、彼に取つて大した問題でなささうに見える。此アントーニオーが、あの無法極まる借用證書を承諾するに至るあの場合の「はづみ」は實に絶妙な筆で書かれ、シャイロックの無限の智慧を示してゐる。彼は單に甘い言葉で欺いて承諾させようとはしてゐない。逆に此商人を怒らせてゐる。立腹のあげく、どうもそんな變な證文に印は捺せぬとは云へなくさせてゐる。こちらは一本氣の、そして深い熱情を胸底に持つてゐる大商人だ。男の意地である。先方の言ひ草が憎ければ憎いほど、否とは云へぬ立場に追ひつめられたのがアントーニオーである。

敵手のシャイロックに至つては、彼は決して屢々舞臺に出ないが、出る時にはその全部を領して、深刻な印象を讀者に又觀客に與へずにはゐない。初幕も最後の第三場になつて、彼は初めて

Three thousand ducats, — well.

『三千ダキャット、はて？』

といふ別に他に意味もないが、それで決して記憶から去らない沈鬱な言葉によつてお目見得をし、そしてアントーニオーに對する深い憎惡の感情、明透極まる智力、獨特な皮肉、苦がい諷刺を縱横に發揮し、複雜な、多方面な、尋常一樣の猶太人でないシャイロックを先づ以て十分に示してゐる。彼がかねてより深く啣むところあるアントーニオーと、一見戲談の如くに、肉一斤を抵當に此貸借を契約したのは、その實内心窃かに考ふる所があるのである。こゝで吾々は翻つて此の猶

太人の眼を以て事物を觀ることを要する。

吾々は自分の目でも充分明瞭に物事を見る事ができない時に、人の目を以て物事を見るのは非常に困難である。しかし我々が文藝を研究し若くは之に親むの効用の一は、人の目を以て物事を見る事を學ぶといふことでなくてはならぬ、人の立場に立つの廣い聰明な心をもつことであらねばならぬ。シャイロックは優ぐれた智力と又强い意志をもつてゐる。彼は勤勉力行の男である。自から稼ぎ自ら儲けて自力自成の人たる事が彼れの願ひである。誇りでもある。然るに此クリスチヤンのやつらは實に遊惰な、贅澤な生活をしてゐる。殊に此貴族のバサーニオーは何んだ。ポーシヤに婚儀を申込むのも、戀か何か知らぬが、あの大きな身代を持つてゐる嗣つぎ娘を手に入れて一生何もしないで、のらりくらりとしようが爲めだけである。しかも申込に行く仕度をするだけの金も持たないヤクザ者だ、そして友人に迷惑をかけ、をれから金を借りてまで、そんな馬鹿げた事をしようとしてゐる。忌々しい奴だ。しかし茲に復讐の絶好機會はある。と、斯うシャイロックは考へる。

シャイロックは何が故にアントーニオーに向つて復讐の志を抱くに至つたか？

第一に、彼は猶太人である一事からだけでも、基督教の民に向ひ强い憎みを持つてゐる。ジュウがその國を失ふてから一千八百年、彼等は天下のさすらひ人となり、天が下に安んじてその身を置くところをもたない。所謂彼等は亡國の民である。國をもたぬといふ事はやがて又世界全體がその國である世界民であるともいへる。今日の目を以て見れば天下に最も著しい世界民は、此猶太人と支那人とそしてロシヤ人であると思はれる。彼等は國家といふものに團結して生存する權を欲しないのか許されないのか、兎に角彼等は國家を超越して只自己でどこへ行つても生存し得る素質と訓練とをもつてゐる。國がないが故に賴むところは智力と金である。智慧と金にのみ由つて生存の安固を求める。今日ジュウが世界の富を支配すると云はれてゐるのは、あまり過言でないかも知れない。

兎に角今から三四百年前まではジュウは天下の浮浪徒となつて行くところ卑まれ、蹴られ、唾せられ、凡ての自由を奪はれ、彼等でさへも生きる權利は有つてゐる筈なのに、生きる手は金を貸す外に何もする事を許されないのである。或時は彼等はキリストの十字架像にキスして改宗を强ひられるか、さなくば燃え上る薪の中に飛込まねばならなかつた。憎いキリスト教徒といふ考へは、彼等の髓の髓、骨の骨まで浸み込んでゐる。時があれば復讐してやりたい。それはユダヤ人すべての熱情であるが、その人種の熱情を一身に引受けてゐるかのやうなのがシャイロックであ

る。彼は人種的な復讐の爲めにその枯れた體が火の柱のやうに燃える。

第二に、彼はアントーニオーが殊にジュウの高利で金貸すのを難じ、從つて高利貸を業としてゐるジュウの生存を危うする（第一幕第三場參照）のに對し、どうしても戰はねばならぬ立場にある。私は金と其の利子の事は分からない。社會主義は之を不可といふ。やはり程度問題ではないか。經節を借りて其まゝ返へすでは、いけない。借と禮、それの組織化が利子。しかし所謂る金を「まわし」何もしないで座食する事が人間の誇りでもないやうである。

第二幕に入つて、バサーニオーは借りた金で身仕度をして、ベルモントのポーシャ邸に乘込み、外國の貴族や領主など多くの立派な求婚者が三つの匣の籤を當て損ねて落選した後を受け、最も有望な候補者となる。

扨バサーニオーがベルモントへの旅行はほんの數日の離別としか考へられぬのに、アントーニオーの訣別の有樣はどうであらう！　一體アントーニオーの如き沈鬱な人物は兎角偏窟に、皮肉に冷酷にさへも成りがちであるが、アントーニオーはさうでない。やはり南國イタリーの人間だといはうか、それともルネッサンスの子だと云はうか、非常な熱情家である。一種變態的なと云つてもよいほどの情熱を藏してゐる。彼はすべて友人に對して寛大で又親切であるが、彼のバサーニオーに對する感じは又別物であるらしい。若しサラリーノ（アントーニオーとバサーニオーの友人）の噂さ話しが掛値ないところと見ると、

……

And, even there, his eye being big with tears,
Turning his face, he put his hand behind him,
And with affection wondrous sensible
He wrung Bassanio's hand; and so they parted.

『……さういひつゝも、眼を涙ではらし、顏をそむけ、手ばかり後方（うしろ）に廻し、あふれる許りの愛情をこめて、バサーニオーの手を握り締め、それから二人は別れたよ。』（第二幕第八場の中）

とあるのは、何となく同性愛とでもいふやうなものゝ無意識的潛在を想像させるに十分である。かうした感じがかうした人物にあることは決して珍しくはないではないか？

此劇の女主人公格のポーシヤは二十四五歳の若い美しい婦人。非常に智力にすぐれてゐる。全

く一介の遊冶郎たるバサーニオーには過ぎた立派な婦人である。若し此「ヴェニスの商人」を、情性と、智性との衝突の劇と見、常に人情のみを以てするアントーニオーが情性を代表し、常に理智や理窟一片にのみ動くシャイロックを智性の代表者と見れば、ポーシヤはよく此兩者を調和し得てハートも暖くして而かも智にすぐれた人に出來てゐる。此すぐれた婦人にも、妙な過去の束縛がある。そして彼女はそれに柔順である。

黄金作りの函には「われを選ばん者は衆人の熱望するものを得む」、銀製の函には「われを選ばん者は其身相應のものを得む」、鉛の函には「われを選ばん者は其所有物總てを與ふるか又は冒險せざるべからず」との銘があり、其中の一にポーシヤの似顔畫が入つてをる、それを選び當てた者は彼女を我がものとすることを得るといふので、彼女の結婚の運命も一に此れによつて決するのである。

ポーシヤと三つの函――金、銀、鉛。全くお伽噺の世界だが、又考へれば今日の結婚法は矢張り此話そのまゝの方法ではないか。當人選擇の機會は殆どなく、選ばれたが最後そこに二人の運命は定まつてしまふ。あまりに合理的でない。も少しは理窟に適つた結婚の方法はないか。自由結婚にも幾多の弊は伴ふが、しかし今少し當事者達に互に知るの機會、又選擇する自由がなくてはならぬ。處女の誇りとは何か？　それは、ほんとに自分のハートに滿足し得るものを選ぶといふ事を外にして他にあるか？

しかし此處には其れと全く異なつた實例がある。死んだ父の意志にさへも從順に服從しようとするポーシヤの反對に、シャイロックの一人娘ゼシカの自由結婚の實行が其れである。無論主要な人物でないから審かに描かれてはないが、これ又珍しくも呑氣といはうか、ハートの冷たいと云はうか、父にシャイロックをもつことを恥ぢ（第三場參照）、そして父の堅い誡めを何とも思はないで、父の仇かたきとも考へてゐる基督教徒のローレンゾーと戀に陷り、父の不在に乘じて、多くの金銀財寶を盜み出し、此男とかけ落ちしてしまふ。不思議にいやな婦人に出來てゐるが、喜劇だけにそれが深い痛みとしては發展しない。同じ二階の下ながら「ローミオーとジューリエット」と大反對のいやしい場面（ローミオーとジューリエットが露臺の上と下で「互に見かはす顔と顔」をやつた如く、第六場でゼシカは少年の服裝で自家の樓上に現はれローレンゾーと密會（あひびき）し駈落の打合せをする）がある。但しこゝでも情愛の點ではクリスチヤンもジュウもない――にくいのは名だけ――といふ事は示してゐる。

此家出はどうしても謂れのないことで、戀だと云つてしまふ外に理由のつけやうはない。一體猶太人は傳統的に親孝行で、只形式的な我々日本人とは違つて、家長を尊敬することは他民族に見られないほど眞實である。そして猶太人たる事を離脱しようといふ考へなど毛頭ない人々である。結局ゼシカも作者方寸中の一傀儡、一道具であつたのであらう。此挿話のために、シャイロックの磨く短刀もそれほど兇惡に見えず、否寧ろ無理もないとさへ同情せしめるのであるから。

父シャイロックの身になつてみるがよい。家には娘の外に妻もなければ、他にその心を暖めるものは一人もない。冷い金や銀に心を置いたのが、抑も彼の過ちといはゞいへるが、その娘に金銀を引つさらつて駈落ちせられれば、もう外に何の望みがあらう。それに彼が友人チューバルに逢ひ娘を探索しても手がゝりのない事を知つての歎き。彼はすべての惱ましい心をアントーニオー復讐の一事で晴さうとするのに無理があらうか。

次に第三幕に進んで、ベルモントに乗込んだバサーニオーは鉛の箱を選んだところ、中にポーシヤの肖像畫があつて、目出度く選に入る事になる。彼が運試めしの選擇をなすべく小函を見て思案の最中に、音樂の吹奏につれて

Tell me where is fancy bred,
Or in the heart, or in the head?
How begot, how nourished?
　　Reply, reply.
It is engender'd in the eyes,
With gazing fed; and fancy dies
In the cradle where it lies:
　　Let us all ring fancy's knell;
I'll begin it, —Ding, dong, bell.

浮いた心はどこで芽を吹く？
胸の中か、頭の中か？
どうして生れて、どうして育つ？
答へろ、答へろ。
浮いた心は眼の中で生える。
見てゐるうちは太りもするが、

見なけりや生れた鎧で死ぬ。
浮いた心の弾ひ鐘を、
さあ鳴らすぞ、デーン、ドーン、ベル。

といふ歌が唱はれるが、此「虚榮の挽歌」とでもいふべきものが――若し彼れに少しでも働く腦髓があれば――金銀の函を棄てゝ鉛の函を選ばせる十分の暗示であることは云ふまでもない。この配偶は亡き父の意志にも叶ひ、又自分のハートの選擇にも叶つたので、之れほど目出度い事はない。或はポーシヤは父の遺志にかこつけて、うるさき求婚の拒絶を圓滿にする方法としたのかも知れない。

但し此バサーニオーといふ漢、學者で軍人との觸込みながら、どう考へても、アントーニオーの友情に値ひする人物でもなければ、賢明美貌のポーシヤの愛人又は良人たるにはなほさら適しない遊蕩兒たる以上の何ものでもない。かく云ふは決して筆者の嫉妬心ではないであらう。しかし戀は盲目だといひ、思案の外だといはれ、又駿馬痴漢を乘せて走るのが世間の常態だとすれば、之も致方ない。且つ後の緊密周到な悲劇に於てさへ、第二義的人物は輕ろく、ぼかして描かれてあるのであるから、まして此の喜劇時代に書かれた喜劇に、それほど細かく追及することは無用であらう。

かくて、ポーシヤ邸では一家笑ひさゞめき、いよいよ婚禮の取極めをしようとして居るところへ、ヴェニスから書面來着、月にむら雲といはうかアントーニオーの破産、ジュウに返金不可能、シャイロックは用捨なく證書通り胸の肉一片を要求するといふ報知を受けた。笑ひは忽ち深い溜息と變つた。しかし賢明なポーシヤは直ぐさま今は夫のバサーニオーに、シャイロックに借財を拂ふべき金を持たせてヴェニスに引かへさせる。自分も一計あり、其從弟で兼ねて法學に明かなといふ令名高きパデュア市のベラーリオー博士に人知れず密かに使をやり、法曹服を借受ける。

同じ幕第一場に於て、サラリーノがシャイロックに

Why, I am sure, if he forfeit, thou wilt not take his flesh; what's that good for?

『無論、あの方が拂へないからつて、お前さん、まさか肉を取りやしまいね。肉が何になる?』

と問ふのに應へて

To bait fish withal: if it will feed nothing else, it will feed my revenge. He hath disgraced me, and hindered me of half a million; laughed at my losses, mocked at

my gains, scorned my nation, thwarted my bargains, cooled my friends, heated mine enemies; and what's his reason? I am a Jew. Hath not a Jew eyes? hath not a Jew hands, organs, dimensions, senses, affections, passions? fed with the same food, hurt with the same weapons, subject to the same diseases, healed by the same means, warmed and cooled by the same winter and summer, as a Christian is? If you prick us, do we not bleed? if you tickle us, do we not laugh? if you poison us, do we not die? and if you wrong us, shall we not revenge? If we are like you in the rest, we will resemble you in that. If a Jew wrong a Christian, what is his humility? revenge. if a Christian wrong a Jew, what should his sufferance be by Christian example? why, revenge. The villany, you teach me, I will execute: and it shall go hard, but I will better the instruction.

『魚を釣る餌になる。腹の滿る役にはならなくつても、俺の復讐の腹癒せにはなる。あいつ、俺に恥をかゝせ、五十萬程儲けそくなはせた。俺が損をすれば笑ひ、俺が儲ければ嘲弄する、俺の國の者を輕蔑し、俺の商賣の邪魔をし、俺の友達には水をさし、俺の敵には焚きつける、そしてそれは何の爲めかといふに、俺が猶太人だからだ。猶太人には眼はないのか、猶太人には鼻や耳や口はないのか、四肢五體はないのか、感覺も感情も情慾もないのか？ 基督教徒と同じ食物を食べ、同じ武器に傷つき、同じ病氣に罹り、同じ方法で治り、同じ夏冬で冷されもし暖められもしないのか？ 俺達だつて、突かれれば血が出るのだ、擽られれば笑ふのだ。毒を盛られれば死ぬのだ。そして非道い目に逢はされれば復讐せずにゐられないのだ。俺のすべてが同じなら、その事だつて同じだぞ。若し猶太人が基督教徒に不正な事をした場合、基督教徒の道は何だ？ 只もう復讐だ。若し基督教徒が猶太人に不正な事をした時、基督教徒をお手本にしたら俺達の持前の堪忍はどうすればよいのだ。無論たゞ復讐だ。惡黨根性はお前さん達が仕込んでくれた、俺は實行するだけだ。やるからには教訓以上にしてのける料簡だぞ。』

といふシャイロックの臺詞は、隱忍屈從の猶太人全體からして、不合理な僞善なクリスト教徒に向つて放つ矢として、理の當然でもあり、痛烈でもあり、悲壯を極めた一文である。此邊は散文で書いてある。シエークスピアの筆法では、散文は多くは滑稽な、世話に碎けた對話に用ひられるが、又感情の非常に興奮した場合にも使用せられる。つまりさうした場合、韻律の多少の技巧が

之をそのまゝ寫す邪魔になるのであらう。(「沙翁の作品」の章中「表現の形式」の項參照)。

それから少し後に、同族人テューバルに揶揄せられ、駈落ちした娘の見付からぬ事と失はれた財寶を悲しみ憤る涙と、アントーニオーの失敗を聞いて兇惡な喜悅を感ずるやゝヒステリックな笑ひと、兩者の交錯した情熱の亂れは、他に容易に類例を見ない偉大な場面である。

同じ幕の第三場で、債務不履行で入牢したアントーニオーが、牢番の情けによつて出牢を許され、此猶太人に向つて最後の示談を求めんとするが、彼は法律の文面により文字通りの裁判を要求して一歩も讓らない場面は、一面にアントーニオーも滿更手を盡さぬでもなかつたことを示すと同時に、他面にシャイロックの「折れはしても曲げはせられない」鋼鐵の意志を語るだけのほんの僅かの道具に過ぎぬ。

やがて第四幕に移つて、第一場——有名な法廷の大場に入(はひ)つてゆく。

此法廷の場の裁判の仕方は、今日の裁判法の眼から見ると妙なものに相違ない。男に化けて法律家となつて出廷したポーシヤは裁判官か、辯護人か、わけが分らない。しかし我々はそんな事は少しも問題としようとしない。大岡越前守式の裁判で充分である。我々の全幅の興味は二つの智力の大角力に集中せられる。

此場について見逃がせないのは、心憎いばかりの作者の用意周到さで、あれほど優秀なシャイロックの智力も、復讐を思ふ鬼となつた一念に暗くなり弱くなつたことである。シェークスピアは、あらゆる道具を用ひて同情を猶太人に集中せしめて置くものゝ、彼の復讐、彼の文字通りの法の適用强請を是認はしなかつた。之を一つの技巧としても此上ないものと云はねばならない。

法廷でバサーニオーが元金三千兩を倍にして償還すると言つても、シャイロックは「わしは受取らない、證文通りにするのだ」と頑として聽容れぬので、ポーシヤは

The quality of mercy is not strain'd,
It droppeth, as the gentle rain from heaven
Upon the place beneath: it is twice blest;
It blesseth him that gives and him that takes:
'Tis mightiest in the mightiest; it becomes
The throned monarch better than his crown;
His sceptre shows the force of temporal power,
The attribute to awe and majesty,

Wherein doth sit the dread and fear of kings;
But mercy is above this sceptred sway;
It is enthroned in the hearts of kings,
It is an attribute to god himself;
And earthly power doth then show likest God's
When mercy seasons justice. Therefore, Jew,
Though justice be thy plea, consider this,
That in the course of justice, none of us
Should see salvation: we do pray for mercy;
And that same prayer doth teach us all to render
The deeds of mercy. I have spoken thus much,
To mitigate the justice of thy plea;……

慈悲は餘儀なく施すべきものではない。
慈悲は靜かに雨が天より地に落つるが如く
おのづから降るべきである。慈悲には二重の祝福がある。
卽ち施す人を祝福し、又受くる人をも祝福する。
いと力あるものに更に力を加へる、君主にとりて
冠よりも似つかはしいのは憐みの心だ。
王者の笏は地上の權力を示し、
その威力は廣大無邊である。しかし慈悲は
其笏の權勢よりも優つてゐる。
そは王者の胸の奥深く王座を占め、
神みづからにふさはしい德である。
而して憐みの心を以て正義を和ぐる時、王者の道は、
神の道にかなふのだ。それ故猶太人よ、
お前は頻りに正義をのみ求めるが、これをよく考へて貰ひたい、——
卽ち正義ばかりで裁判したならば、
誰あつて救はるゝ者はあるまい。我々は日頃憐みを求めて祈つてゐるが
祈りそのものが、我々に憐みの實行を

教へてゐる。わしがかく多くの言葉を費すも
正義一點張りのお前の申立を和らげる爲めである。
と慈悲を勸說するばかりでなく、あまりに條文の適用を强要すると危險だぞといふことを暗示し
てゐる。

It is so. Are there balance here to weigh the flesh?

『その通りだ。……重さを計る秤はあるか？　肉の重さを？』

此の時平生のシャイロックであれば、一ポンドに過不及ない事を要求せられることに氣づくべきで
ある。しかし彼は有頂天になつて『用意して居ります』I have them ready と文字通りに答へ
るだけである。そこで若い裁判官はもう一度注意を促してゐる。——

Have by some surgeon, Shylock, on your charge,
To stop his wounds, lest he do bleed to death.

『シャイロック、そなたの費用で外科醫を呼んで置きなさい。傷口を縫はないと、出血の爲
めに死ぬやうなことがあつてはならないから。』

今度こそ彼は眼を見張つて裁判官の顏色を伺ひ、『さては』と思ひ返へさねばならぬ所であるが、
もう復讐が尺寸の間に迫つてゐるとのみに暗くなつた彼の智力は、この明々白々の言葉さへ理解
しない、却つて「證文にない」と逆襲してゐる。その「證文に指定して」ないことが危險なのだ
が、彼は遂に最後の好機を逸してしまつた。かくて「此證文では一滴の血も汝に與へて居らぬ、
肉一ポンドと明瞭に書いてある、よつて證文通り肉一ポンドを取るがよい。併し肉を切取るに當
つて血は一滴も流してはならぬぞ。又肉は多からず少からず正確に一ポンドだけ切取らねばなら
ぬぞ。萬一微塵にせよ一ポンドより多くても少くても、汝は死刑に處せられ一切の家財は沒收さ
れる」と裁決されて、シャイロックは自己の論鋒を以て自己の主張を完全に衝き破られてしまひ、
「私に元金だけ與へて歸らして下さい」と悄げ「たゞ私の元金だけ戴けますまいか」と哀訴して
は「汝に與へらるべきものは一身の危險を冒して取るべき科料(肉一斤)の他に何ものもないぞ」
とハネられ悲鳴を揚げるより外なきに至り、そしてポーシヤにしては、決してだし拔けに屁理窟
の判決を下だしたわけではないことになる。

老猶太人に取つて此上もない悲劇的な結末も、全體としての喜劇の調子を崩さないやうに、彼
の退場に際して「どうぞお暇を戴きたう存じます、氣分が勝ぐれませぬから」と云はせる以外に
格段に印象深い言葉を與へず、やがて指環の挿話に移つて、成るべく彼を忘れしめようとしてゐ

る作者の手際に、讀者の注意を促して置きたい。

終幕に於ては、新婚の一對の妻と一對の夫とが、前後相次いでアントーニオーもろとも歸邸して、いたづらの指輪の一件から出た無邪氣な二組の夫婦喧嘩・戯談半分の小風波を經た後、一同思ひがけない滿足愉快の場面となる。

大詰に近い所で、ポーシヤがアントーニオーの全然の災厄は虚報であり、三艘の商船が立派に積荷して入港したといふ事實を一通の書簡で知つたといふことを語り、そしてつけ加へて、

You shall not know by what strange accident I chanced on this letter.

『どうした不思議の機會から、此手紙が私の手にはいつたかは、それはお話し致しますまい』と云つたのは、氣になる一句である。普通なら「後刻食事の際にゆる〳〵お話ししませう」とか或はそこで一トわたり經路を話すのであるが、爰では『それはお話し致しますまい』といふ。一體アントーニオーのあらゆる貿易船が失敗に終つたといふ報知は、交通音信不便の當時の事であるから、ほんの噂さ話しや、信用の措けない旅客などの談話から成立するに過ぎないであらう。そこで數艘難破の事實を基礎に、シャイロックが手を廻して全滅と取沙汰せしめ、遂にそれが事實の如く市場で信ぜられるに至つたであらうことは、あながち有り得ないことではない。烱眼なポーシヤは爰に着目し、素早く人を派して實地を調査せしめる勞を取つたのではなからうか？　それを今になつて誇りかに說明することも好まず、又說明して猶太人への憎惡を重ねて强くすることも、彼女の願ひでなかつたであらうと思はれる。

「奥さん、あなたのお蔭で一命も財産も拾ひました」

とアントーニオーが最後の感喜感激の一言には、千萬無量の心からの感謝の意が籠つてをる。

ポーシヤが沙翁劇中でもあまり比類のない素晴らしい創作であることはいふまでもないので、ゼームスン夫人の言葉を借用すると、「男にならずに逞ましい智力を示した唯一の女性」である。彼女がネリッサ相手に大口をきいたり、賢いばかりでなく、華美好みで、遊びずきであるのは、作者が彼女をツンとすました男らしい女にすまい用意であらう。

此劇は一面から見れば、基督教對猶太教の衝突を示すものとも謂はれる。猶太教の神は恐ろしき、假借しない神、復讐の神、目を以て目を、齒を以て齒を償へと教へた宗教である。正しいものはあく迄保護するが、同時に正しからざるものには極罰を課する。之に反抗したのがキリストの

教へで、「王なる神」に對して「父なる神」、正義一點張の神に對して、慈悲の神を說いた。どこか陰欝なアントーニオーがキリスト教、就中淸教徒の象徵と見れば、シャイロックはいふ迄もなくユダヤ教の權化である。

此二つの對抗に對して第三者がある。それはポーシヤである。ポーシヤも慥かに智力の人である。ジューリエットのやうに只情火に燃える女ではない。けれど決して冷たくない。冷たくないどころでなく、非常に溫味のあるすぐれた婦人である。で、ポーシヤの人生觀は何であるかと考へると、此現世を立派に而かも樂しく送るといふ事である。彼女は健康な體質と健全な頭腦を持つてゐる、生の要求の非常に强い婦人である。戀、音樂、詩、生の悅樂、それ等が彼女の生命である。上にアントーニオーを以てキリスト教を、シャイロックを以て猶太教を代表せしめたと云つた事が許されゝば、ポーシヤはギリシヤ主義卽ちヘレニズムの代表と見られる。無論作者がそんなつもりで書いたのではなからうが、さうした解釋を入れて一層意味を深重に解することは、よいことである。

賢明なポーシヤに良人選擇の權利が絕對になく、あまり智力を用ひて行動するらしくもないゼシカが、自由結婚の標本を見せてゐることは、作者に意味あつてのことではないらしいが、何となく面白い對照である。

財產の點にも、不思議に三樣の對立がある。アントーニオーの財產は海にある。勇ましい事であるが、いつ失はれるか分らない。シャイロックのは黃金と寶石とである。どこへでも隱せるし、又いつ持つて逃げる事も出來る。同時に盜まれる憂もある(それで娘に持逃げされた)。ポーシヤのは安全な土地の不動產である。

最も興味のあるのは、此劇の演出の變遷である。前述の如く、此劇はユダヤ人を嘲笑する爲めに出來たので、シャイロックはいつも赤鬚を着けて喜劇役者が演じたのである。そしてシャイロックが一人娘に駈落ちせられ、金は盜まれ、耐へ難き惱みに手をふりしぼる每に、見物は笑つたものである。此演出法に一大革命を與へて今日のシャイロックとしたのは旣に言つた如くエドマンド・キーン(Edmund Keen)である。斯樣に嘲笑の的となつてゐたものが、同情の中心となり得る事は、實に作者シェークスピアの魔法のやうな力を示すもので、シェークスピアも、エリザ朝の人であればジュウに對する考へは他の人と多く異つてゐなかつたのであるが、只彼れの異つてゐたのは誰にも豐かな同情の涙を注ぎ得る事であつた。ジュウとても人間である。人間であれば血も